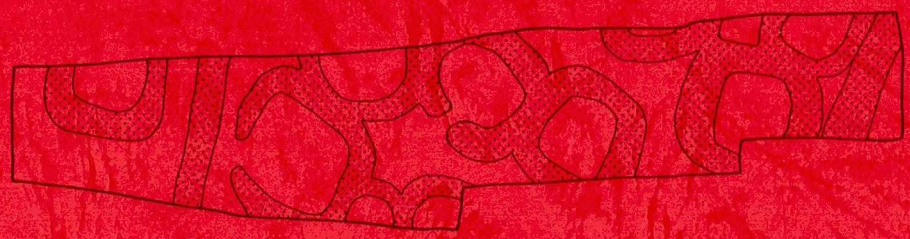
門真市埋蔵文化財発掘調査報告書　第６集

古　川　遺　跡

－（仮称）門真市保健福祉センター建設に伴う発掘調査報告書－



１９９９年１月

門真市教育委員会

序　文

門真はかつて水郷地帯で蓮根が広く栽培されていました。水路や池が至るところにあり、都市化が進んだ現在も、市内各所でかつての名残を認めることができます。

今回発掘調査した古川遺跡は、弥生時代の集落遺跡として周知されてまいりましたが、調査により弥生時代の遺構を明らかにしたことはありませんでした。

このたび、古川遺跡の北に接するところで(仮称)門真市保健福祉センターが建設されることになり、試掘調査をしたところ、古川遺跡がこのあたりまで拡がることが確認され本調査が実施されることになりました。

発掘調査では、遺構・遺物は希薄であろうとの当初の予想を覆し、弥生時代前期末から中期の方形周溝墓が群をなし10基以上発見され、遺物も弥生土器、木製品、石器等がコンテナに10箱以上出土するという幸運に恵まれました。

これまで弥生時代の門真は、河内潟に臨む細長い砂州上に集落が点在することは理解されてきましたが、実態はほとんどわかりませんでした。今回の調査成果により、古川弥生集落の一端が具体的に見えてきたように思います。

この報告書が、地域歴史の理解に役立つことを願っておりますとともに、学術研究の分野でも活用いただければ幸いと存じます。最後に、発掘調査に際し多大なご協力を賜りました関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成１１年１月

門真市教育委員会

教育長　中　谷　　決

例　言

1．本書は、(仮称)門真市保健福祉センター建設に伴い、門真市福祉政策課より依頼を受けた門真市教育委員会が門真市御堂町20番地で発掘調査を実施した、古川遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査面積は695㎡であり、調査費用は全額門真市が負担した。

3．本調査にかかる文化財保護法の規定に基づく通知書等は、次のとおり提出済みである。

　○法57条の３にかかる通知書　平成10年１月28日付け 門教史第45号

　○法98条の２にかかる通知書　平成10年10月20日付け 門教史第32号

4．現地調査は、平成10年10月５日に着手し、平成10年11月１日まで、実働19日で終了した。

遺物整理･報告書作成作業は平成11年１月31日まで実施した。

発掘調査は、門真市教育委員会市史編さん課技術職員宇治原靖泰が担当し、角南聡一郎（奈良大学大学院文学研究科博士後期課程）　松田朝由（奈良大学文化財学科４回生）　見持浩一（奈良大学文化財学科４回生）　垣本明美（奈良大学文化財学科４回生）　小木谷晃与（国学院大学史学科４回生）　森本和茂（奈良大学文化財学科２回生）　川口泰幸（奈良大学文化財学科２回生）　伊藤 淳（奈良大学文化財学科２回生）　岡本智子（奈良大学文化財学科１回生）　矢田知子の参加があった。

出土遺物の整理・報告書の作成は宇治原靖泰　角南聡一郎　松田朝由を中心に、矢田知子　真弓庸子　岡本智子の参加があった。

5．発掘調査業務は、安西工業株式会社に委託した。

6．調査の過程で、次の方々から貴重なご教示を賜った記して感謝の意を申し上げる。

水野正好（奈良大学学長）　西山要一（奈良大学文学部文化財学科教授）　三好孝一（(財)大阪府文化財調査研究センター）　西田敏秀（枚方市教育委員会）　大竹弘之（枚方市教育委員会）　塩山則之（寝屋川市教育委員会）　濱田延充（寝屋川市教育委員会）

7．調査に際して、門真市福祉政策課・建築課・総合政策課、地元自治会の方々より深甚のご理解とご協力を賜った。記して感謝の意を申し上げる。

8．本調査にかかわる遺物・写真・カラースライド・実測図等は門真市教育委員会において保管している。広く利用されることを希望する。

凡　例

1．遺構実測図・本文中の標高はすべてO.P.(O.P.±０m＝東京湾中等潮位－1.30mを基準とする。)＋で標記した。

2．弥生土器・土師器・陶磁器の断面は原則として白抜き、須恵器は黒塗り、瓦質土器はトーンで表した。

3．遺物実測図の番号と写真図版の番号は対応する。

4．執筆分担は文末に記した。

本文目次

序文　　門真市教育委員会 教育長　中谷　決
例言　凡例
第１章　調査に至る経過……1
第２章　位置と環境……2
第３章　調査の概要
　第１節　基本層序……5
　第２節　調査日誌抄録……5
　第３節　遺構……5
　第４節　出土遺物……23
第４章　考察
　第１節　初期区画墓と土器棺墓……36
　第２節　方形周溝墓の埋没過程……52
　第３節　古川遺跡採集資料の紹介……57
第５章　結語……60

挿図目次

図１　調査位置図……1
図２　門真市の位置……2
図３　河内湾Ⅰの時代(約7000～6000年前)……2
図４　河内湾Ⅱの時代(約5000～4000年前)……2
図５　河内潟の時代(約3000～2000年前)……3
図６　基本層序柱状図……5
図７　遺構全体図……7～10
図８　方形周溝墓１・２・３　平面図・断面図……11
図９　方形周溝墓４・５　平面図・断面図……12
図10　方形周溝墓６・７・８　平面図・断面図……13
図11　方形周溝墓８　土器出土状況・方形周溝墓９　平面図・断面図……15
図12　方形周溝墓10　土坑１～４　平面図・断面図……16
図13　土坑５～７　不明遺構１・２　溝１　平面図・断面図……17
図14　溝１　遺物出土状況……19
図15　土坑８　溝２・溝３　平面図・断面図……20
図16　古川遺跡の遺構変遷……21
図17　方形周溝墓　出土遺物(１)……24
図18　方形周溝墓　出土遺物(２)……25
図19　各遺構・包含層　出土遺物……27
図20　溝１　下層出土木器……29

図21　溝２　出土遺物……30
図22　上層　出土遺物……31
図23　区画墓と土器棺墓の分布……38
図24　弥生前期の区画墓集成（１）……43
図25　弥生前期の区画墓集成（２）……44
図26　近畿地方の弥生時代前期土器棺（１）……45
図27　近畿地方の弥生時代前期土器棺（２）……46
図28　周溝埋没までに長期間機能した方形周溝墓の諸例……53
図29　周溝墓の開削から消失までの様々なパタン概念……54
図30　古川遺跡出土遺物……58

表目次

表１　古川遺跡出土遺物観察表……34・35
表２　初期区画墓一覧……40・41
表３　近畿地方の弥生前期土器棺墓一覧……41

図版目次

図版１　方形周溝墓検出状況（１）
図版２　調査地全景（西から）
図版３　方形周溝墓検出状況（２）
図版４　方形周溝墓検出状況（３）
図版５　土器棺検出状況
図版６　方形周溝墓検出状況（４）
図版７　溝検出状況
図版８　土層断面・遺物出土状況
図版９　遺物出土状況
図版10　方形周溝墓出土遺物（１）
図版11　方形周溝墓出土遺物（２）
図版12　方形周溝墓・溝３・土坑出土遺物
図版13　溝１・土坑・包含層出土遺物
図版14　溝２出土遺物
図版15　上層出土遺物
図版16　古川遺跡採集資料

第１章　調査に至る経過

平成９年９月27日、大阪府教育委員会文化財保護課と門真市建築課より市内御堂町の府営古川橋住宅で遺跡が発見されたとの連絡を受け、現地に駆けつけたところ、大阪府による埋蔵文化財の試掘調査がおこなわれており、住宅内で東西２カ所のトレンチが調査されていた。

東側のトレンチは、遺物・遺構の出土はなかったが、西側のトレンチでは遺物・遺構の出土をみた。

当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である古川遺跡に接していたため、古川遺跡が北に拡張するものとして対象地の西半分が周知されるに至った。

平成10年１月、遺跡拡張部分に、(仮称)門真市保健福祉センターが建設されることになり、市長から埋蔵文化財発掘通知書が提出されたため、原因者と協議を行い、調査範囲確認のため２月に府営住宅内の５カ所を試掘調査したところ、南東隅のトレンチから弥生土器が出土した。再度協議をし、大阪府の試掘トレンチと今回弥生土器が出土したところを結んだ695㎡を調査対象として、平成10年10月５日～同年11月１日まで発掘調査を実施した。

調査は、地表より約0.8mまでと府営住宅の基礎等の撹乱を機械掘削し、以後、人力に切り替え掘削をおこない、遺構・遺物の検出に努めた。

（宇治原）

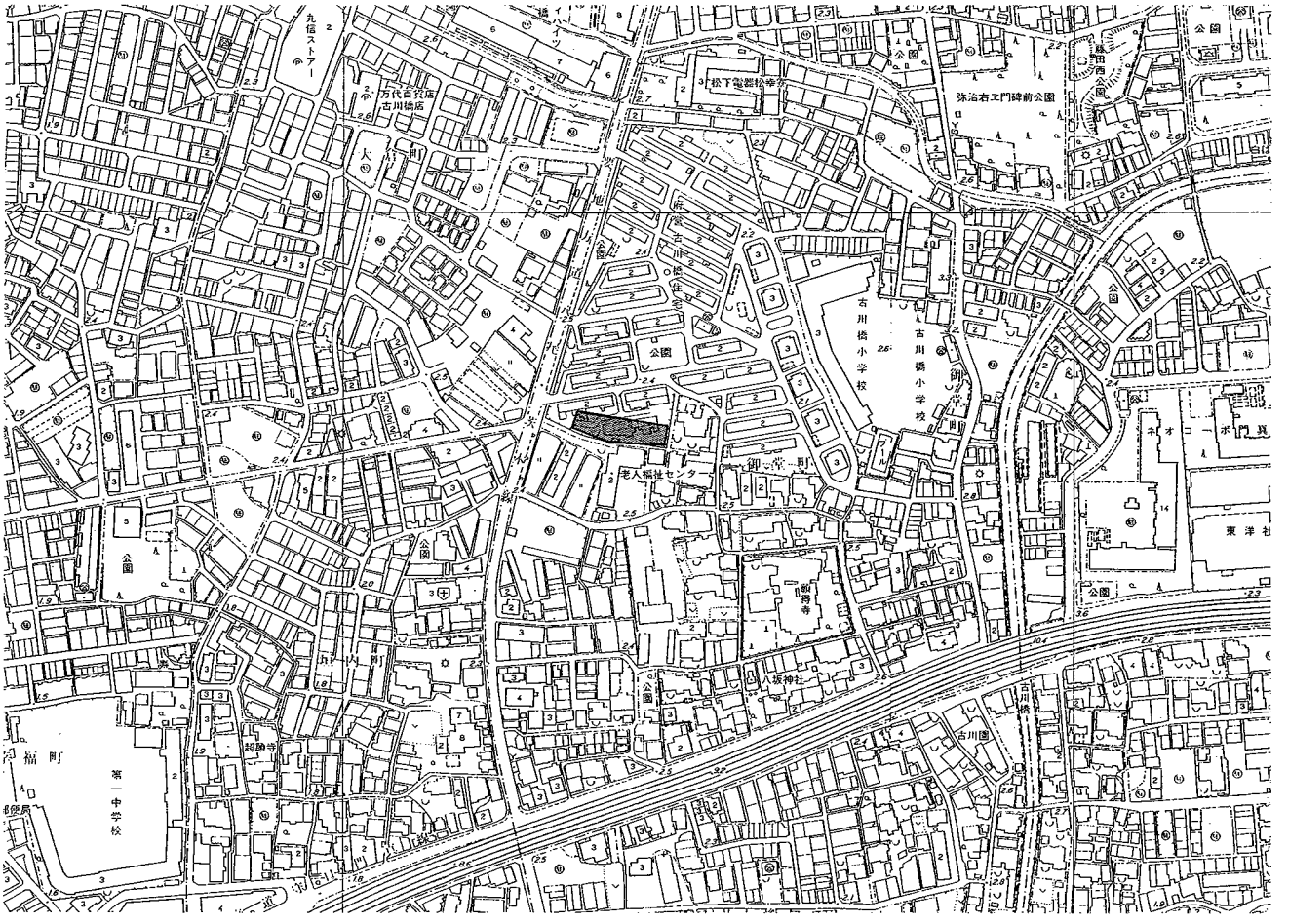


図１　調査位置図

第２章　位置と環境

大阪府の東北部に位置する門真市は、面積12.28㎢、人口約14万人で、守口市・寝屋川市・大東市・大阪市鶴見区に接し、海抜０～４ｍ程度の平坦地で占められている。

門真は中世以来農村として発展した地域で、市制施行した昭和38年頃までは、名産の蓮根の栽培が至るところでみられる水郷地帯であった。しかし大阪市に近いことから、大正11(1922)年に大同電力大阪変電所が建設されたのを契機に、松下電器産業が昭和８(1933)年、天辻鋼球製作所が昭和14(1939)年に進出するなど製造業が発達しているが、交通が便利なため流通業も盛んである。

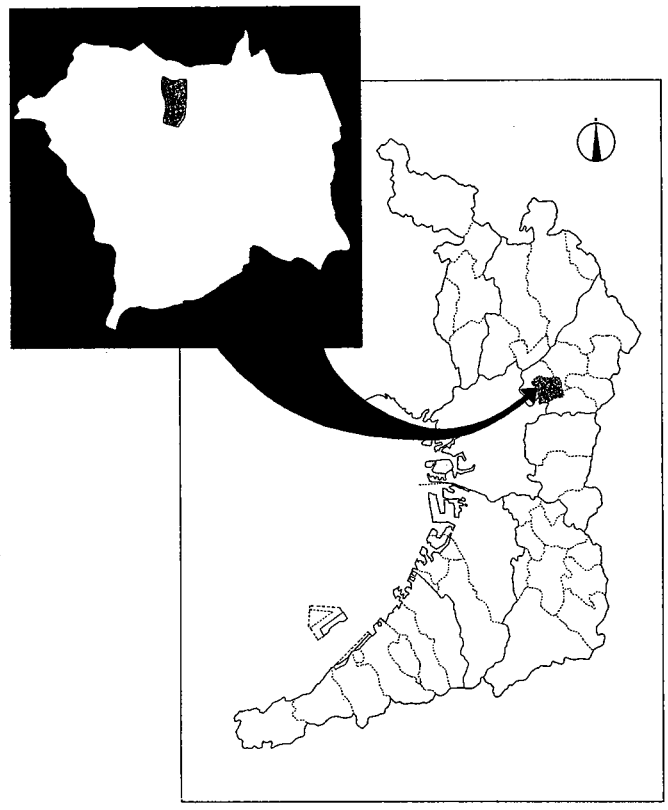


図２　門真市の位置

旧石器時代

市域において旧石器時代の資料は現在のところ知られていない。全域が厚い沖積層に覆われているためである。大東市深野南のボーリングデータは、ウルム氷期最盛期の河内平野深野地域には、湿地が広がり、気候は現在より寒冷なことを示しており(梶山・市原 1972)、門真市域も似通った環境と考えることができる。

縄文時代

縄文時代前期(約7000～6000年前)になると状況は一変する。「縄文海進」により急激に海面が上昇し、「河内湾」が出現したと考えられている。河内湾は、門真市域はもとより、北は高槻市、南は八尾市、東は生駒山麓に達していたようである(梶山・市原 1985)(図３)。

約5000～4000年前になると沿岸砂州が発達し、門真市域にも「水走沿岸州」が延び始め、やがて一部が離水(陸化)を始めていたと考えられる(梶山・市原

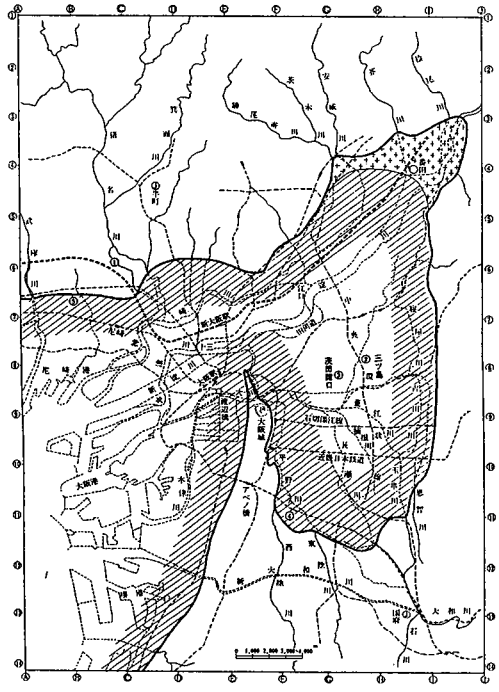


図３　河内湾Ⅰの時代（約7000～6000年前）梶山・市原1985より

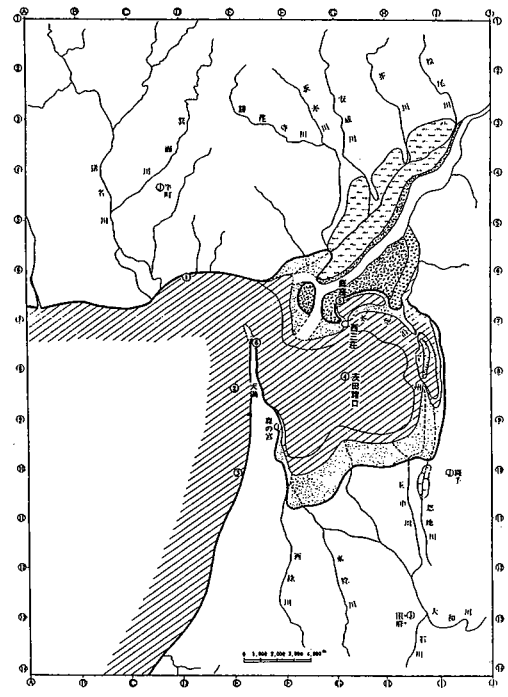


図４　河内湾Ⅱの時代（約5000～4000年前）梶山・市原1985より

1985)（図４）。

西三荘・八雲東遺跡では、縄文時代後期(約3500年前)の北白川上層式Ⅲ期の深鉢と浅鉢が出土したが、当時は定住生活が始まっていたというより、乾期に離水するわずかな陸地で、魚・貝・水鳥などを獲る期節的な生活をしていたのではないかと考えられている(宇治原・植田 1993)。

弥生時代

次に市域に生活の痕跡が認められるのは、弥生時代前期(約2300年前)になる。

この頃の市域の状況は、河内湾の陸化がさらに進んで、汽水の「河内潟」となっていた(梶山・市原 1985)(図５)。水走沿岸州は離水が進み、細長く延びた砂州上に集落が形成されていたと考えられる。

市域において周知されている遺跡は、西三荘・普賢寺・古川・大和田遺跡がおもなものである。

西三荘遺跡は、中期前半から後期の土器が出土し、土器の量は市内の遺跡で最も多い。

普賢寺遺跡は、前期後半から中期の遺跡で、昭和60年の調査で弥生前期後半の壷が遺構を伴って発掘されている（宇治原1990)。 また昭和59年の調査では弥生中期の土器とともに石包丁が出土している(福田 1984)。 古川遺跡は、前期後半から後期の遺跡で、弥生時代全期間継続するのは市域ではここだけである。また、前期の壺は、明らかに生駒西麓産であり、中期段階でも他地域産の土器が認められる。

大和田遺跡は、昭和38年に銅鐸三個が京阪電車大和田駅改修工事中に、地下２ｍの砂の中より発見されたことで有名である(三木 1977)。 銅鐸は、いずれも弥生時代中期に鋳造された小型で偏平なつくりのもので、四区袈裟襷文と無文のものがある。

三ツ島遺跡では、昭和37年に弥生時代後期の土器とともに、くり舟が製作途中の状態で発掘されている(上田ほか 1963)。

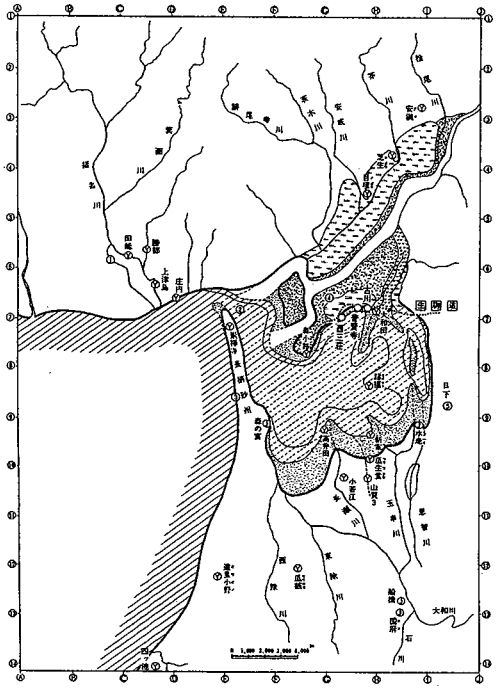


図５　河内潟の時代（約3000～2000年前)梶山・市原1985より

古墳時代

古墳時代の河内は、古墳が多く造られた地域であったが、門真市域で古墳は確認されていない。普賢寺遺跡の円筒埴輪片(宇治原 1990)が古墳に伴うものか今後の調査が待たれるところである。

しかし、市域には「記紀」の記録に残るわが国最古の堤防工事で築かれた「茨田堤」と伝える堤防の遺構が、宮野町・常称寺町に唯一残り、大阪府指定の史跡になっている。

古代

市域の奈良・平安時代の遺跡は、西三荘・橋波口・本町・普賢寺・古川・宮野遺跡で資料が出土しているが、出土量は少ない。

おもな遺構は、橋波口遺跡の須恵器の甕を棺に転用した奈良時代の墓と、曲物を井筒にした奈良から平安時代の井戸であるが、ここからは平安時代の祭祀用とみられる大量の土器・桃核等(宇治原 1992)も出土し、また普賢寺遺跡では伊勢の斎宮跡出土のものとそっくりな顔を描いた墨書土器(宇治原 1991)が出土し、斎宮茨田真手御宿所が堂山町黄梅寺付近にあったという伝承とあいまって、斎宮群行と関連がないものか注目されるところである。

（宇治原）

【引用・参考文献】

上田宏範ほか 1963「門真町三ッ島遺跡発掘調査概報」『大阪市立博物館報』2　大阪市立博物館

宇治原靖泰 1990『普賢寺遺跡発掘調査概要』1　門真市教育委員会

宇治原靖泰 1991『普賢寺遺跡発掘調査概要』2　門真市教育委員会

宇治原靖泰 1992『門真市橋波口遺跡発掘調査概要』門真市教育委員会

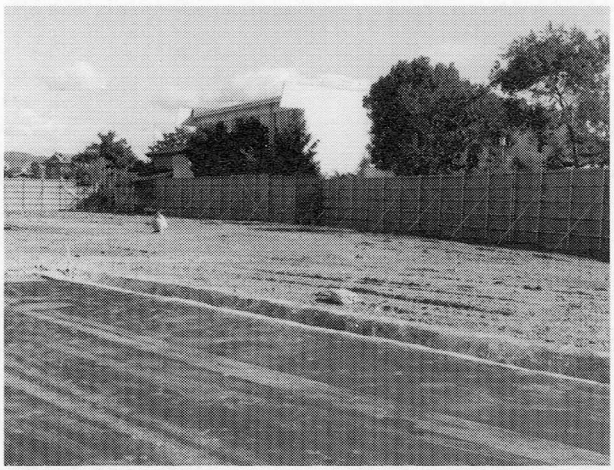
宇治原靖泰・植田正幸 1993『西三荘・八雲東遺跡発掘調査概要』門真市教育委員会・守口市教育委員会

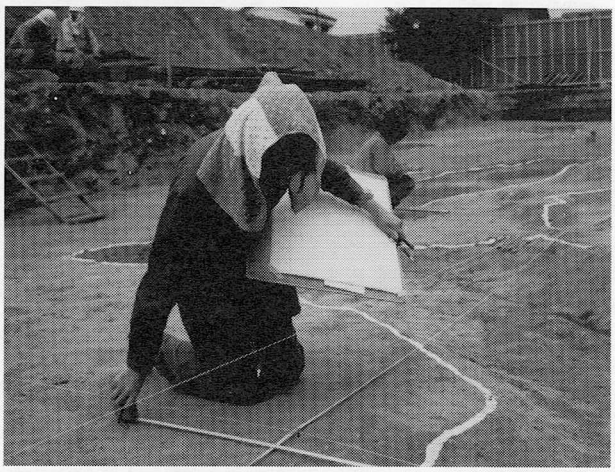
梶山彦太郎・市原 実 1972「大阪平野の発達史」『地質学論集』7

梶山彦太郎・市原 実 1985『続大阪平野発達史』古文物学研究会

福田英人 1984『普賢寺遺跡発掘調査現地説明会パンフレット』大阪府教育委員会

三木文雄 1977「終末期の偏平小形銅鐸に就いて」『國學院雑誌』78－9　國學院大學





第３章　調査の概要

第１節　基本層序

当遺跡の層序は、調査区の西側と東側で大きく異なった様相を呈していた。これは東から西へと序々に地形が低くなり、やや湿地状になっていたところを、後世上層が削平を受けたために、このような状態になったと考えられる。そこで、今回の調査地の基本層序として、東地区と西地区二つの柱状図を示す。東地区の基本層序は大別して５層よりなる。(1)は現代の盛土(2)は灰色(N3／0)粘質土(近現代耕土)(3)は黄褐色(2.5Y5／4)粘質土(古墳時代以降の遺構面のベース)(4)灰色(5Y5／1)砂礫混じり砂(弥生時代前期末～中期の遺構面のベース)(5)暗赤灰色(10R4／1)細砂(地山)。西地区は基本層序は大別して6層よりなる。(1)は現代の盛土、(2)は灰色(N3／0)粘質土(近現代耕土)(3)は黄褐色(2.5Y5／4)粘質土(古墳時代以降の遺構面のベース)(4)灰色(5Y5／1)粘質土(弥生時代前期末～中期の包含層)(5)オリーブ褐色(10R4／1)粘土(弥生時代前期末～中期の遺構面のベース)(6)灰色(7.5Y4／1)砂質シルト(地山)。

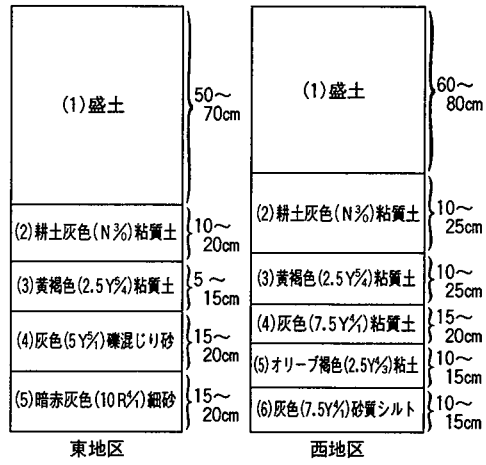


図６　基本層序柱状図

（角南）

第２節　調査日誌抄録

平成10年10月５日（月）くもり　調査区の機械掘削開始。

10月９日（金）くもり　調査区中央部付近で、方形周溝墓１を検出。

10月12日（月）くもり　機械掘削終了。調査区中央部付近で南北に走る溝１、方形周溝墓２等を検出。溝１上層から古墳時代後期の須恵器が出土。

10月19日（月）くもり　溝１下層から弥生前期末の土器や鋤が出土。

10月20日（火）くもり　調査区東部は古墳時代の包含層が乗っていたため、これを除去。南北に走る溝２を検出。

10月22日（木）曇／晴　調査区東部の遺構検出、遺構掘り。

10月25日（日）くもり　遺構掘り。割付の杭を打つ。

10月28日（水）は　れ　写真撮影の準備作業。午後、南から全景写真撮影

10月29日（木）は　れ　西から全景写真撮影。平面実測用の割付をする。

10月31日（土）は　れ　平面図1/20で作成。断面図に土色を入れる。

11月１日（日）曇／晴　平面図にレベルを入れる。図面等をチェックし現地調査終了。

（宇治原）

第３節　遺構

おもな遺構としては、弥生時代前期末から中期初頭に築造されたと考えられる方形周溝墓が９基と、中期後葉と考えられる１基の計10基の方形周溝墓群と、それをとりまく弥生時代前期末から中期初頭までに掘られた区画溝と考えられるものが検出された。

弥生時代までの遺構は、古墳時代後期(６世紀)までに削平されていたが、方形周溝墓の周溝と溝の一部は

奈良時代(８世紀)頃まで機能していたようである。

【方形周溝墓１】（図８・図版１，３，４，８）

調査地の少し西よりで検出されたもので、墳丘の平面プランは長辺約8.0m、短辺約6.4mの長方形を呈する。また周溝の外側までを含めた規模は、南北10.0m、東西9.0mである。これは今回の調査で発見された方形周溝墓の中では最大規模のものである。

墳丘の盛土は、古墳時代後期(６世紀)には削平されており、埋葬施設についても、墳丘が削平されていたこともあって、その痕跡さえも確認できなかった。

周溝は、陸橋状に溝が途切れる墳丘北西部コーナーを除いて、残存の幅0.7～1.0m、深さ0.5～0.6mで墳丘の周りを巡る。南周溝は一部を方形周溝墓２・６と共有している。周溝内には黒褐色砂質シルト等が堆積していた。周溝内から供献土器とみられる畿内第Ⅰ様式新段階の壺・甕・鉢が出土した。

【方形周溝墓２】（図８・図版４，８）

方形周溝墓１の南東にあり、周溝を共有しあっている。遺構の大半が調査範囲外となるため、全体の形状や規模は明らかではないが、墳丘の東西の幅3.5m、周溝の外側までを含めると4.0mとなる。

周溝は残存の幅0.2～0.4m、深さ0.5～0.6mで墳丘の周りを巡るようである。北周溝は一部を方形周溝墓１・３と共有している。周溝内にはオリーブ黒色粘土混じり砂等が堆積していた。北周溝で畿内第Ⅱ様式の甕、３号と共有する周溝で畿内第Ⅰ様式新段階の壺が出土した。いずれも供献土器とみられる。

【方形周溝墓３】（図８・図版４，８）

方形周溝墓２の東にあり、周溝を共有しあっている。遺構の大半が調査範囲外となるため、全体の形状や規模は明らかではない。周溝は残存の幅0.4～0.6m、深さ0.5～0.6mで墳丘の周りを巡るようである。東周溝は一部を方形周溝墓２と共有している。共有する周溝で畿内第Ⅰ様式新段階の壺が出土した。

【方形周溝墓４】（図９・図版４）

調査地の中央部付近で検出されたもので、墳丘部分はほとんど削平されており、北・南・西の周溝が部分的に残っていた。墳丘北西部コーナーでは、陸橋状に溝が途切れるようである。北周溝は方形周溝墓６と溝を共有し、南周溝は方形周溝墓５の周溝を切っている。

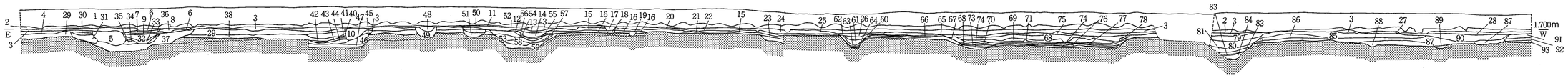
推定される規模は、南北6.0m、東西6.5mで、残存する周溝の深さは0.4m前後である。埋土は、灰色砂及びオリーブ黒色砂質粘土であった。遺物は東・西及び南周溝で供献土器とみられる畿内第Ⅱ様式の壺・甕が出土した。

【方形周溝墓５】（図９・図版４）

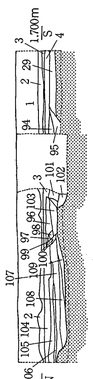
方形周溝墓４の南東で検出されたもので、墳丘部分はほとんど削平されている。遺構の南側の一部が調査範囲外となるため、規模は明らかではないが、墳丘の東西の幅6.0m、周溝の深さは0.3m前後である。北周溝の一部は方形周溝墓４の周溝に切られている。周溝内には黒褐色粘質シルト及び黒褐色粘土が堆積していた。北周溝から土器片を再利用した土製品と供献土器とみられる畿内第Ⅰ様式新段階の壺が出土した。

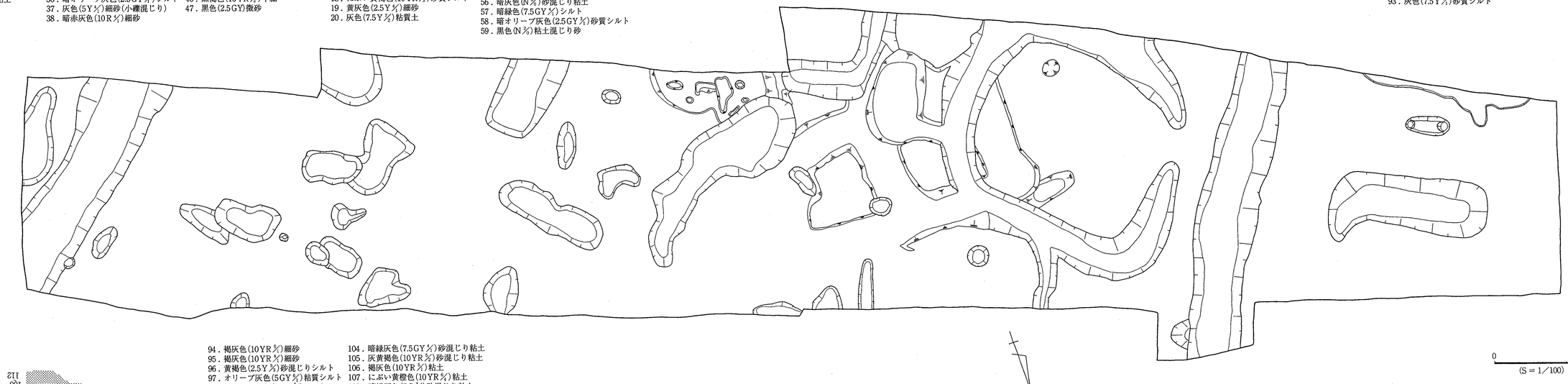
【方形周溝墓６】（図10・図版３，４）

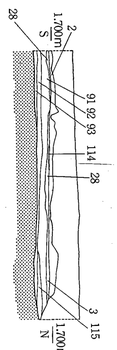
方形周溝墓１と４の間やや北側で検出されたもので、周溝を一部共有している。墳丘部分はほとんど削平されていたが、南西コーナー付近で土器棺が残存していた。土器棺の掘り方は直径0.9mの円形を呈し、残存する深さは0.1mで、埋土は赤灰色砂質粘土であった。土器棺に転用された畿内第Ⅰ様式新段階の壺・甕が出土した。遺構の北側約半分は調査範囲外となり、また南側の一部も府営住宅の基礎で破壊されているため、

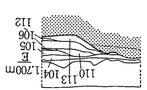


1．盛土
2．暗灰色(N3/)(耕土)
3．にぶい黄橙色(10YR7/2)粘質シルト
4．オリーブ褐色(2.5Y3/3)砂
5．暗灰黄色(2.5Y4/2)細砂(小礫混じる)
6．緑灰色(7.5GY5/1)シルト
7．灰色(7.5Y5/1)シルト
8．灰色(5Y5/1)小礫混じり粘土
9．灰色(7.5Y5/1)シルト
10．褐灰色(10YR4/1)シルト
29．灰色(5Y5/1)礫混じり砂
30．灰色(10Y5/1)砂質シルト
31．暗紫灰色(5P4/1)小礫混じり細砂
32．オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘土
33．暗灰色(N3/)粘土
34．灰色(5Y5/1)細砂
35．オリーブ黒色(5Y3/1)細砂
36．暗オリーブ灰色(2.5GY5/1)シルト
37．灰色(5Y5/1)細砂(小礫混じり)
38．暗赤灰色(10R4/1)細砂
39．明黄褐色(10YR6/6)粘土
40．黄灰色(2.5Y5/1)シルト
41．黄褐色(2.5Y5/3)シルト
42．オリーブ黒色(5Y3/1)砂混じり粘土
43．灰色(5Y5/1)砂質シルト
44．オリーブ黒色(5Y3/1)砂質シルト
45．灰黄褐色(10YR4/2)細砂
46．黒褐色(10YR3/1)中細
47．黒色(2.5GY)微砂
11．明黄褐色(10YR7/6)粘土
12．灰オリーブ色(5Y4/3)砂混じり粘土
13．黄褐色(2.5Y5/3)砂混じり粘土
14．灰オリーブ色(5Y4/3)粘土
15．黒褐色(2.5Y3/2)細砂
16．浅黄色(2.5Y7/3)細砂
17．暗オリーブ灰色(5GY4/1)シルト
18．にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質シルト
19．黄灰色(2.5Y4/1)細砂
20．灰色(7.5Y5/1)粘質土
48．黒褐色(2.5Y3/2)細砂
49．黄灰色(2.5Y4/1)細砂
50．オリーブ黒色(5Y3/2)細砂
51．灰色(5Y5/1)細砂
52．灰オリーブ色(2.5Y5/3)細砂
53．暗オリーブ灰色(5GY4/1)細砂
54．灰オリーブ色(7.5Y5/3)中砂
55．暗灰色(N3/)砂混じり粘土
56．暗灰色(N3/)砂混じり粘土
57．暗緑色(7.5GY4/1)シルト
58．暗オリーブ灰色(2.5GY5/1)砂質シルト
59．黒色(N2/)粘土混じり砂
21．灰色(5Y4/1)シルト
22．黄灰色(2.5Y5/1)砂質シルト
23．暗灰色(N3/)砂質シルト
24．黄褐色(2.5Y5/4)粘土
25．灰オリーブ色(5Y5/3)砂混じり粘土
26．灰黄褐色(10YR5/4)粘土
60．灰黄褐色(10YR5/2)粘土
61．灰色(7.5Y5/1)粘土
62．黒色(10Y3/1)砂混じり粘土
63．灰白色(10Y7/1)粘土
64．オリーブ黒色(5Y3/1)砂(粘土混じる)
65．暗灰黄色(2.5Y5/2)砂混じり粘土
66．黄灰色(2.5Y5/1)粘土
67．黒色(10Y3/1)砂混じり粘土
68．にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質シルト
69．灰オリーブ色(5Y5/3)粘土
70．黄灰色(2.5Y5/1)粘土
71．灰色(7.5Y5/1)粘土
72．暗オリーブ灰色(2.5GY5/1)砂混じり粘土
73．明緑灰色(7.5GY7/1)粘土
74．オリーブ黒色(5Y3/1)砂質粘土
75．灰白色(10Y7/1)丸礫混じり粘土
76．オリーブ黒色(5Y3/1)砂混じり粘土
77．灰色(5Y5/1)砂質粘土
78．灰黄褐色(10YR5/2)粘土
27．暗灰色(2.5Y3/1)シルト
28．暗オリーブ灰色(2.5GY5/1)砂質シルト
79．灰黄褐色(10YR5/2)砂混じり粘土
80．灰色(7.5Y5/1)粘土
81．オリーブ黒色(7.5Y3/2)粘土
82．オリーブ黒色(5Y3/2)粘質シルト
83．暗緑灰色(5G5/1)粘土
84．黒褐色(2.5Y3/1)砂混じり粘土
85．灰黄褐色(10YR5/2)粘質シルト
86．灰オリーブ色(5Y5/3)砂質シルト
87．黒色(7.5Y3/1)粘土
88．灰色(7.5Y5/1)粘質シルト
89．灰色(7.5Y5/1)粘土
90．灰色(7.5Y5/1)砂質シルト
91．灰オリーブ色(5Y4/2)シルト
92．オリーブ褐色(2.5Y5/3)粘土
93．灰色(7.5Y5/1)砂質シルト
114．灰オリーブ色(7.5Y4/2)砂質シルト
115．オリーブ黒色(7.5Y3/2)シルト









94．褐灰色(10YR5/1)細砂
95．褐灰色(10YR5/1)細砂
96．黄褐色(2.5Y5/3)砂混じりシルト
97．オリーブ灰色(5GY5/1)粘質シルト
98．オリーブ灰色(5GY5/1)シルト
99．緑灰色(7.5GY5/1)砂混じり
100．灰オリーブ色(5Y5/3)礫混じり砂
101．青灰色(5BG5/1)砂混じり粘土
102．青灰色(5BG5/1)砂混じり粘土
103．灰オリーブ色(5Y5/3)礫混じり砂
104．暗緑灰色(7.5GY4/1)砂混じり粘土
105．灰黄褐色(10YR5/2)砂混じり粘土
106．褐灰色(10YR4/1)粘土
107．にぶい黄橙色(10YR6/3)粘土
108．暗緑灰色(5G5/1)砂混じり粘土
109．灰色(7.5Y5/1)礫混じり砂
110．にぶい黄色(2.5Y6/3)砂質シルト
111．黄灰色(2.5Y4/1)礫混じり砂
112．暗緑灰色(10G4/1)砂混じり粘土
113．灰オリーブ色(5Y5/3)礫混じり砂

0　4 m
(S＝1／100)

図7　遺構全体図

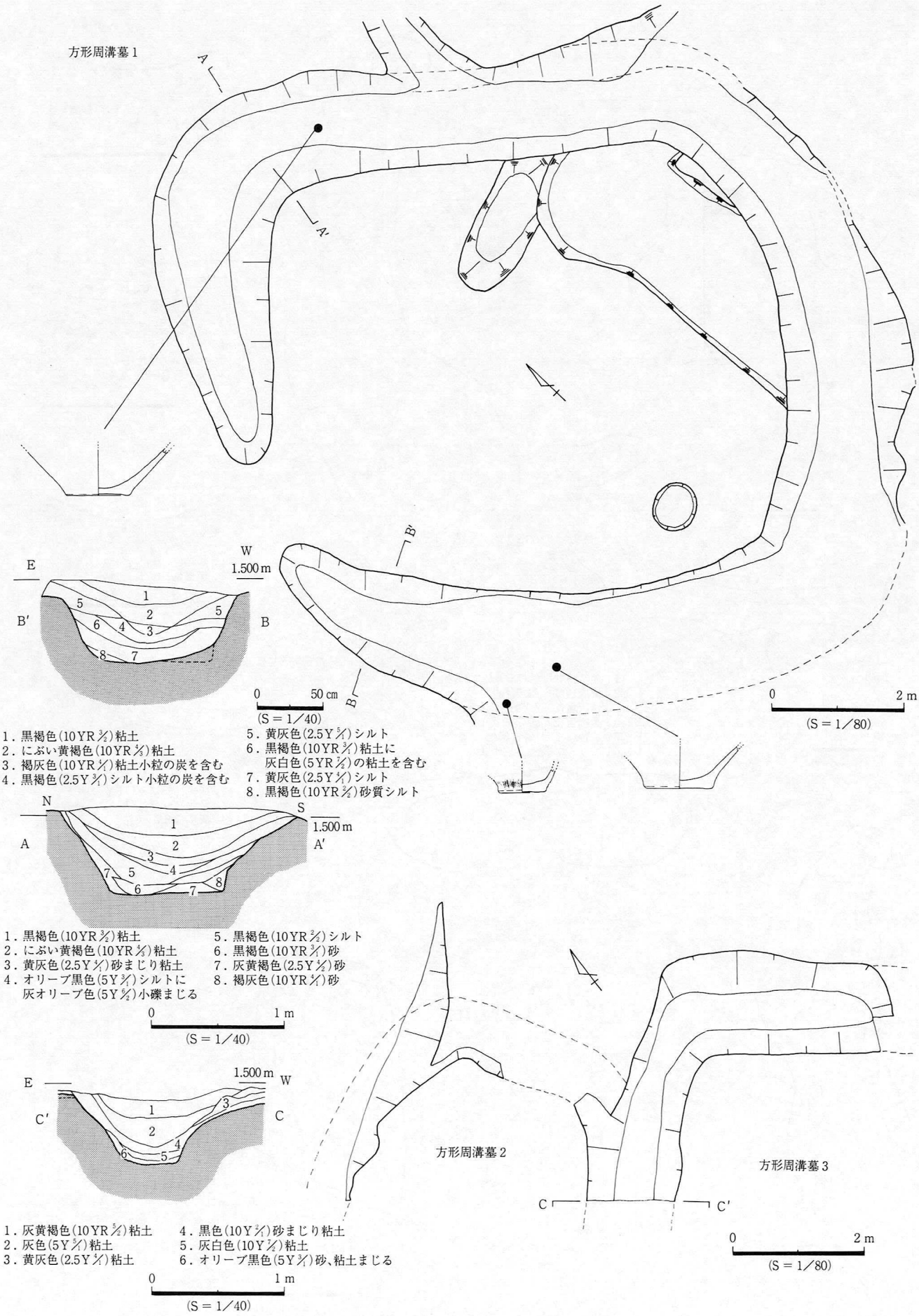


図8　方形周溝墓1・2・3　平面図・断面図

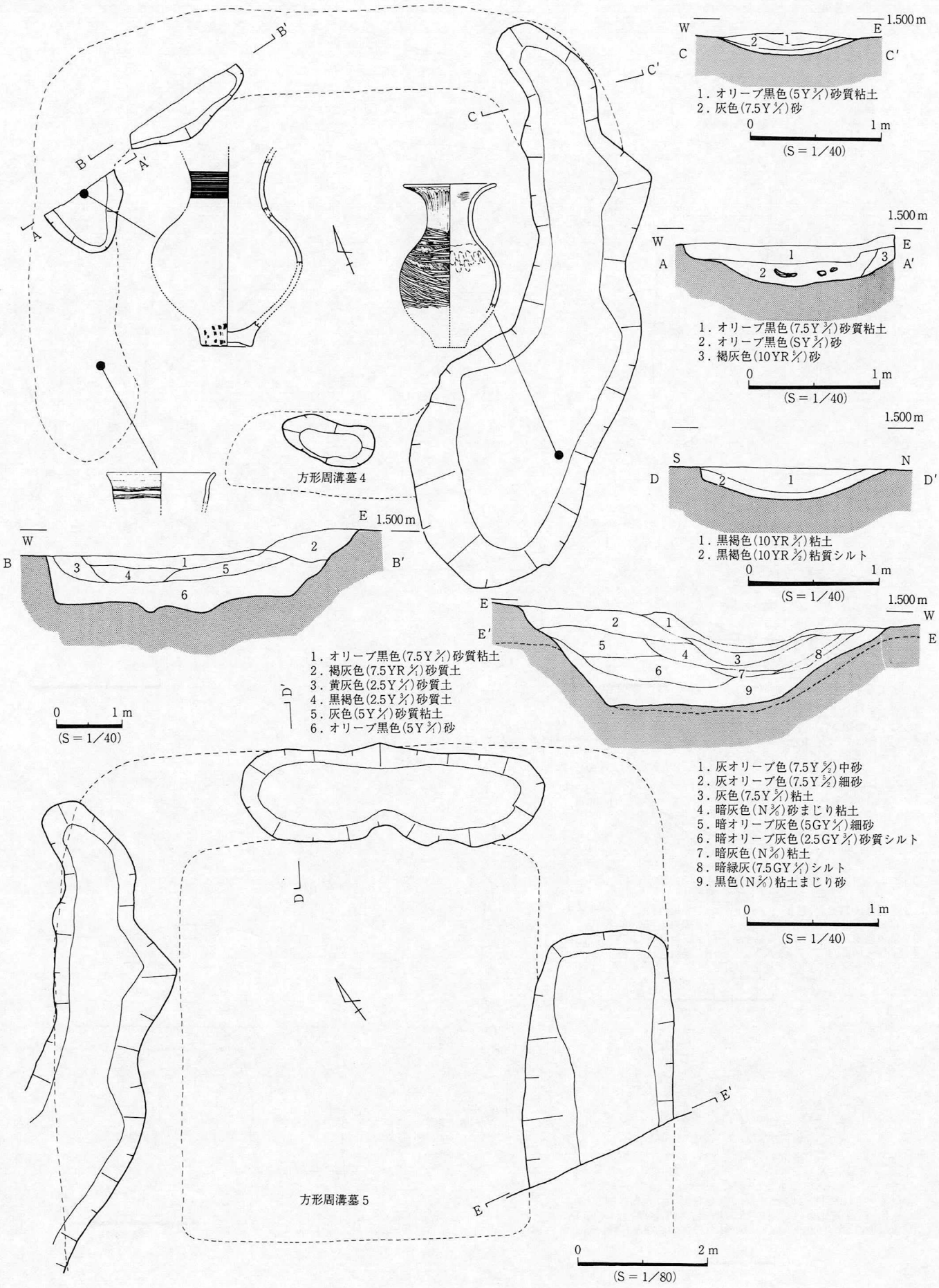


図9　方形周溝墓4・5　平面図・断面図

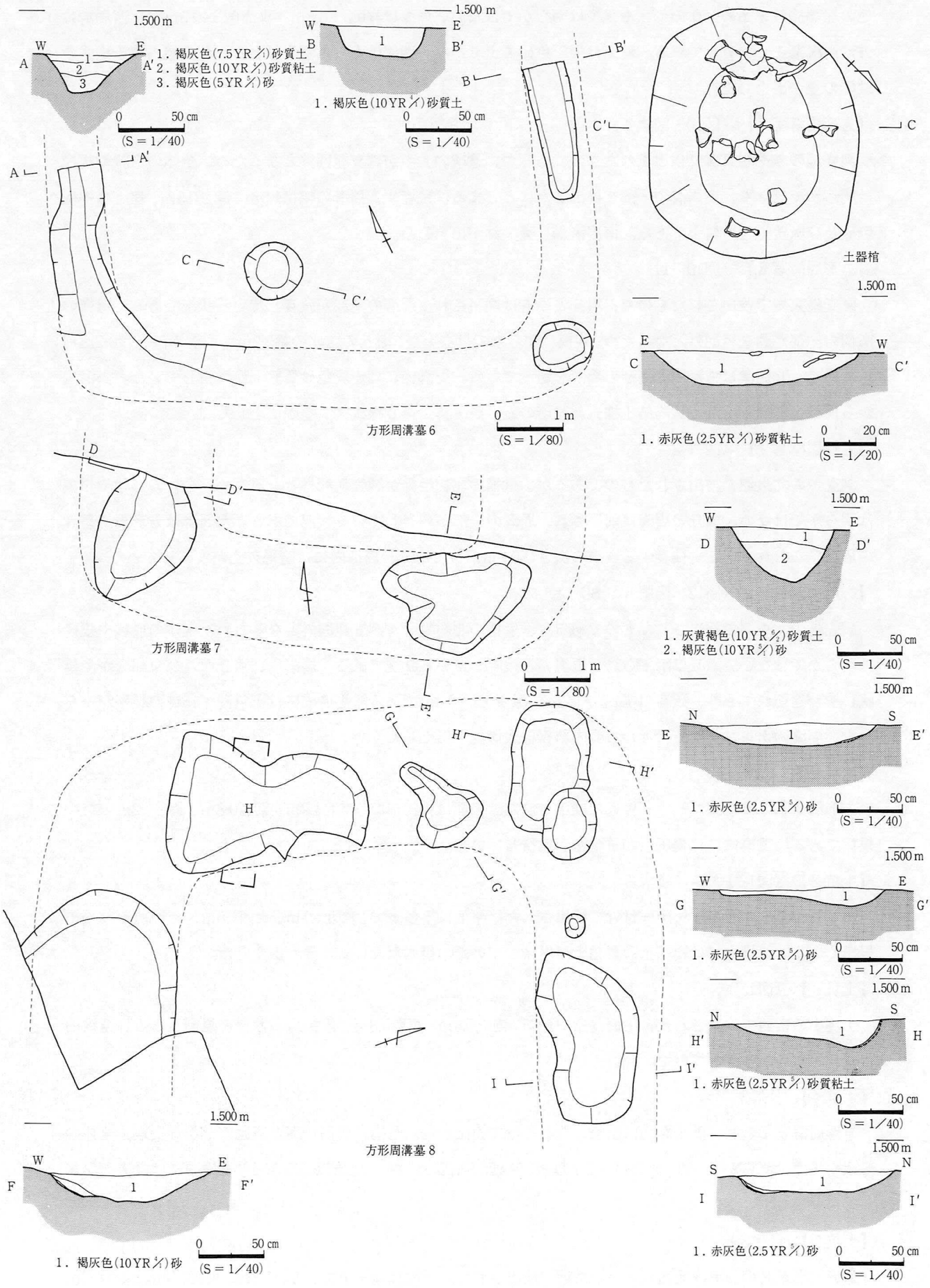


図10　方形周溝墓6・7・8　平面図・断面図

他の埋葬施設を始め全体の形状や規模は明らかではない。周溝は幅0.2～0.8m、深さ0.2～0.5mで、西周溝は方形周溝墓１と共有している。埋土は褐灰色砂質土である。西周溝から供献土器とみられる畿内第Ⅰ様式新段階の甕が出土した。

【方形周溝墓７】（図10・図版４）

調査地のやや北東側で検出されたものであるが、遺構の大半が調査範囲外となるため、全体の形状や規模は明らかではなく、南周溝の一部を検出したにとどまる。残存する周溝の幅は1.3m、深さ0.3m、埋土は褐灰色砂及び灰黄褐色砂質土である。南周溝から甕・鉢が出土した。

【方形周溝墓８】（図10，11）

調査地東側で検出されたもので、墳丘と周溝は削平され、周溝の一部が残存している状況である。遺構の南側の一部が調査範囲外となるため、規模は明らかではないが、墳丘の南北の幅5.2m、周溝の深さは0.2m前後であり、北周溝は方形周溝墓９の周溝を切っている。周溝内には赤灰色砂質粘土が堆積していた。周溝内から供献土器とみられる畿内第Ⅰ様式新段階の壺・甕・鉢・第Ⅱ様式鉢・甕が出土した。

【方形周溝墓９】（図11）

調査地の北東側で検出されたものであるが、遺構の北約半分が調査範囲外となるため、全体の形状や規模は明らかではない。墳丘と周溝は削平され、周溝の一部が残存している状況である。南周溝は方形周溝墓８の周溝に切られている。残存する周溝の深さは0.3m前後であり、周溝内には暗褐色土が堆積していた。

【方形周溝墓10】（図12・図版６，８）

調査地の北東側で検出されたものであるが、遺構の北約半分が調査範囲外となるため、全体の形状や規模は明らかではない。墳丘は削平され、周溝のみ残存している状況である。周溝は、墳丘西及び東部分が陸橋状に溝が途切れており、残存の幅1.0～1.2m、深さ0.5～0.8mである。周溝内には灰色砂等15層の堆積がみられた。周溝の南東コーナー付近から畿内第Ⅳ様式の甕が出土した。

【土坑１】（図12）

方形周溝墓５の北東コーナー付近で検出された。平面は楕円形で、南北1.9m、東西0.8m、深さ0.2m前後の規模である。遺構内には褐灰色砂質粘土が堆積していた。

【土坑２】（図12）

方形周溝墓５の北西コーナー付近で検出された。平面は不整形で、南北1.1m、東西1.6m、深さ0.1m前後の規模である。遺構内には褐灰色砂質粘土が堆積していた。畿内第Ⅱ様式の壺が出土した。

【土坑３】（図12）

土坑１の南西で検出された。平面は楕円形で、南北0.6m、東西0.8m、深さ0.1m前後の規模である。遺構内には黄灰色砂が堆積していた。

【土坑４】（図12）

方形周溝墓１の北、溝１を北に拡張したところで検出した。遺構の西側が調査範囲外となるため、全体の形状や規模は明らかではない。南北1.2m以上、東西0.8m以上、深さ0.3m以上を測る。遺構内には黒褐色シルト等が堆積していた。

【土坑５】（図13）

方形周溝墓８の周溝内北西コーナー付近で検出された。平面は楕円形で、南北1.3m、東西3.0m、深さ0.5m前後の規模である。遺構内には暗赤灰色砂質粘土が堆積していた。サヌカイトチップ及び炭が出土した。

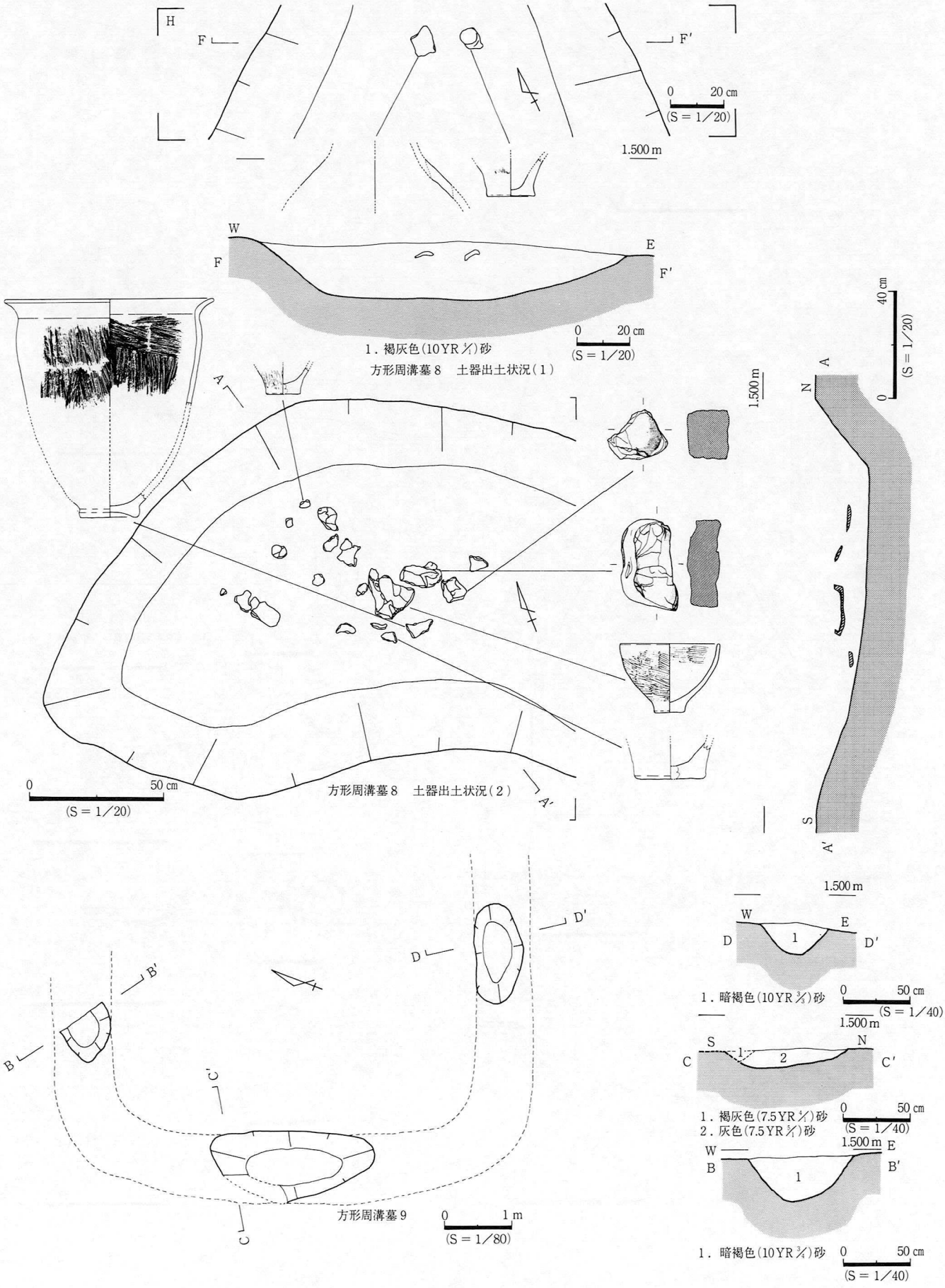


図11　方形周溝墓８　土器出土状況・方形周溝墓９　平面図･断面図

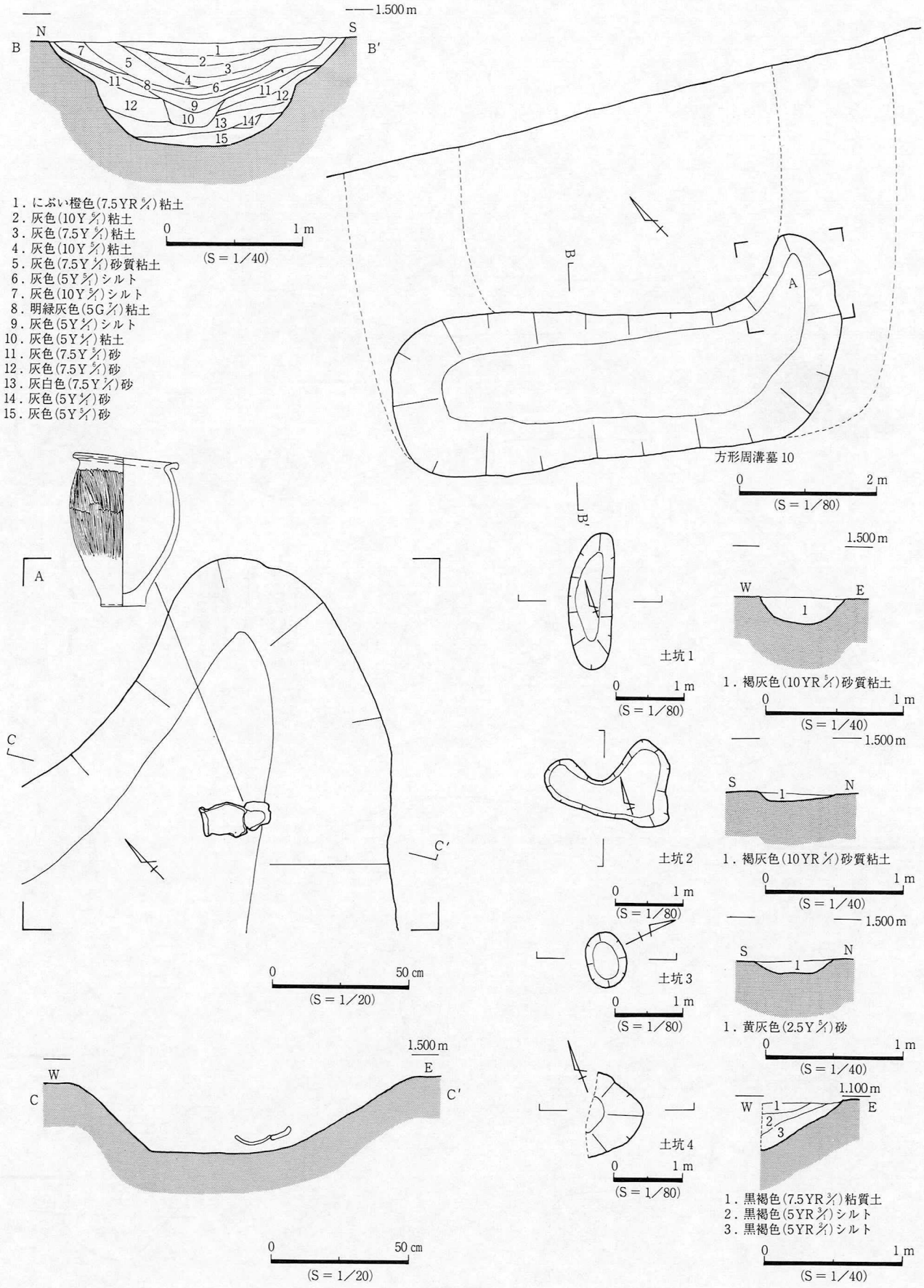


図 12　方形周溝墓 10　土坑 1 ～ 4　平面図・断面図

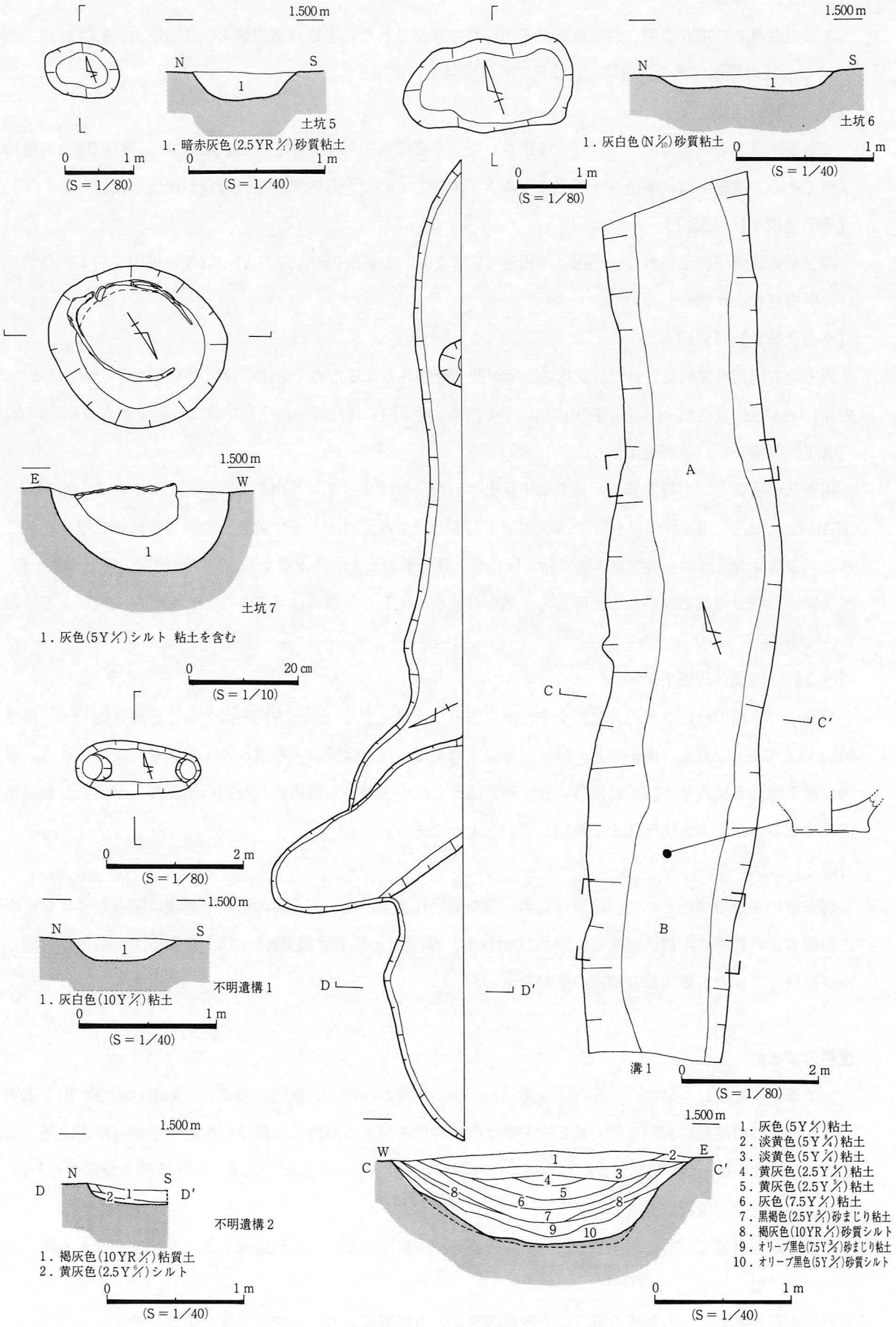


図13　土坑5～7　不明遺構1・2　溝1　平面図・断面図

【土坑６】（図13）

方形周溝墓８の墳丘西端、西周溝を切るかたちで検出された。平面は楕円形で、南北3.2m、東西3.8m、深さ0.1m前後の規模である。遺構内には灰白色砂質粘土が堆積していた。

【土坑７】（図13）

方形周溝墓５の南西コーナー付近で検出された。平面は楕円形で、南北0.2m、東西0.4m、深さ0.2m前後の規模である。遺構内には灰色粘土混じりシルトが堆積していた。畿内第Ⅱ様式の壺が出土した。

【不明遺構１】（図13）

調査地の西側で検出された。平面は楕円形で、南北0.7m、東西1.8m、深さ0.1m前後の規模である。遺構内には灰白色粘土が堆積していた。

【不明遺構２】（図13）

調査地の南西端で検出された。遺構の大半が調査範囲外となるため、全体の形状や規模は明らかではない。南北1.4m以上、東西1.0m以上、深さ0.1m以上を測る。遺構内には褐灰色粘土及び黄灰色粘土が堆積していた。

【溝１】（図13，14・図版１，６，７，８）

調査地の西側、方形周溝墓１と10の間で検出された。ほぼまっすぐな南北方向の溝である。最大幅2.5m、深さ0.7mである。底面は南から北へゆるやかに下降する。埋土はオリーブ黄色小礫混じり砂等11層に細分される。遺物は最下層から畿内第Ⅰ様式新段階の壺、長柄鋤が出土し、上層から古墳時代後期の須恵器蓋・杯、最上層から奈良時代と思われる土師器片、須恵器壺が出土した。遺構は埋まりながらも長期間機能していたようである。

【溝２】（図15・図版７，８）

調査地の東端で検出された。北側をやや東に振るほぼまっすぐな南北方向の溝である。最大幅3.5m、深さ0.5m以上である。底面は南から北へゆるやかに下降する。埋土は灰黄色砂質シルト等３層に細分される。遺物は最下層から畿内第Ⅰ様式新段階の壺、甕が出土した。上層から古墳時代後期の須恵器壺が出土した。遺構は埋まりながらも古墳時代まで機能していたようである。

【溝３】（図15）

調査地の東端で検出された。遺構の大半が調査範囲外となるため、全体の形状や規模は明らかではないが方形周溝墓の周溝の可能性がある。南北2.0m以上、東西1.1m以上、深さ0.2 m以上を測る。遺構内には灰色砂が堆積していた。畿内第Ⅱ様式の甕が出土した。

（宇治原）

遺構のまとめ

まず遺構の変遷についてみてみたい（図16）。 検出遺構の時期は、遺物の項で詳しく述べるが、出土遺物によって五つの時期に大別可能である。Ⅰ期は弥生時代前期末の段階、Ⅱ期は弥生時代中期初頭の段階、Ⅲ期は弥生時代中期後葉の段階、Ⅳ期は古墳時代後期、Ⅴ期は奈良時代以降である。以下遺物の時期をもとに、古川遺跡の時期別遺構変遷をおこなう。

Ⅰ期－方形周溝墓１、方形周溝墓５、方形周溝墓６、方形周溝墓７、方形周溝墓９、土坑２、溝１下層、溝２下層

Ⅱ期－方形周溝墓２、方形周溝墓３、方形周溝墓４、方形周溝墓８、土坑７、溝２下層、溝３

Ⅲ期－方形周溝墓10

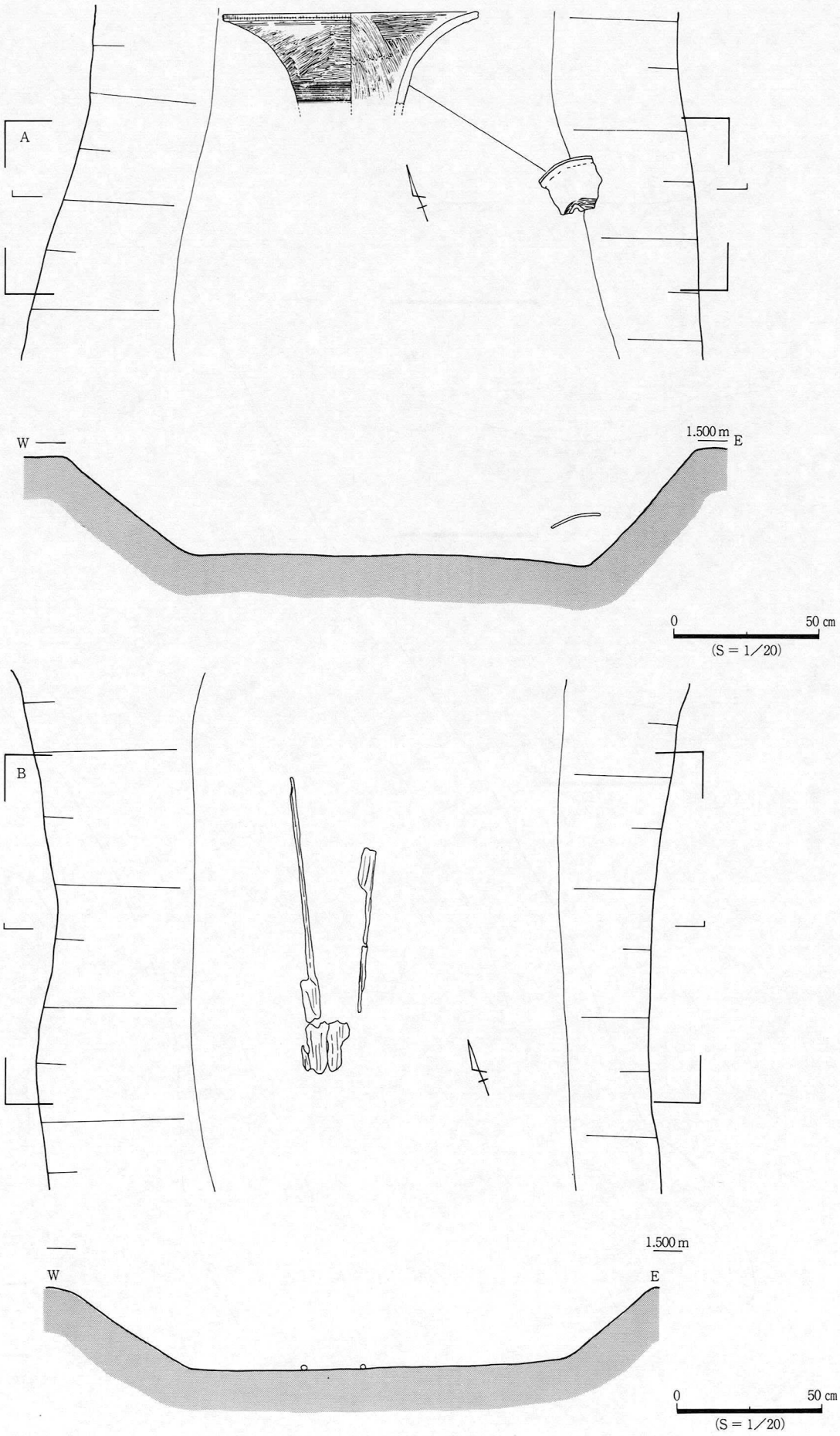


図 14　溝 1　遺物出土状況

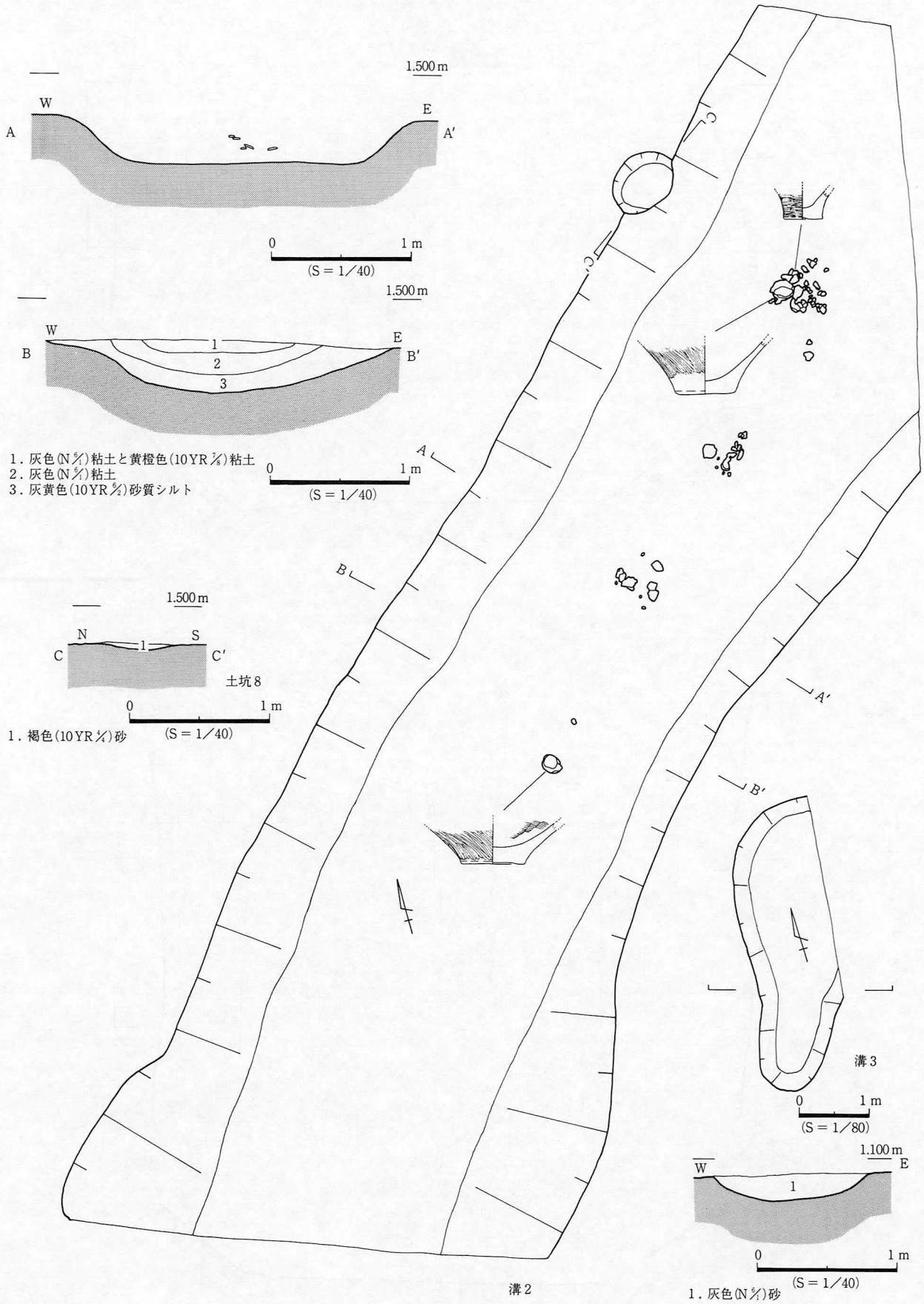
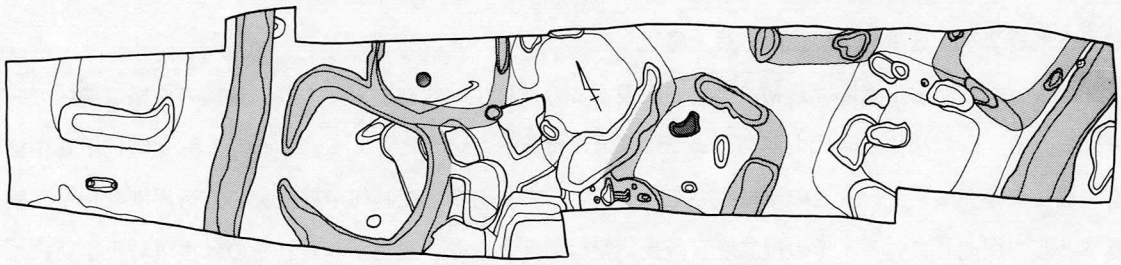
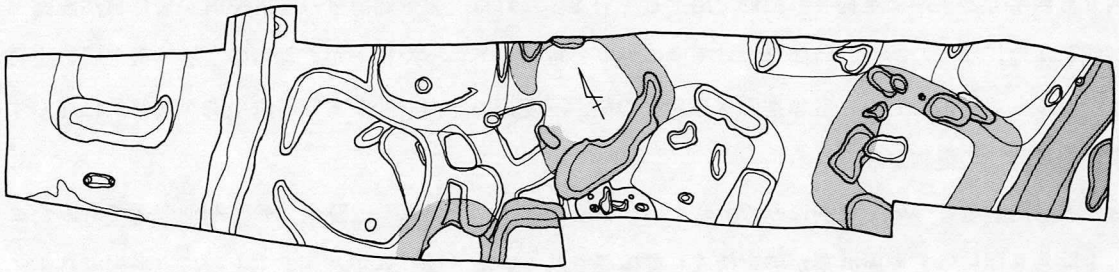


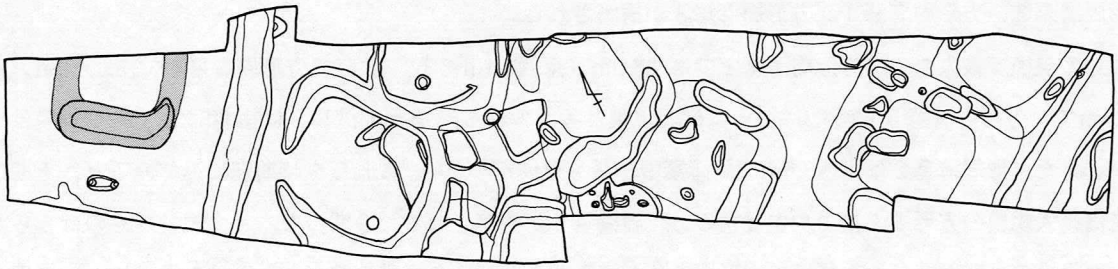
図15　土坑8　溝2・溝3　平面図・断面図



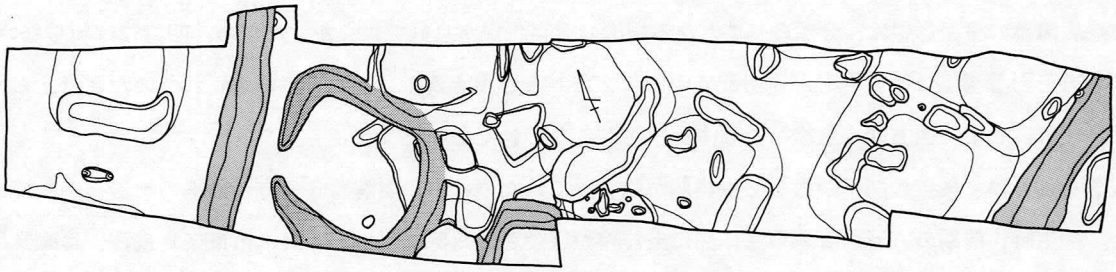
Ⅰ期



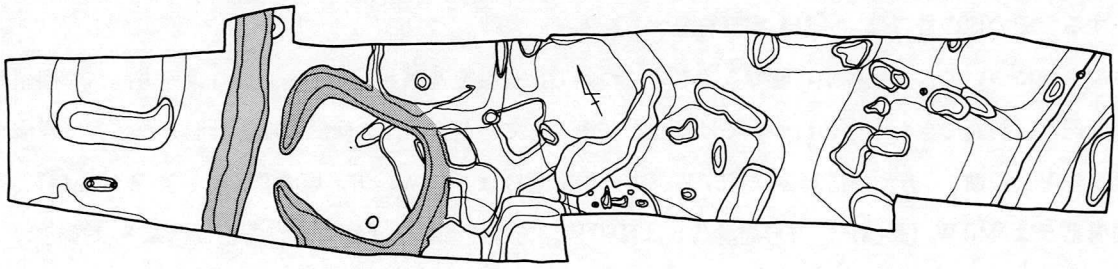
Ⅱ期



Ⅲ期



Ⅳ期



Ⅴ期

図 16　古川遺跡の遺構変遷

Ⅳ期－方形周溝墓１周溝上層、方形周溝墓２・３周溝上層、溝１上層、溝２上層

Ⅴ期－方形周溝墓１周溝最上層、溝１最上層

以上のことから、古川遺跡で最初に遺構が出現するのは弥生時代前期末であり、遺構の性格は墓域であると考えられる。この後弥生時代中期初頭までは墓域は機能していたといえる。しかし、弥生時代中期中葉は遺構・遺物が存在せず、一度目のやや短い空白期間となる。再び弥生時代中期後葉に方形周溝墓10が構築され墓域として機能している。その後二度目の長い空白期間となり、遺物がみられるのは古墳時代後期になってからである。これらは方形周溝墓１周溝上層、方形周溝墓２・３周溝上層、溝１上層、溝２上層という調査区でも西半分と東端に集約された形で出土している。これは、方形周溝墓の周溝や溝が後に自然流路として機能し窪地になった所へ、時間をかけてゆっくりと堆積していった様子がこれらの上層・最上層の土質が粘土やシルトであることからも類推できる。その後、三度短い空白期間があり周溝や溝が最終的に埋没する段階で奈良時代の遺物がみられる。

次に方形周溝墓について個別にみていきたい。構築順序については、遺跡全体の時期別変遷でもみたように、Ⅰ期とⅡ期には方形周溝墓が群を構成して構築されている。繰り返すと、まずⅠ期に方形周溝墓１、方形周溝墓５、方形周溝墓６、方形周溝墓７、方形周溝墓９の計５基が構築され、続いてⅡ期に方形周溝墓２、方形周溝墓３、方形周溝墓４、方形周溝墓８が構築される。

墳丘の規模で最大なのは方形周溝墓１で南北8.0m×東西6.4mある。次いで方形周溝墓４で南北6.0m×東西6.5mで、方形周溝墓５も南北6.0mとほぼ同規模と考えられる。方形周溝墓８は南北5.2mでやや規模は小さい。また方形周溝墓２は東西3.5mで周溝墓中、最も規模が小さい。これらを時期別にみてみると、Ⅰ期の段階は最大規模の方形周溝墓１や中規模の方形周溝墓５が構築される。Ⅱ期になると大規模のものはみられず、中規模の方形周溝墓と小規模の方形周溝墓が構築される。この規模の縮小は、墓域の継続によって周溝墓構築の際、規制が働いたものと考えられる。

方形周溝墓の平面形態は、分類の基準となる周溝の遺存状況が良好ではなかったため、明確には判らない。しかし方形周溝墓１は西で周溝が途切れている。また、方形周溝墓４も西の周溝が途切れていたと考えられる。いずれにせよ、西方向を意識した周溝掘削がおこなわれたといえよう。

残念なことに、後世の削平が激しく主体部が残存していたのは方形周溝墓６の方台部隅の土器棺のみであった。弥生時代前期の方形周溝墓の主体部に土器棺が埋設された例は、大阪府茨木市東奈良遺跡、兵庫県尼崎市東武庫遺跡で知られている。

周溝の断面形態については、方形周溝墓１周溝、方形周溝墓２・３の共有溝、方形周溝墓10周溝は逆台形を呈する。その他のものは、「U」字形を呈する。

主軸方向について、長短軸が判断できるものについては長軸を基準として、真北より東西方向への傾斜角度を標記し、判断できないものについては真北を基準として、西方向への傾斜角度を計測した。方形周溝墓１はN43 W（長軸）、方形周溝墓２はN57 W、方形周溝墓３はN68 W、方形周溝墓４はN38 W（長軸）、方形周溝墓５はN40 W（長軸）、方形周溝墓６はN60 W、方形周溝墓７はN67 W、方形周溝墓８はN45 W、方形周溝墓９はN32 W、方形周溝墓10はN31 Wとなる。

最後に墓域の区画溝と考えられる溝１と溝２についてみておきたい。弥生時代前期末～中期初頭の方形周溝墓は、溝１以東に構築される。溝１以西に構築された方形周溝墓10は、弥生時代中期後葉のものである。また溝１下層から木製の縦鋤が出土した。これらのことから、溝１は墓域の区画溝である可能性が高い。こ

れに対して溝２は、出土遺物が弥生時代前期末～中期初頭にかけてと幅があることと、弥生時代中期初頭の溝３の性格が不明であることなどから、墓域の区画溝と断定はできない。

（角南）

第４節　出土遺物

出土遺物はコンテナ約10箱分あり、そのほとんどは弥生土器である。その他の遺物には、土製品、磨製石器、サヌカイトチップ、木器、須恵器、土師器がある。基本層序及び遺構の項でも述べたように、遺構面は上・下２層に大別され、方形周溝墓１の周溝上層や溝１、溝２の上層は、古墳時代後期に再び溝として機能しており、別の遺構として考える必要がある。ここでは、出土遺構、層位別に遺物の概要を述べ、詳細は遺物観察表に表記する。

弥生時代

【方形周溝墓１】（図17－１～７・図版10）

壺（１，４，６）、甕（２，３，７，５）がある。１は墳頂部出土の広口壺胴部である。外面に篦描沈線を施す。４・７は北周溝下層出土である。４は壺底部で、接合しないが同一個体と思われる胴部片がある。５・６は、いずれも西周溝下層出土の甕で、外面はハケ調整を施す。これらの遺物の時期は、弥生時代前期末と考えられる。

【方形周溝墓２・３】（図17－８・図版10）

図示できたのは、方形周溝墓２と方形周溝墓３の周溝を共有する所から出土した、壺底部のみである。器面は摩滅しており、調整は不明である。

【方形周溝墓４】（図17－９～16・図版10，11）

壺（９～11）、甕（12～15）が周溝下層から出土した。９・10・14は東周溝からの出土、９は壺胴部で、外面には粗い篦描沈線を横方向に８条、縦方向に２条施す。横方向の沈線の７条目は切り合い関係が認められ、図面向かって右の線が左の線に切られている。このことから、施文の際の土器の方向を保留して考えるならば、この壺の横方向の沈線は図面向かって右方向から左方向へ施されたものといえる。10は小型壺で、胴部下半を欠損する。口頸部は縦方向の細かいハケ調整後、縦方向のミガキを施す。胴部は斜め方向の細かなハケ調整後、斜め及び横方向の粗いミガキを施す。この粗いミガキのため成形段階の細かいハケ調整がよく観察できる。また口縁部内面は、ハケ調整を施す。14は南周溝出土の小型甕で、胴部外面にハケ調整を施す。11は西周溝出土の壺で、頸部外面に櫛描直線文を施し、やや新しい要素が見られる。12・13・15・16は南周溝からの出土。12は小型の甕で、胴部外面に３条１単位の沈線を２条施す。13・15・16は甕底部で、13は断面に円盤充填の痕跡が顕著に認められる。これらの遺物の時期は、弥生時代中期初頭と考えられる。

【方形周溝墓５】（図17－17，18・図版11）

17・18はいずれも北周溝からの出土。17は土器片を再利用した土製品で、上部に焼成後穿孔をする。一種の祭具であろうか。18は壺底部で、外面はハケ調整後細かいミガキを施す。また底部外面も細かなミガキを施す。これらの遺物の時期は、弥生時代前期末と考えられる。

【方形周溝墓６】（図18－１～４・図版11）

出土遺物は、周溝出土のものと土器棺に転用されたものがある。１は西周溝出土の甕で、口縁部は「く」字状に外反し、口縁端部はやや丸みをもって終わる。２～４は土器棺使用土器である。２は土器棺棺蓋とし

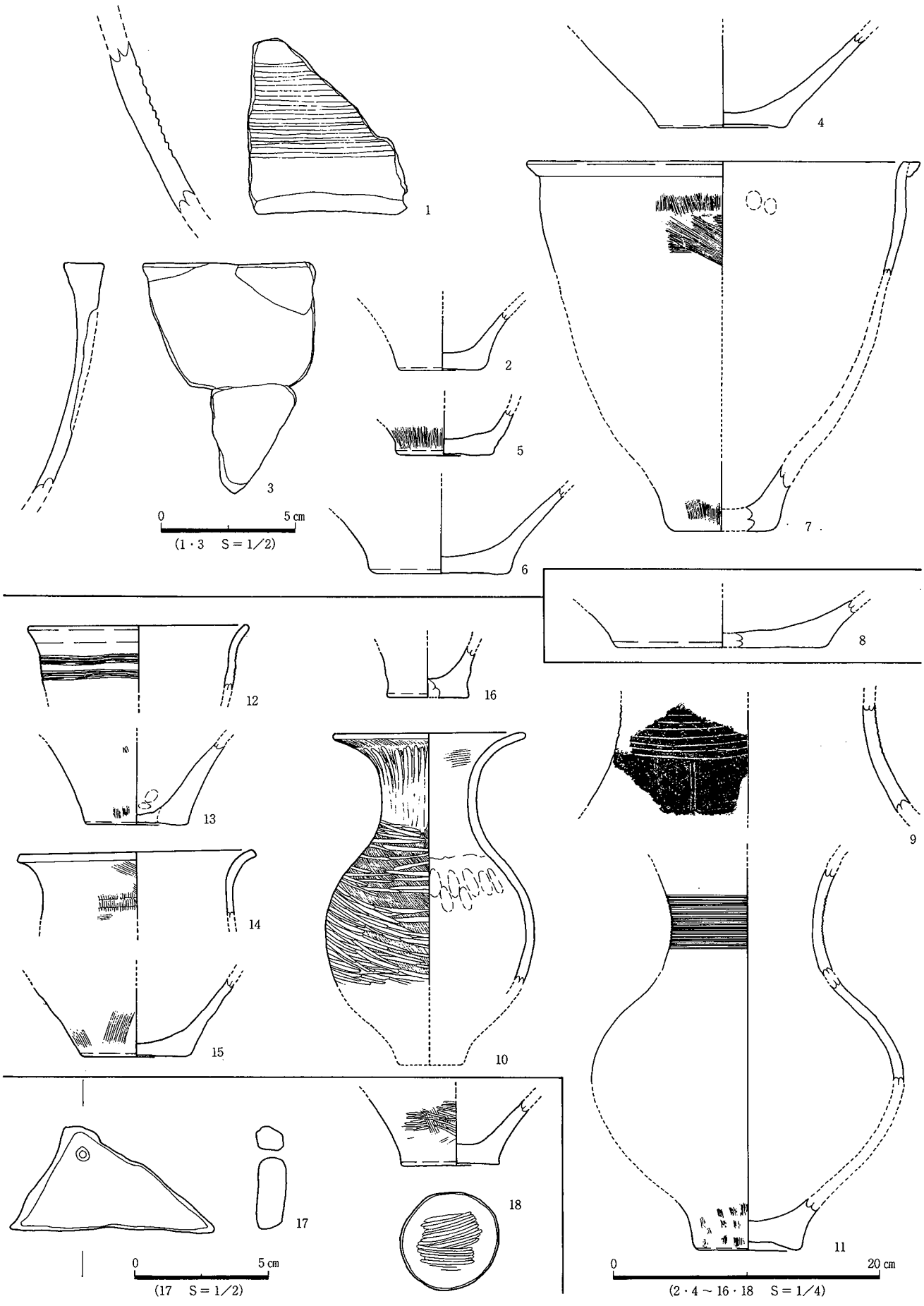


図17　方形周溝墓　出土遺物（1）

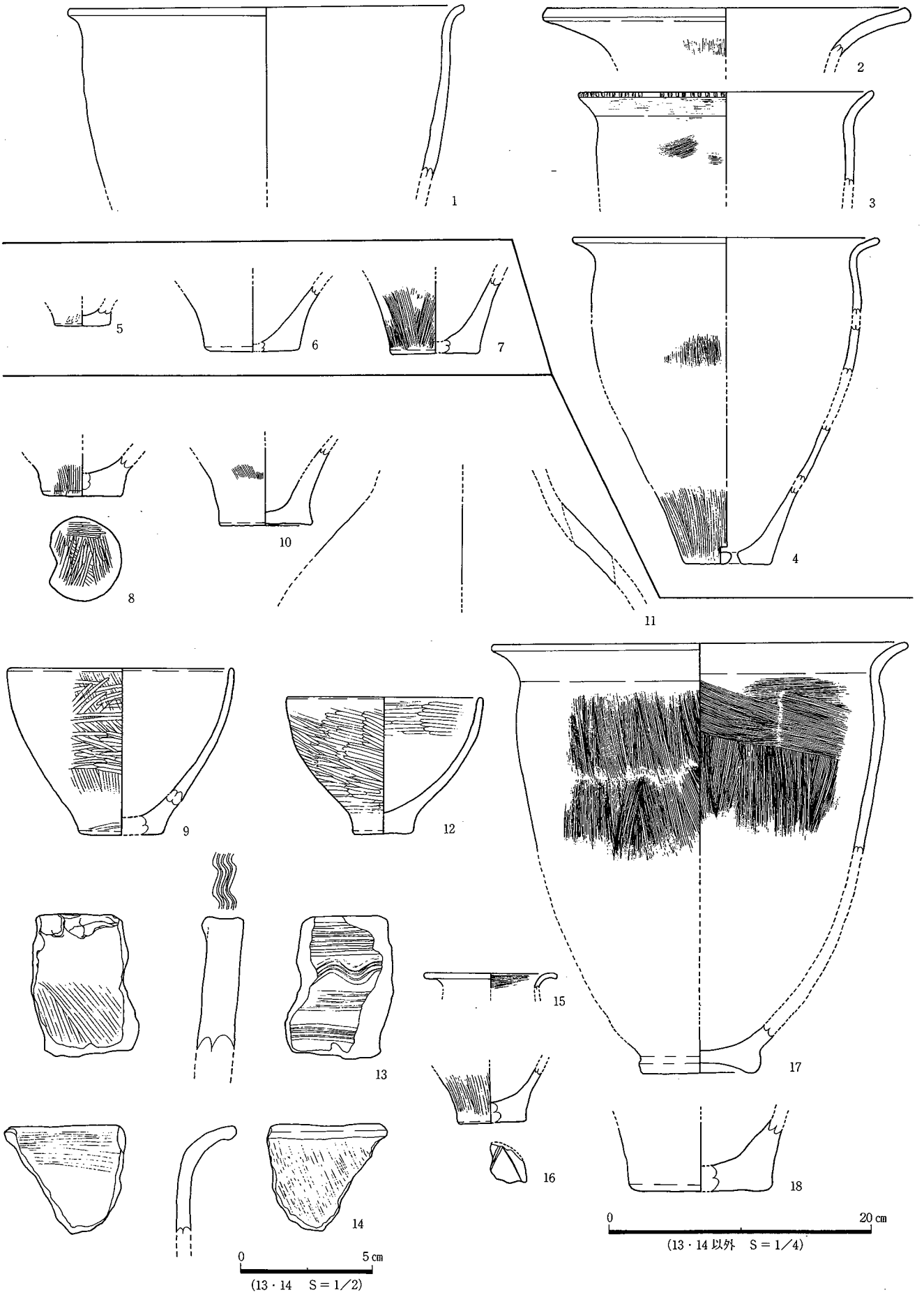


図 18　方形周溝墓　出土遺物（2）

て使用された広口壺の口縁部で、口縁は外反し口縁端部はやや肥厚する。3も土器棺棺蓋として使用された甕で、外面はハケ調整後ナデを施す。口縁端部は丸く収まり、刻目文を施す。4は土器棺棺身として使用された甕である。口縁部は「く」字状に外反し、外面は粗いハケ調整を施す。底部中央付近に焼成後穿孔を1個有する。穿孔は外面からおこなわれている。弥生時代前期の土器棺棺身に使用された土器に、焼成後穿孔が施されている例は多い。しかし、そのほとんどは胴部下半に穿孔されており、底部に穿孔される例は少なく注目される資料である。これらの遺物の時期は、弥生時代前期末と考えられる。

【方形周溝墓7】（図18－5～7・図版11）

甕底部（6，7）と鉢（5）がある。5は外面にヘラミガキを施す。6は底部に円盤充填の痕跡が認められる。7は外面をハケ調整する。これらの遺物の時期は、弥生時代前期末と考えられる。

【方形周溝墓8】（図18－8～18・図19－1，2・図版11，12）

周溝内から壺（8，11，18）、甕（10，14，15～17）、鉢（9，12，13）、被熱痕のある礫石（1，2）が出土した。8・9は南周溝出土、10・11は西周溝出土、12～18は北周溝出土である。8は外面に細かいミガキを施す。11は粘土紐の接合痕がよく観察でき、接合方法は、弥生土器に一般的にみられる外傾接合ではなく、内傾接合である点が特異である。9・12は器面に細かなヘラミガキを施す。13は鉢の口縁部で、外面に櫛描直線文と波状文を、口縁端部に波状文を施す。内面はやや粗いハケ調整後、ナデを施す。また、口縁端部を内側へ折り返す。方形周溝墓8からの出土遺物中、新しい要素を顕著に示している遺物である。15は、口縁部を外反させる甕で、いずれも器面に粗いハケ調整を施す。17は大型の甕で、口縁部は「く」字状に外反し、器面には細かいハケ調整を施す。外面には煤が多く付着している。これらの遺物の時期は、弥生時代中期初頭と考えられる。図18の1と2は、表面に被熱痕が認められる。石材は1は花崗岩、2は砂岩である。

【方形周溝墓10】（図19－3・図版12）

3は周溝出土の甕で、口縁部は「く」字状に外反し、口縁端部は肥厚する。外面はやや粗いハケ調整を、内面はナデ調整をそれぞれ施す。底部に木葉痕を残す。口縁部から胴部下半にかけて、煤の付着が認められる。帰属時期は、畿内第Ⅳ様式と考えられ、他の方形周溝墓と時間差がある。

【土坑2】（図19－4・図版13）

4は広口壺の口縁部で、外面をハケ調整し、口縁端部は下方へ肥厚する。時期は弥生時代前期末と考えられる。

【土坑7】（図19－5・図版12）

5は小型壺の胴部で、外面に細かなミガキを施し、胴部最大径部付近に櫛描直線文と波状文を施す。内面は、細かなハケ調整をする。時期は畿内第Ⅱ様式の前半と考えられる。

【土坑5】（図19－17～20・図版13）

17～20は、サヌカイトチップである。土坑5からは、計92個のサヌカイトチップが出土したが、うち大型のものを選択し図化した。これらのうち、自然面を有するものが9個ある。また先端形態に着目すると、エッジを呈するものが8個、ヒンジを呈するものが12個、その他のものが72個ある。これらのチップは最大の個体で最大長が2.4cmと小さく、石器製作時のゴミと考えられるものばかりで、製品や剥片石器は皆無であった。土坑5の堆積土は黒褐色を呈していた。このことからも、土坑5は方形周溝墓8の埋没後、有機物のゴミを廃棄するために掘られたゴミ穴であった可能性が高い。大型の剥片が皆無であることの要因として、石材を回収するため敷物を敷いて作業をおこない、最終的にこれらを集め他のゴミと一緒に土坑に捨てられた

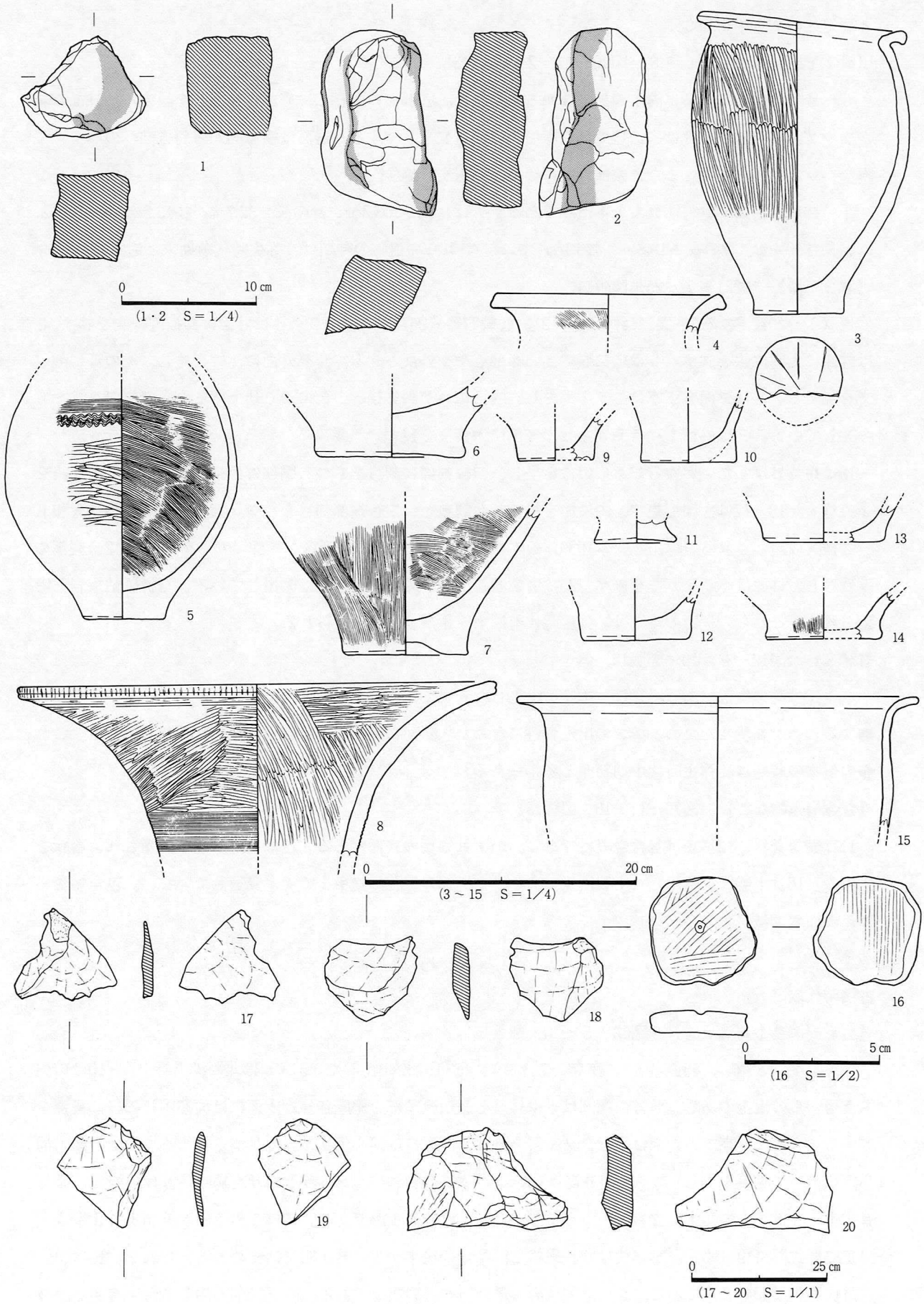


図19　各遺構・包含層　出土遺物

と想定される（中川 1998)。

【溝１下層】（図19－６～８，図20－１，２・図版13)

６～８は壺である。７は溝１の拡張部から出土した。底部のみ残存し、底面は窪み底を呈する。外面は細かなハケ調整を施す。８は広口壺で、口縁端部は刻目文を施文する。器面は横方向から斜方向への順で、丁寧なヘラミガキを施す。また、頸部外面に櫛描に直線文を施す。

１・２は長柄鋤で、いずれも一本造りである。１は、長さ103.3cm、身の長さ32.7cm、幅15.2cmである。２は、長さ59.4cm、身の長さ19.8cm、幅6.1cmである。これらの遺物の時期は、弥生時代前期末と考えられる。

【溝２下層】（図21－１～25・図版14)

壺（１～10)、甕（13～24)、鉢（11・12)、磨製石器（25）がある。２・４は外面に櫛描直線文を施す。5は外面に太い沈線を施す。６は広口壺で、口縁部をやや外反させる。頸部外面に沈線を施し、その帯に列点文を加える。８は外面を丁寧にヘラミガキし、内面はハケ調整後、ナデにより仕上げる。底部までヘラミガキをしている。９は外面をヘラミガキし、底部に木葉痕を残す。

16は短く外反したいわゆる如意形口縁を呈し、口縁端部に刻目をもつ。胴部外面には２条１単位の沈線を２条施す。13・17は大和形甕で、内外面を粗いハケ調整し、口縁端部刻目をもつ。大和形甕の出現は大和Ⅱ－２様式段階とされる（藤田・松本1989，松本1993)。11は内外面に丁寧なヘラミガキを施す。12は底部のみ残存し、外面はヘラミガキを施す。25は磨製石包丁で、刃部や紐通孔は欠損している。石材は粘板岩と考えられる。これらの遺物の時期は、弥生時代前期末～中期初頭と考えられる。

【溝３】（図19－９，10・図版12)

９・10は甕の底部である。10は試掘時に出土した資料であるが、本調査の結果、このグリッドが溝３に相当することが判明したため、溝３の出土資料に含めた。断面に底部成形時の円盤充填痕が認められる。これらの遺物の時期は、弥生時代中期初頭と考えられる。

【包含層遺物など】（図19－11～16・図版13)

11は表採資料、12～16は包含層資料である。いずれも甕の底部である。11は底部がやや拡張され、台状を呈する。16は土器片を転用した土製円盤である。中央部の穿孔は途中までで、貫通していない。包含層資料は、表面の摩滅が激しい。

古墳時代以降

【方形周溝墓１周溝上層】（図22－５～10・図版15)

須恵器甕（５・６)、杯蓋（８)、杯身（７・９)、壺（10）が出土した。５・６は北周溝上層、７～10は南周溝上層からの出土である。５は口縁部はやや外反し、口縁端部を肥厚させ、内面には同心円状の当て具痕を有する。６は大型甕で、外面は平行タタキ目を有し、内面には同心円状の当て具痕を有する。７は内面に同心円状の当て具痕を有し、立ち上がり高は1.7cmで、底部の約½に回転ヘラケズリを施す。８は口縁部に段を有する。９はやや内傾する立ち上がりを持ち、立ち上がり高１cmである。これらの遺物は概ねＴＫ10型式～ＭＴ85型式期に相当する。実年代は６世紀第２四半期の後半から、第４四半期初めと考えられる。10は、奈良時代の小型壺の底部である。この遺物は溝１最上層からの出土である。底部に削り出し高台を有する。

【溝１上層】（図23－１～４・図版15)

須恵器杯蓋（１)、杯身（２，３)、甕（４）が出土した。１は口縁部に段を持たず、丸く収まる。天井部に

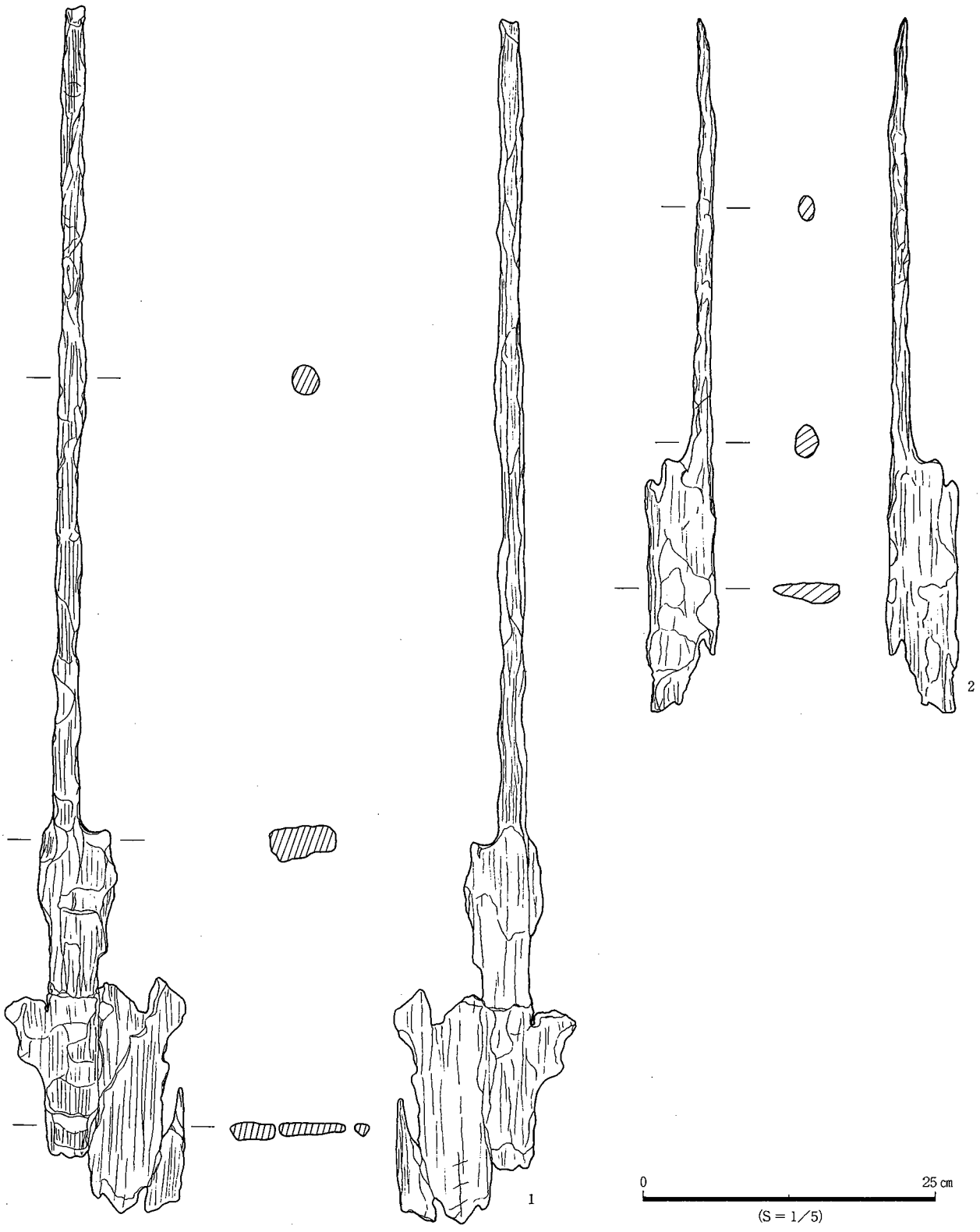


図 20　溝 1　下層出土木器

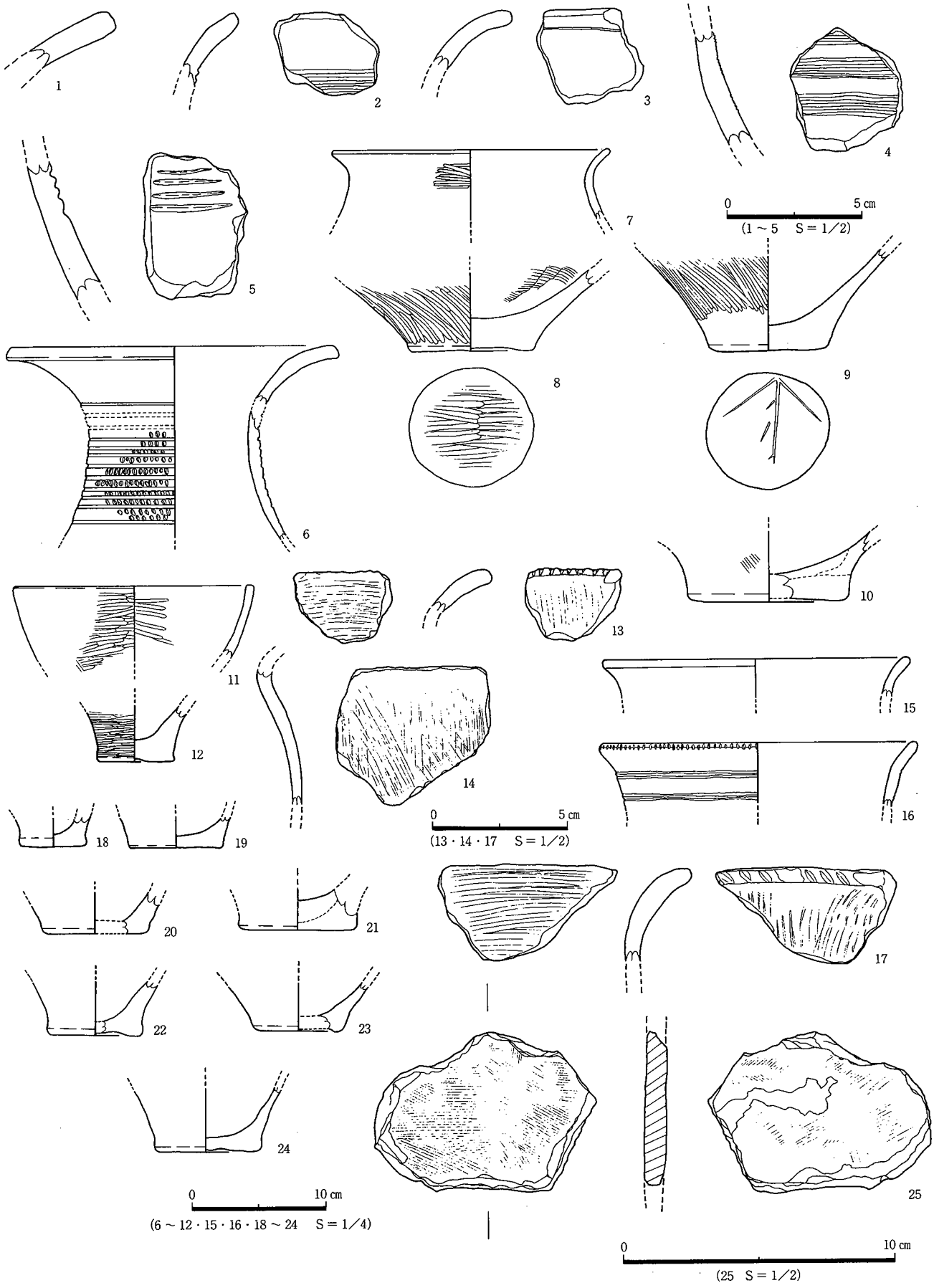

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
0 5 cm
(1～5 S＝1／2)
0 5 cm
(13・14・17 S＝1／2)
0 10 cm
(6～12・15・16・18～24 S＝1／4)
0 10 cm
(25 S＝1／2)

図21　溝2　出土遺物

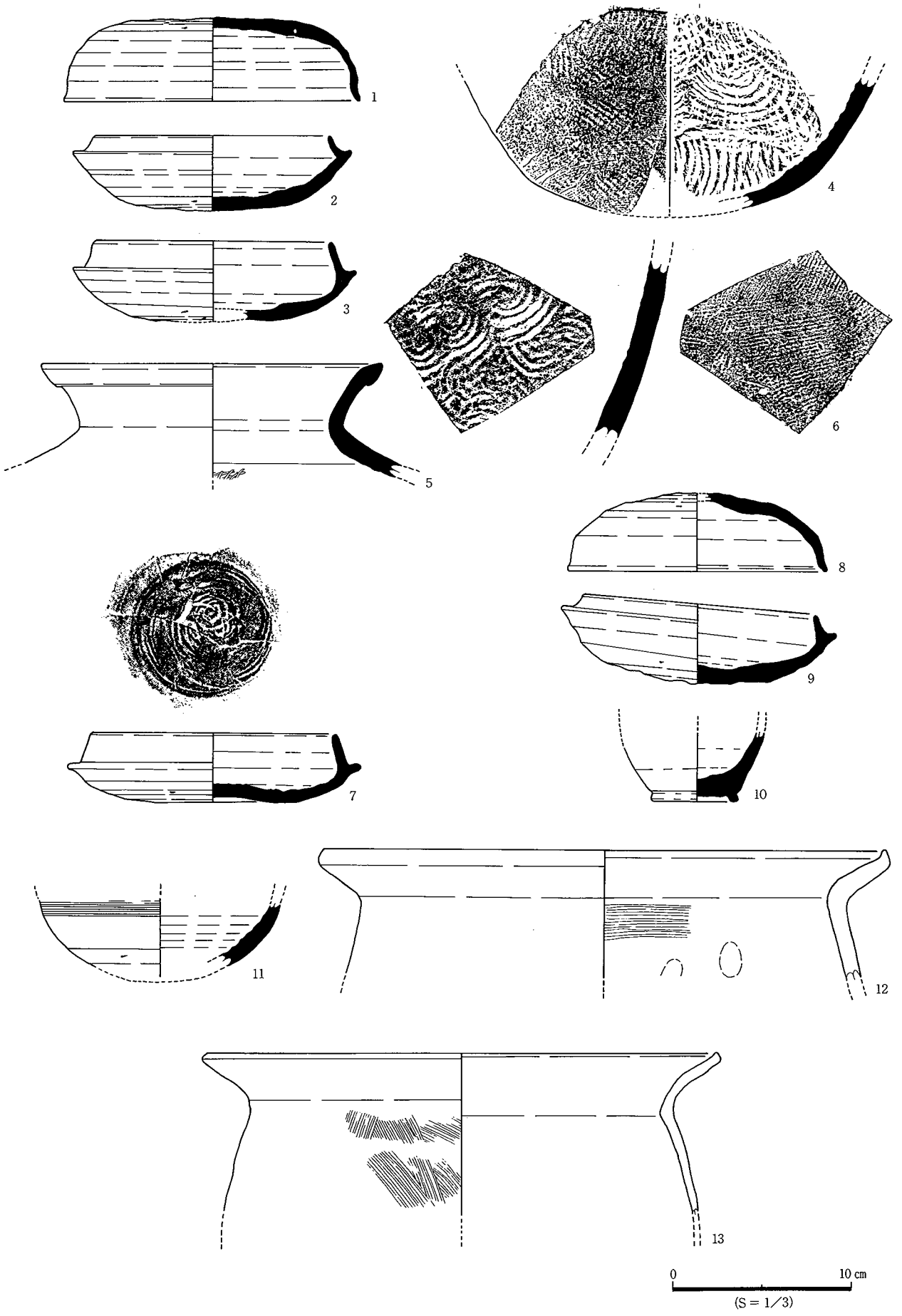


図 22　上層　出土遺物

回転ヘラケズリを施す。2はやや内傾する立ち上がりを持ち、底部は回転ヘラケズリを施す。3は立ち上がり高1.6cmで、内面に同心円状の当て具痕が残る。外面底部は回転ヘラケズリを施す。4は外面に平行タタキ目が、内面には同心円状の当て具痕がそれぞれ残る。これらの遺物は概ねＴＫ10型式～ＭＴ85型式期に相当する。

【溝２上層】（図22－11・図版15）

溝２上層からは、須恵器小型壺の底部（11）が出土した。底付近は回転ヘラケズリを施し、胴部に、カキメ調整を施す。時期はＴＫ10型式～ＭＴ85型式期に相当する。

【包含層遺物】（図22－12，13・図版15）

13は土師器長胴甕である。口縁部は「く」字状に外反し、端部は摘まみ上げる。外面をハケ調整し、内面はナデ調整する。6世紀後半のものと考えられる（西口1983，京嶋1992）。

12は土師器鍋である。内面をハケ調整し、指頭圧痕を残す。口縁端部は摘まみ上げる。時期は平安時代後期頃（11世紀末）と考えられる（佐藤1992）。

（角南）

遺物のまとめ

出土遺物の時期は、大別してⅠ期～Ⅴ期に区分できる。Ⅰ期は弥生時代前期末の段階、Ⅱ期は弥生時代中期初頭の段階、Ⅲ期は弥生時代中期後葉の段階、Ⅳ期は古墳時代後期、Ⅴ期は奈良時代以降である。各時期のうち遺物量が最も多いのはⅠ期で、次いでⅡ期、Ⅳ期の順で多くの出土をみた。

次に遺構出土資料について、各時期での器種組成についてみてみたい。なお時期幅が認められる溝２については含めていない。まず方形周溝墓出土遺物のみについては、Ⅰ期は壺５、甕10、鉢１、土製品１である。これに他の遺構の遺物も加えると、壺８、甕11、鉢１、土製品１、木製鋤２となる。Ⅱ期では方形周溝墓出土遺物のみについては、壺６、甕11、鉢３、礫石２である。これに他の遺構の遺物も加えると、壺７、甕12、鉢３となる。またⅢ期の遺物としては、甕１点のみである。

Ⅳ期の遺物は、合計で須恵器杯蓋２、杯身４、小型壺１、甕２がある。Ⅴ期の遺物は、須恵器小型壺１点のみである。

方形周溝墓から出土した土器の器種は、Ⅰ期もⅡ期も甕の個体数が壺の個体数を上回っている。従来からいわれるように、弥生時代中期前葉の墳墓出土土器は、壺が圧倒的に多く他の器種はごく僅かであるという傾向と照らし合わせると（大庭 1992）、特異であるといえる。これらの土器がもともと方形周溝墓に伴い、墳墓祭祀に用いられたものと解釈するならば、古川遺跡の前期末～中期初頭の墳墓祭祀の形態が、少なくとも中期前葉の他の遺跡と異なっていたことが類推できよう。逆にこれらの遺物が方形周溝墓に伴わないと解釈するならば、方形周溝墓は構築されてから比較的早い段階で廃棄され、その埋没過程で近辺の居住域から流入したことが想定されることになる。このような例として神奈川県秦野市砂田台遺跡がある。弥生時代中期後葉の４号方形周溝墓周溝内で大量の土器・石器が出土しているが、報告者によれば環濠集落内に方形周溝墓が立地することから、周溝墓構築後、間もない時期に廃棄されたとし、さながらゴミ捨て場のような状態になったと想定している（宍戸ほか 1989，1991）。しかし古川遺跡の場合、隣接する場所に居住域が未発見であるためと、周溝内遺物のほとんどが最下層から出土したことを考慮すると、現段階ではこれらの遺物は方形周溝墓に伴うものであると理解しておきたい。ただ例外的に方形周溝墓８の北周溝を切ってサヌカイトチ

ップが廃棄されたゴミ穴、土坑5の存在があるが、この資料のみでは判断はできない。

方形周溝墓4の東周溝と南周溝から出土した胎土に角閃石を多く含む生駒西麓産の壺が、それぞれ1点ある。弥生時代前期末の生駒西麓産土器の移動を考える上で興味深い。

溝1からは木製縦鋤が2点出土しているが、このような土木用木器が、墓域の区画溝と考えられる溝から出土した意義は大きい。方形周溝墓の周溝からは、又鍬や広鍬ではなく長柄鋤が出土する傾向がみられることからも（清水 1991)、これらの鋤が、方形周溝墓の掘削もしくは何らかの儀礼に関係した可能性を示唆している。

方形周溝墓8北周溝から被熱痕を有する礫石が2個出土した。関東地方の方形周溝墓周溝から、拳大の被熱痕の認められる礫石が検出される場合が多くみられ、出土した他の土器に煤の付着が顕著に認められることと併せて理解するならば、火と関係した葬送儀礼が想定されよう（大庭 1992・福田 1993，1994)。

（角南）

【引用・参考文献】

井藤暁子 1983「近畿」『弥生土器』Ⅰ　ニューサイエンス社

井藤暁子 1985「美園遺跡出土の弥生時代前期後半～中期初頭の土器について」『美園』（財)大阪文化財センター

植野浩三 1997「区画溝と周溝墓」『文化財学報』15　奈良大学文化財学科

大庭重信 1992「弥生時代の葬送儀礼と土器」『待兼山論叢』26　大阪大学文学部

京嶋 覚 1992「古墳時代後半期における土師器の器種構成」『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅲ（財)大阪市文化財協会

佐藤 隆 1992「平安時代における長原遺跡の動向」『長原遺跡発掘調査報告』Ⅴ（財)大阪市文化財協会

佐原 真 1967「山城における弥生式文化の成立」『史林』50－5　史学研究会

宍戸信悟ほか 1989『砂田台遺跡』Ⅰ　神奈川県立埋蔵文化財センター

宍戸信悟ほか 1991『砂田台遺跡』Ⅱ　神奈川県立埋蔵文化財センター

清水真一 1991「土木用木器の出土状況についての一考察」『城島遺跡外山下田地区発掘調査報告書』　桜井市教育委員会

田代克巳 1986「いわゆる方形周溝墓の供献土器について」『村落構造と他界観』　雄山閣

寺沢　薫・森井貞雄 1989「1　河内地域」『弥生土器の様式と編年　近畿編Ⅰ』　木耳社

中川和哉 1998「弥生時代石器研究の実践」『京都府埋蔵文化財情報』67（財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

西口寿生 1983「土師器の地域色」『文化財論叢』　同朋舎

野中 仁・福田 聖 1993「方形周溝墓出土の木製品」『研究紀要』10（財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

福田 聖 1993「赤い小石」『埼玉考古』30埼玉考古学会

福田 聖 1994「方形周溝墓と火」『戸田市史研究』9　戸田市立郷土博物館

福田 聖 1995「方形周溝墓と溝」『研究紀要』12（財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

松本洋明 1993「大和における弥生中期土器の展開」『第11回近畿地方埋蔵文化財研究会資料』（財)大阪文化財センター

藤田三郎・松本洋明 1989「2　大和地域」『弥生土器の様式と編年　近畿編Ⅰ』　木耳社

表1　古川遺跡出土遺物観察表

挿図番号	遺構名	器種	時期	法量	胎土	焼成	色調	特徴	残存率
図17-1	方形周溝墓1墳頂部	壺	弥生前期末		2mm大の石英、長石、チャートを含む(やや粗)	やや軟	2.5YR4/6赤褐		
図17-2	方形周溝墓1墳頂部	甕	弥生前期末	底径6.2cm	2mm大の石英、長石、チャートを含む(やや粗)	堅緻	10YR6/3にぶい黄橙		
図17-3	方形周溝墓1北周溝	甕	弥生前期末		1mm大の長石を含む(粗)	軟	7.5YR7/8黄橙		
図17-4	方形周溝墓1北周溝	壺	弥生前期末	底径9.5cm	3mm大以下の長石を多く含む(やや粗)	軟	10YR6/3にぶい黄橙		100%(底部)
図17-5	方形周溝墓1南周溝	甕	弥生前期末	底径7.0cm	2mm大以下の石英、長石、チャートを含む(密)	堅緻	内:10YR5/1褐灰 外:2.5Y7/6明黄褐		70%(底部)
図17-6	方形周溝墓1南周溝	壺	弥生前期末	底径10cm	3mm大以下の石英、長石、チャートを多く含む(やや粗)	堅緻	10YR6/4にぶい黄橙		100%(底部)
図17-7	方形周溝墓1東周溝	甕	弥生前期末	口径29.5cm 底径7.1cm	2mm大の長石を多く含む(やや粗)	堅緻	内:7.5YR6/4にぶい橙 外:10YR6/4にぶい黄橙		5%以下 (口縁部、底部とも)
図17-8	方形周溝墓2、3	壺	弥生前期末	口径15.5cm	3mm大以下の石英、長石、チャートを多く含む(粗)	堅緻	内:7.5YR6/1褐灰 外:7.5YR6/3にぶい褐		25%(底部)
図17-9	方形周溝墓4東周溝	壺	弥生中期初頭		1mm大以上の長石、角閃石を多く含む(密)	堅緻	10YR6/3にぶい黄橙	牛駒西麓産胎土	
図17-10	方形周溝墓4東周溝	壺	弥生中期初頭	口径14.7cm 胴部最大径15.7cm	2mm大の長石、チャート、赤色酸化土粒を多く含む(やや粗)	やや軟	2.5YR7/2灰黄		25%(口縁部)
図17-11	方形周溝墓4西周溝	壺	弥生中期初頭	底径7.8cm	3mm大の石英、長石、チャートを多く含む(粗)	やや軟	2.5YR7/2灰黄		100%(底部)
図17-12	方形周溝墓4南周溝	甕	弥生中期初頭	口径16.2cm	1mm大の雲母を少量、2mm大以下の石英、長石を多く含む(やや粗)	堅緻	10YR6/2灰黄褐		10%(口縁部)
図17-13	方形周溝墓4南周溝	甕	弥生中期初頭	底径7.6cm	2mm大以下の石英、長石、チャートを多く含む(やや粗)	堅緻	7.5YR8/4浅黄橙		50%(底部)
図17-14	方形周溝墓4東周溝	甕	弥生中期初頭	口径17.2cm	2mm大以下の長石、チャートを多く含む(やや粗)	堅緻	5YR5/2灰褐		5%以下(口縁部)
図17-15	方形周溝墓4南周溝	壺	弥生中期初頭	底径7.9cm	1mm大以下の長石、角閃石を多く含む(密)	堅緻	10YR5/3にぶい黄褐	生駒西麓産胎土	100%(底部)
図17-16	方形周溝墓4南周溝	甕	弥生中期初頭	底径6cm	1mm大以下の長石、チャートを含む (密)	堅緻	10YR7/3にぶい黄橙		25%(底部)
図17-17	方形周溝墓5	土製品	弥生前期末	長さ4cm 幅7.7cm	2mm大の石英、長石、チャートを多く含む(粗)	やや軟	7.5YR5/1褐灰		
図17-18	方形周溝墓5	壺	弥生前期末	底径7.6cm	2mm大以下の石英、長石、チャートを多く含む(やや粗)	堅緻	10YR7/3にぶい黄橙		100%(底部)
図18-1	方形周溝墓6西周溝	甕	弥生前期末	口径30cm	2mm大以下の石英、長石、チャートを多く含む(やや粗)	軟	10YR6/4にぶい黄橙		25%(口縁部)
図18-2	方形周溝墓6 土器棺棺蓋	壺	弥生前期末	口径27.3cm	2mm大の石英、長石、チャートを多く含む(やや粗)	堅緻	10YR7/3にぶい黄橙		5%(口縁部)
図18-3	方形周溝墓6 土器棺棺蓋	甕	弥生前期末	口径22.4cm	3mm大以下の石英、長石、チャートを多く含む(粗)	堅緻	内:7.5YR6/2灰褐 外:2.5Y8/2淡黄		25%(口縁部)
図18-4	方形周溝墓6 土器棺棺身	甕	弥生前期末	口径23.1cm 底径6.4cm	3mm大の石英、長石、チャートを多く含む(粗)	堅緻	内:5YR5/1褐灰 外:7.5YR5/2灰褐		50%
図18-5	方形周溝墓7周溝	鉢	弥生前期末	底径3.8cm	1mm大の石英、長石を含む(密)	堅緻	7.5YR8/3浅黄橙		100%(底部)
図18-6	方形周溝墓7周溝	甕	弥生前期末	底径6.7cm	2mm大以下の石英、長石、チャートを多く含む(やや粗)	堅緻	2.5Y8/3淡黄		50%(底部)
図18-7	方形周溝墓7	甕	弥生前期末	底径6.6cm	3mm大以下の石英、長石、チャートを多く含む(密)	堅緻	内:5YR6/4にぶい橙 外:5YR5/2灰褐		30%(底部)
図18-8	方形周溝墓8南周溝	壺or鉢	弥生中期初頭	底径5.8cm	2mm大の石英、長石を多く含む(密)	堅緻	内:10YR5/2灰黄褐 外:7.5YR6/4にぶい橙		50%(底部)
図18-9	方形周溝墓8南周溝	鉢	弥生中期初頭	口径17.1cm 底径6.6cm 器高12.6cm	3mm大以下の石英、長石、チャートを多く含む(やや軟)	堅緻	10YR6/2灰黄褐		10%以下(口縁部)
図18-10	方形周溝墓8西周溝	甕	弥生中期初頭	底径7cm	2mm大以下の石英、長石、チャートを多く含む(粗)	堅緻	内:10YR7/2にぶい黄橙 外:10YR5/2灰黄褐		100%(底部)
図18-11	方形周溝墓8西周溝	壺	弥生中期初頭		3mm大の長石、チャートを多く含む(密)	堅緻	内:5YR4/1褐灰 外:10YR7/2にぶい黄橙		
図18-12	方形周溝墓8北周溝	鉢	弥生中期初頭	口径15cm 底径4.5cm	1mm大以下の石英、長石、チャートを含む(密)	堅緻	内:10YR7/2にぶい黄橙 外:7.5YR6/1褐灰		70%
図18-13	方形周溝墓8北周溝	鉢	弥生中期初頭		2mm大の長石、チャートを含む(密)	堅緻	内:10YR6/1褐灰 外:7.5YR6/4にぶい橙		
図18-14	方形周溝墓8北周溝	甕	弥生中期初頭		1mm大の石英、長石、チャートを含む(密)	堅緻	内:7.5YR7/4にぶい橙 外:7.5YR6/3にぶい褐		
図18-15	方形周溝墓8北周溝	甕	弥生中期初頭	口径9.5cm	0.5mm大の長石を含む(密)	堅緻	10YR7/3にぶい黄橙		10%(口縁部)
図18-16	方形周溝墓8北周溝	甕	弥生中期初頭	底径5cm	2mm大以下の石英、長石を多く含む(やや粗)	軟	10YR7/3にぶい黄橙		25%(底部)
図18-17	方形周溝墓8東周溝	甕	弥生中期初頭	口径31.8cm 底径9cm	1mm大以下の石英、長石、チャートを含む(やや粗)	堅緻	内:10YR7/2にぶい黄橙 外:10R6/2灰赤		100%(底部)
図18-18	方形周溝墓8北周溝	甕	弥生中期初頭	底径10.4cm	2mm大以下の石英、長石、チャート、赤色酸化土粒を多く含む(やや粗)	堅緻	10YR7/2にぶい黄橙		20%(底部)
図19-1	方形周溝墓8北周溝	礫石	弥生中期初頭	縦7.3cm 横9.2cm 高さ7.3cm				石材(花崗岩)	
図19-2	方形周溝墓8北周溝	礫石	弥生中期初頭	縦13.8cm 横6.2cm 高さ4.7cm				石材(砂岩)	
図19-3	方形周溝墓10周溝	甕	弥生中期後葉	口径15cm 底径6.4cm	3mm大以下の長石、チャートを多く含む (粗)	やや軟	内:10YR4/2灰黄褐 外:10YR5/2灰黄褐		40%
図19-4	土坑2	壺	弥生前期末	口径16.4cm	1mm大以下の石英、長石、チャートを多く含む(密)	堅緻	10YR6/3にぶい黄橙		10%(口縁部)
図19-5	土坑7	壺	弥生前期末	底径6cm	1mm大の長石を含む(密)	やや軟	7.5YR7/4にぶい橙		100%(底部)
図19-6	溝1下層	壺	弥生前期末	底径10.5cm	2mm大の石英、長石、チャートを多く含む(やや軟)	堅緻	7.5YR8/4浅黄橙		100%(底部)
図19-7	溝1下層	甕	弥生前期末	底径9cm	2mm大以下の長石、チャート、赤色酸化土粒を含む(密)	堅緻	内:10YR5/3にぶい黄褐 外:10YR5/2灰黄褐		100%(底部)
図19-8	溝1下層	壺	弥生前期末	口径34.8cm	2mm大以下の長石、チャートを多く含む(密)	堅緻	10YR6/3にぶい黄橙		25%(口縁部)
図19-9	溝3	甕	弥生前期末	底径5.4cm	1mm大以下の石英、長石、チャートを多く含む(やや粗)	堅緻	5YR6/4にぶい橙		20%(底部)
図19-10	溝3	甕	弥生前期末	底径6.8cm	2mm大以下の石英、長石、チャート、黒雲母を多く含む(やや粗)	堅緻	内:2.5Y6/1黄灰 外:10YR7/2にぶい黄橙		50%(底部)

挿図番号	遺構名	器種	時期	法量	胎土	焼成	色調	特徴	残存率
図19-11	表採	甕	弥生前期末	底径3cm	3mm大以下の石英、長石、チャートを含む(密)	堅緻	10YR7/3にぶい黄橙		60%(底部)
図19-12	包含層	甕	弥生前期末	底径7.6cm	2mm大以下の石英、長石,チャートを含む(密)	堅緻	10YR7/3にぶい黄橙		30%(底部)
図19-13	包含層	壺	弥生前期末	底径8.2cm	2mm大以下の石英、長石、チャートを多く含む(密)	堅緻	10YR7/4にぶい黄橙		25%(底部)
図19-14	包含層	壺	弥生前期末	底径8.4cm	2mm大の石英、長石、チャートを含む(やや粗)	堅緻	5YR7/4にぶい橙		10%(底部)
図19-15	包含層	甕	弥生前期末	口径29.5cm	2mm大以下の石英、長石を多く含む(やや粗)	やや軟	7.5YR8/6浅黄橙		10%以下(口縁部)
図19-16	包含層	土製円盤	弥生前期末	長さ3.9cm 幅3.9cm 厚さ0.9cm	2mm大以下の石英、長石を含む	堅緻	内：5YR2/1黒褐 外：5YR2/1にぶい黒褐		
図19-17	土坑5	チップ	弥生前期末	長さ1.7cm 幅1.9cm 厚さ0.2cm				石材(サヌカイト)	
図19-18	土坑5	チップ	弥生前期末	長さ1.5cm 幅1.5cm 厚さ0.3cm				石材(サヌカイト)	
図19-19	土坑5	チップ	弥生前期末	長さ1.9cm 幅1.7cm 厚さ0.2cm				石材(サヌカイト)	
図19-20	土坑5	チップ	弥生前期末	長さ1.9cm 幅2.9cm 厚さ0.6cm				石材(サヌカイト)	
図20-1	溝1下層	木器鋤	弥生前期末	長さ103.3cm 幅15.2cm 身の長さ32.7cm					
図20-2	溝1下層	木器鋤	弥生前期末	長さ59.4cm 幅6.1cm 身の長さ19.8cm					
図21-1	溝2下層	壺	弥生前期末～中期初頭		3mm大以下の石英、長石、チャートを多く含む(やや粗)	堅緻	10YR8/3浅黄橙		
図21-2	溝2下層	壺	弥生前期末～中期初頭		3mm大の長石、チャート、赤色酸化土粒を多く含む(やや粗)	やや軟	2.5Y8/3淡黄		
図21-3	溝2下層	壺	弥生前期末～中期初頭		3mm大以下の石英、長石、チャートを多く含む(密)	堅緻	内：2.5YR6/4にぶい橙 外：10YR7/2にぶい黄橙		
図21-4	溝2下層	壺	弥生前期末～中期初頭		2mm大の石英、長石、チャートを多く含む(やや粗)	堅緻	7.5YR7/3にぶい橙		
図21-5	溝2下層	壺	弥生前期末～中期初頭		3mm大以下の石英、長石、チャートを多く含む(粗)	やや軟	内：2.5Y7/1灰白 外：7.5YR7/6橙		
図21-6	溝2下層	壺	弥生前期末～中期初頭	口径23.7cm	2mm大以下の石英、長石、チャート、雲母、赤色酸化土粒を含む(やや粗)	やや軟	10YR7/2にぶい黄橙		5%以下(口縁部)
図21-7	溝2下層	壺	弥生前期末～中期初頭	口径20.4cm	2mm大の石英、長石，チャートを多く含む(粗)	堅緻	10YR8/3浅黄橙		10%(口縁部)
図21-8	溝2下層	壺	弥生前期末～中期初頭	底径9cm	1mm大以下の長石、チャートを少量含む(密)	やや軟	内：10YR7/3にぶい黄橙 外：10YR6/6明黄褐		100%(底部)
図21-9	溝2下層	壺	弥生前期末～中期初頭	底径8.4cm	1mm大以下の石英、長石、チャートを含む(やや粗)	やや軟	2.5Y7/1灰白		100%(底部)
図21-10	溝2下層	壺	弥生前期末～中期初頭	底径11.4cm	3mm大の長石、チャートを多く含む(やや粗)	堅緻	内：10YR4/1褐灰 外：10YR6/1褐灰		20%(底部)
図21-11	溝2下層	鉢	弥生前期末～中期初頭	口径17.5cm	2mm大の長石を含む(密)	堅緻	7.5YR6/2灰褐		5%以下(口縁部)
図21-12	溝2下層	壺	弥生前期末～中期初頭	底径5cm	2mm大以下の石英、長石、チャートを少量含む(密)	堅緻	2.5Y7/2灰黄		100%(底部)
図21-13	溝2下層	甕	弥生前期末～中期初頭		1mm大の長石、チャートを含む(密)	堅緻	10YR8/3浅黄橙		
図21-14	溝2下層	甕	弥生前期末～中期初頭		2mm大以下の石英、長石、チャートを含む(密)	やや軟	10YR7/2にぶい黄橙		
図21-15	溝2下層	甕	弥生前期末～中期初頭	口径22.3cm	0.5mm大以下の石英を少量含む(密)	堅緻	内：10YR6/2灰黄褐 外：7.5YR5/1褐灰		5%以下(口縁部)
図21-16	溝2下層	甕	弥生前期末～中期初頭	口径23.2cm	2mm大の石英、長石、チャートを含む(密)	堅緻	内：10YR7/2にぶい黄橙 外：10YR3/1黒褐		5%以下(口縁部)
図21-17	溝2下層	甕	弥生前期末～中期初頭		2mm大のチャートを含む(密)	堅緻	内：2.5YR8/3淡黄 外：10YR7/1灰白		
図21-18	溝2下層	鉢	弥生前期末～中期初頭	底径4.8cm	2mm大の長石、チャートを多く含む(密)	堅緻	10YR5/2灰黄褐		100%(底部)
図21-19	溝2下層	甕	弥生前期末～中期初頭	底径6.7cm	2mm大以下の長石、チャートを多く含む(粗)	軟	内：10YR6/2灰黄褐 外：10YR6/1褐灰		30%(底部)
図21-20	溝2下層	甕	弥生前期末～中期初頭	底径7cm	2mm大の長石、チャートを多く含む(やや粗)	堅緻	内：2.5YR7/3浅黄 外：2.5YR6/2灰黄		25%(底部)
図21-21	溝2下層	甕	弥生前期末～中期初頭	底径8.3cm	3mm大の石英、長石を多く含む(密)	堅緻	内：2.5Y8/3淡黄 外：2.5Y4/1黄灰		20%(底部)
図21-22	溝2下層	甕	弥生前期末～中期初頭	底径6.4cm	2mm大以下の長石、チャートを多く含む (やや粗)	堅緻	10YR6/2灰黄褐		25%(底部)
図21-23	溝2下層	甕	弥生前期末～中期初頭		0.5mm大以下の長石、チャートを少量含む(密)	堅緻	10YR7/2にぶい黄褐		
図21-24	溝2下層	甕	弥生前期末～中期初頭	底径7.4cm	2mm大以下の石英、長石、チャートを多く含む(密)	堅緻	7.5YR7/2明褐灰		80%(底部)
図21-25	溝2下層	石包丁	弥生前期末～中期初頭	長さ5.8cm 幅8.3cm 厚さ0.9cm				石材(粘板岩)	
図22-1	溝1上層	須恵器杯蓋	古墳後期	口径16.5cm 器高4.6cm	2mm大以下の長石を含む(密)	堅緻	N5/灰		60%(底部)
図22-2	溝1上層	須恵器杯身	古墳後期	口径12.9cm 器高4.3cm 最大径15.6cm	0.5mm大の長石を含む(密)	やや軟	N7/灰白		80%
図22-3	溝1上層	須恵器杯身	古墳後期	口径13.1cm 器高4.5cm 最大径15.7cm	0.5mm程度の長石を若干含む(密)	堅緻	内：N7/灰白 外：5B6/1		約60%
図22-4	溝1上層	須恵器甕	古墳後期			堅緻	2.5Y7/1灰白		
図22-5	方形周溝墓1北周溝上層	須恵器甕	古墳後期	口径19cm	1mm大以下の長石を少量含む(密)	堅緻	内：N6/灰 外：2.5Y7/1灰白		5%以下(口縁部)
図22-6	方形周溝墓1東周溝上層	須恵器甕	古墳後期			堅緻	2.5Y7/1灰白		
図22-7	方形周溝墓1南周溝上層	須恵器杯身	古墳後期	口径13.6cm 器高3.9cm 最大径16.2cm	1mm大の長石を含む(密)	堅緻	N5/灰		5%(口縁部)
図22-8	方形周溝墓1南周溝上層	須恵器杯蓋	古墳後期	口径14.2cm	(密)	堅緻	内：N7/灰白 外：N7.5Y7/1灰白		10%(口縁部)
図22-9	方形周溝墓1南周溝上層	須恵器杯身	古墳後期	口径12.9cm 器高5cm 最大径15.3cm	0.5mm大の長石を含む(密)	堅緻	内：N7/灰白 外：N5/灰		80%
図22-10	方形周溝墓1南周溝最上層	須恵器壺	奈良	底径4.8cm	(密)	堅緻	内：N7/灰白 外：N6/灰		60%(底部)
図22-11	溝2上層	須恵器直口壺	古墳後期		1mm大以下の長石を少量含む(密)	堅緻	N6/灰		
図22-12	包含層	土師器土釜	平安後期	口径31.2cm	1mm大の石英、長石、チャートを多く含む(粗)	軟	2.5YR5/6明赤褐		20%(口縁部)
図22-13	包含層	土師器長胴甕	古墳後期	口径28.4cm	2mm大以下の石英、長石、1mm以下の赤色酸化土粒を含む(やや粗)	軟	7.5YR7/3にぶい橙		

第4章　考察

第1節　初期区画墓と土器棺墓

1．目的

古川遺跡では、弥生時代前期末～中期初頭の方形周溝墓群を検出した。北河内地域としては初めての例であり、大阪府下では茨木市東奈良遺跡、高槻市安満遺跡、八尾市田井中遺跡、堺市四ツ池遺跡、和泉市池上・曽根遺跡に続いて6遺跡目となる。当遺跡では方形周溝墓が群を構成しており、大阪府下の初期方形周溝墓はこれまで単独でしか検出例がなかったため、今回の発見は重要である。また、当遺跡で重視すべきは土器棺の発見である。東奈良遺跡や池上・曽根遺跡でも、方形周溝墓に伴う弥生時代前期の土器棺[1)]が検出されているが、東奈良遺跡では方台部から、池上・曽根遺跡では周溝内から発見されている。古川遺跡例は方台部からで、弥生時代前期の土器棺が方形周溝墓方台部に位置する例は、府下において2例目となる。

そこで本稿では、これまでの研究を振り返り、区画墓という概念の整理を試みた上で、そこに介在する問題点を指摘する。この問題点をふまえて、管見にふれた弥生時代の「初期区画墓」を集成し、古川遺跡の意義を検討する。また近畿地方を中心に、弥生時代前期の土器棺墓の様相と比較しながら、方形周溝墓と土器棺墓との関係という視点から、当遺跡土器棺の位置付けを試みることを目的とする。

2．初期区画墓の研究史と問題点

弥生時代前期の「区画墓」についての研究は、資料数の制約もあって進展してきたとは言えない。しかし、近年弥生時代前期にまで遡る資料が増加しており、これらの資料をめぐって議論がされ始めており、初期区画墓について関心が高まっている。ここでは、区画墓の発生という問題に重点を置きながら、研究史を振り返り、研究の現状を把握し問題点を明確にしてみたい。

学史を概観すると、用語規定の不統一から「区画墓」「周溝墓」「墳丘墓」「台状墓」という用語が乱立した結果、混乱が生じている様子が窺える。初期「区画墓」を考える上では、一体何の「出現」について述べているのか、何が「成立」するのか、どこに「起源」があるのかという点に留意し、統一した概念・用語によって学史を再検討し再認識することが、初期区画墓研究の前提ではないかと考えた。

区画墓の起源についての諸学説については、本間元樹と中村 弘によって類型化されている(本間 1997・中村1998)。これらを総合すると、四つに類型化できると考えられる。以下、これらの諸説について具体的にみていきたい。

ここで、筆者の立場を明確にしておこう。先学の諸定義のうち本間元樹と中村弘の定義（本間 1997・中村 1998）にならい、弥生時代墓制のうち、他と区画された場所に人を葬った墓の大概念として「区画墓」を設定する。次に、これらのうち溝によって周囲と区画され盛土をするものを「周溝墓」とし、それ以外の方法によって周囲と区画し盛土をするものを「墳丘墓」とする。しかし、「遺跡で痕跡として現れる現実においてはその両者を区別し、証明することは難しく、あくまでも概念として理論上存在するもの」（中村 1998）であり、実態は不明瞭である。しかし、周溝の有無という点で各地の区画各墓をあらかた区分することは可能ではないかと考える。前述のように区画墓を細分するならば、初期区画墓についての諸説は更に細分して検討する必要が生じる。つまり、前述の四つの説に立つ論者間でも用語が不統一で、解釈が微妙に異なっているからだ。

では次に、具体的に学史をみていくことにしたい。これらの説は墓制の起源→出現→成立→展開という図式で、次のように整理することを提案したい。

1．区画墓の起源
- い．周溝墓の起源
  - A．中国
  - B．韓半島
  - C．日本独自
- ろ．墳丘墓の起源
  - A．中国
  - B．韓半島
  - C．日本独自

2．日本国内での区画墓の出現
- い．周溝墓の出現
  - A．北部九州説
  - B．畿内説
  - C．同時多発説
- ろ．墳丘墓の出現
  - A．北部九州説
  - B．畿内説
  - C．同時多発説

3．日本国内での区画墓の成立
- い．周溝墓の成立
  - A．北部九州説
  - B．畿内説
  - C．同時多発説
- ろ．墳丘墓の成立
  - A．北部九州説
  - B．畿内説
  - C．同時多発説

4．日本国内での区画墓の展開
- い．周溝墓の展開
- ろ．墳丘墓の展開

特に「1－い」の問題について、最近韓国忠清南道保寧市寛倉里遺跡で、後期無文土器を伴う計100基の「周溝墓」が群を構成した状態で検出され話題となった。調査者の李 弘鐘によれば「周溝墓」とは、平地に墓坑を掘り込んだ後に盛土によって墳丘を構築するか、または平地に盛土をし墳丘を構築した後に墓坑を掘り込んだものの周囲に溝を巡らす墓となり、周溝が円形のものも、方形のものも包括している(李 1997)。この定義と日本の周溝墓はほぼ同一の遺構を指すものと理解できる。また李は韓国と日本の周溝墓との関連についてふれている。寛倉里遺跡の周溝墓は紀元前3～紀元前1世紀にかけての時期と考えられる。このことと、兵庫県東武庫遺跡から弥生時代前期の周溝墓が計20基検出され、2号墓周溝から松菊里式系土器が出土したことから、日本の周溝墓の起源は韓半島に求められるとの見解を示した。韓半島に周溝墓の起源を求める上で、有力な事例が提示されたことになる。この発見があるまでは、戦国時代の中国に周溝墓の起源を求める説が多かった(澤田 1980・都出 1987・藤沢 1987・兪 1993, 1996)が、今後韓半島での資料が増加することによって韓半島の周溝墓と中国の周溝を有する墳墓との関係が、具体的に検討できる可能性がでてきた。

そこで先述の認識と用語で区画墓の研究史を総括し、これらのうち特に周溝墓の起源と成立の要点を述べ、ここでのまとめとしたい。

まず、周溝墓の起源については、日本独自に発生するのではなく、外的な要素とする意見が主流である。しかし少数ではあるが外的要因ではなく、日本自生のものとし畿内地方に起源を求める意見もある（岸本 19

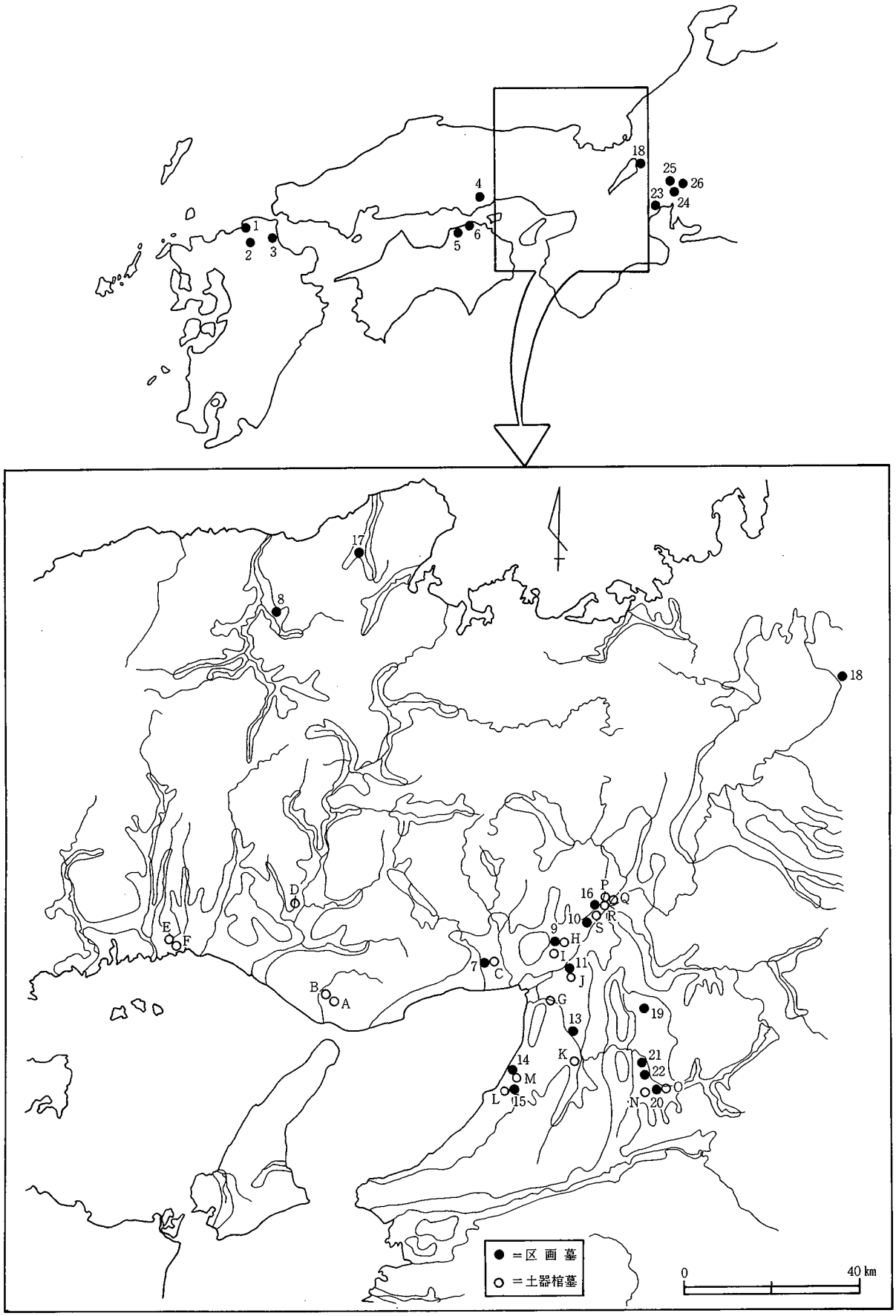


図 23　区画墓と土器棺墓の分布

88)。具体的な地域・時期を、中国の戦国時代に求める説と青銅器時代の韓半島に求める説が有力である。また中国起源説のうちでも、中国から直接韓半島を経由せず、日本に受容されたとする立場（兪 1993,1996）と、中国から韓半島を経由して日本に受容されたとする立場（都出 1987）がある。

出現と成立については、北部九州地方での前期周溝墓例がほとんどないことから、畿内地方に出現し成立したと考える説が有力である（都出 1987・中村 1998）。しかし、福岡県峯遺跡1号墳丘墓が弥生時代前期初頭に位置付けられることから、出現を北部九州地方に求め、成立を畿内地方とする説もある（兪 1993,1996）。また近年畿内地方以外の地域から弥生時代前期の周溝墓が発見されるようになり、支持されるようになったのが同時多発説である（服部 1992・丸山 1994・本間 1997）。

3．初期区画墓と土器棺墓の実態

李 弘鐘も指摘するように、初期区画墓の研究は日韓の相互の研究者が自国だけの問題として完結させるのではなく、頻繁な情報交換によって資料が比較検討される必要がある。その作業をおこなうためには日本各地の初期区画墓について、きっちりと基礎的情報を把握しておくことが前提である。初期区画墓については、本間元樹による労作があり、全国的な集成と検討がおこなわれている（本間 1997）。本間によって適切な各属性についての分析がおこなわれており、現状での区画墓研究の一つの到達点と評価できる。詳細はそちらに譲り、ここではその後の事例を加えて分布状況の実態を明らかにしたい。

また周溝墓の発生は周溝墓自体の分析のみでは解決できず、前期の墓域構成、特に他の埋葬施設との対比がこの問題を解決する鍵であるという指摘（鈴木 1975）は、区画墓の事例が近年増加しているとはいえ、区画墓自体の分析結果から導き出される情報に限界がある現状では、弥生時代前期の墓制の中で他の墓制と比較を試みるという視点は高く評価できる。古川遺跡の場合、方形周溝墓6の方台部に甕を棺身に転用した土器棺が埋設されていた。埋葬施設は、本来あったと思われる盛土が削平されており、これが今回の調査で確認した唯一の埋葬施設である。そこで、本稿では全国の初期区画墓を近畿地方、弥生時代前期土器棺墓の出現の様相を比較するために集成をおこなった。以下初期区画墓、土器棺墓の順に具体的な様態をみていきたい。

3-1 初期区画墓について（表2・図24,25）

管見にふれた初期区画墓は、26遺跡95基である。区画墓のうちわけは、周溝墓が計92基、墳丘墓が計3基となる。周溝墓のうち周溝が方形のものは79基、円形のものは13基ある。ここでは特に本間の集成以降増加した事例についてのみ述べ、個別については表にまとめている[2)]。北部九州地方では福岡県辻垣オサマル遺跡で円形周溝遺構が検出されている（副島 1993）。瀬戸内地方では、香川県佐古川・窪田遺跡で方形18基、円形10基の周溝墓が計28基が、群を構成して検出された（佐藤ほか 1998）。このうち18基は弥生時代前期末の可能性がある。本報告はまだされていないが、瀬戸内地方で大規模な群を構成する例は初見である点と、平面形態の異なる周溝墓が群を構成している点が、特に注目される。同様に弥生時代前期末～中期初頭の周溝墓が群を構成する例が、滋賀県塚町遺跡で発見された。こちらは方形のみ9基から成り、このうち7基が前期に溯るとされる（丸山 1994）。滋賀県で確実に前期まで溯る周溝墓が確認されたのは初めてである点と、長浜市という内陸部での前期周溝墓の事例として注目される。また同じく内陸に立地する奈良県では大福遺跡、伴堂東遺跡といった事例が増加している（萩原 1988・坂,名倉 1996）。大阪湾沿岸では大阪府東奈良遺跡(広瀬，亀島 1990)、田井中遺跡（本間，駒井ほか 1997)、古川遺跡（本報告)、淀川を上って京都府雲宮遺跡

表2　初期区画墓一覧

番号	遺跡名	遺構名	所在地	時期	墳丘規模	文献
1	板付	円墳状隆起	福岡県福岡市	前期末？		中山 1917
2	峯	1号墓	福岡県朝倉郡夜須町	前期初頭	18×13	佐藤 1991
3	辻垣オサマル	円形周溝遺構	福岡県行橋市	前期前葉		副島 1993
4-1	百間川沢田	円形周溝1	岡山県岡山市	前期中葉？		平井編 1993
4-2	〃	円形周溝2	〃	前期中葉	径5.6	〃
5-1	龍川五条	ST01	香川県善通寺市	前期	7.6×6.8	宮崎 1996
5-2	〃	ST02	〃	前期	径4.6～5.2	〃
5-3	〃	ST03	〃	前期	径5.5	〃
6-1	佐古川・窪田	周溝墓1	香川県丸亀市	前期末	7.0×5.5	佐藤ほか 1998
6-2	〃	周溝墓2	〃	前期後葉	9.4以上	〃
6-3	〃	周溝墓3	〃	前期後葉	5.6×5.0	〃
6-4	〃	周溝墓4	〃	前期末？	7.7×5.6	〃
6-5	〃	周溝墓5	〃	前期末	4.6以上	〃
6-6	〃	周溝墓6	〃	前期末～中期初頭	5.2	〃
6-7	〃	周溝墓7	〃	前期末	9.5×7.3	〃
6-8	〃	周溝墓8	〃	前期末～中期初頭	8.8×8.4	〃
6-9	〃	周溝墓9	〃	前期末～中期初頭	3.0×2.7	〃
6-10	〃	周溝墓10	〃	前期末～中期初頭？	5前後	〃
6-11	〃	周溝墓11	〃	前期末	3.6×2.5以上	〃
6-12	〃	周溝墓12	〃	前期末	3.4×2.1以上	〃
6-13	〃	周溝墓13	〃	前期末	3.8×3.4以上	〃
6-14	〃	周溝墓14	〃	前期末	3.6×2.6	〃
6-15	〃	周溝墓15	〃	前期末	4.6×4.2	〃
6-16	〃	周溝墓16	〃	前期末	5.2×3.5	〃
6-17	〃	周溝墓18	〃	前期末	4.5以上×4.0	〃
6-18	〃	周溝墓24	〃	前期末	5前後？	〃
7-1	東武庫	1号墓	兵庫県尼崎市	前期後葉	7.8×6.3	山田編 1995
7-2	〃	2号墓	〃	前期後葉	7.0×6.0	〃
7-3	〃	3号墓	〃	前期中葉	9.6×7.6	〃
7-4	〃	4号墓	〃	前期中葉	11.4×9.1	〃
7-5	〃	5号墓	〃	前期後葉	3.7×(2.7)	〃
7-6	〃	6号墓	〃	前期中葉	6.8×5.4	〃
7-7	〃	7号墓	〃	前期中葉	5.6×	〃
7-8	〃	8号墓	〃	前期	3.5×3.3	〃
7-9	〃	10号墓	〃	前期後葉	14.0×12.3	〃
7-10	〃	12号墓	〃	前期中葉	6.0×4.0	〃
7-11	〃	13号墓	〃	前期中葉	4.0×	〃
7-12	〃	14号墓	〃	前期後葉	5.8×5.5	〃
7-13	〃	15号墓	〃	前期後葉	16.0×8.5	〃
7-14	〃	16号墓	〃	前期後葉	7.0×6.8	〃
7-15	〃	17号墓	〃	前期後葉	4.3×3.5	〃
7-16	〃	18号墓	〃	前期後葉	5.7×3.4	〃
7-17	〃	19号墓	〃	前期後葉	(6.5)×(3.5)	〃
7-18	〃	20号墓	〃	前期前葉	6.5×	〃
7-19	〃	21号墓	〃	前期後葉	3.8×	〃
7-20	〃	22号墓	〃	前期前葉	4.4×	〃
8-1	駄坂・舟隠	4号墓	兵庫県豊岡市	前期後葉～中期初頭	7.3×	瀬戸谷編 1989
8-2	〃	7号墓	〃	〃	7.2×	〃
8-3	〃	9号墳下層	〃	〃		〃
8-4	〃	11号墓	〃	〃	(11)×7.3	〃
8-5	〃	12号墓	〃	〃	6.5×(4.2)	〃
8-6	〃	13号墓	〃	〃	10.5×(6)	〃
8-7	〃	14号墓	〃	〃	(11.3)×	〃
8-8	〃	15号墓	〃	〃	(4)×	〃
9-1	東奈良	1号墓	大阪府茨木市	前期中葉～後葉		東奈良遺跡調査会 1974
9-2	〃	2号墓	〃	〃		〃
9-3	〃	4号墓	〃	〃		〃
9-4	〃	7号墓	〃	〃		〃
9-5	〃	4号方形周溝墓	〃	前期	8.5×5.5	広瀬・亀島 1990
10	安満	方形周溝墓14	大阪府高槻市	前期		森田・橋本 1977
11-1	古川	方形周溝墓1	大阪府門真市	前期末	8.0×6.4	本報告
11-2	〃	方形周溝墓5	〃	〃	6.0×	〃
11-3	〃	方形周溝墓6	〃	〃		〃
11-4	〃	方形周溝墓7	〃	〃		〃
11-5	〃	方形周溝墓9	〃	〃		〃
13	田井中	方形周溝墓96	大阪府八尾市	前期後葉	12.4×9.3	本間・駒井ほか 1997
14	四ツ池	方形周溝墓	大阪府堺市	前期	(7.5)×(7.0)	津島 1974
15	池上曽根	Ⅰ-1号	大阪府和泉市	前期後葉	8.3×7.0	第2阪和国道内遺跡調査会編 1971
16	雲宮	SD48	京都府長岡京市	前期前葉		中川・田畑ほか 1997
17-1	七尾	方形台状墓Ⅰ	京都府中郡峰山町	前期後葉？		田中・林 1982
17-2	〃	方形台状墓Ⅱ	〃	前期後葉		〃
18-1	塚町	SX01	滋賀県長浜市	前期末	7.5×7.15	丸山 1994
18-2	〃	SX02	〃	〃	5.05×	〃
18-3	〃	SX03	〃	〃	4.8×3.9	〃
18-4	〃	SX04	〃	〃	3.45×	〃
18-5	〃	SX05	〃	〃	4.4×4.2	〃
18-6	〃	SX07	〃	〃	10.9×	〃

番号	遺跡名	遺構名	所在地	時期	墳丘規模	文献
18-7	塚町	SX09	滋賀県長浜市	前期末	9.12×	丸山 1994
19	佐紀	SX16360	奈良県奈良市	前期中葉〜後葉	11×9.5	深澤ほか 1995
20	大福	溝Ⅰ	奈良県桜井市	前期後葉		萩原 1988
21-1	伴堂東	方形周溝墓ST03	奈良県磯城郡三宅町	前期末？		坂・名倉 1996
21-2	〃	方形周溝墓ST06	〃	前期末		〃
22	多	方形区画墓状遺構	奈良県磯城郡田原本町	前期末	7×	寺澤編 1986
23	松ノ木	方形周溝墓11	三重県津市	前期末	9.0以上×6.8以上	竹内 1993
24	朝日	SX140	愛知県西春日井郡清洲町	前期末？	5.0×	石黒ほか 1991
25-1	山中	SZ01	愛知県一宮市	前期後葉	9.8×8.0	服部ほか 1992
25-2	〃	SZ02	〃	〃	10.0×7.0	〃
25-3	〃	SZ03	〃	〃	10.8×10.5	〃
25-4	〃	SZ04	〃	〃	(8.0)×6.7	〃
25-5	〃	SZ05	〃	〃	5.7×4.2	〃
25-6	〃	SZ06	〃	〃	6.5×5.6	〃
25-7	〃	SZ07	〃	〃	6.5×(5.1)	〃
25-8	〃	SZ08	〃	〃	8.4×(6.0)	〃
25-9	〃	SZ09	〃	〃	(9.5)×7.0	〃
26	松河戸		愛知県春日井市	前期		毎日新聞 1996

表３　近畿地方の弥生前期土器棺墓一覧

番号	遺跡名	遺構名	所在地	時期	立地	器種組成	埋葬状態	備考	文献
A	新方	土器棺	兵庫県神戸市	前期前	B	Ⅳ6	逆位	溝内に成人とともに埋葬	神戸市教育委員会 1997
B	玉津田中	SX24001	〃	前期末	B	Ⅰ4	直位	棺身壺体部に焼成後穿孔	多賀編 1995
C-1	東武庫	5号墓土器棺墓	兵庫県尼崎市	前期末	A1	Ⅰ6	斜位	棺内から石鏃一個出土	山田編 1995
C-2	〃		〃	前期中	E1	Ⅰ6	横位		中村編 1991
D	河高・上ノ池	SX-05	兵庫県加東郡滝野町	前期末	B	Ⅱ6	横位		森下・今 1997
E	袋尻浅谷	第1号壺棺墓	兵庫県揖保郡揖保川町	前期後	B	Ⅰ6	斜位		松本・加藤 1978
F-1	半田山	土器棺墓1	〃	前期末	B	Ⅰ5	斜位		渡辺ほか 1989
F-2	〃	土器棺墓2	〃	〃	B	Ⅰ6	斜位		〃
G	長原	土器棺墓2	大阪府大阪市	前期前	B	Ⅰ1		土器片により側壁と蓋を構成	松尾ほか 1983
H	耳原	16号甕棺	大阪府茨木市	前期後	E1	Ⅱ2	横位		奥井 1982
I	東奈良	1号墓壺棺	〃	前期中	A1				中村 1998
J	古川	方形周溝墓6土器棺	大阪府門真市	前期末	A1	Ⅱ8			本報告
K	国府		大阪府藤井寺市	前期中	E1	Ⅱ2	斜位	棺身甕体部に焼成後穿孔	石神 1972
L	池上曽根		大阪府和泉市	前期	A2				第二阪和国道内遺跡調査会編1971
M	浜寺黄金山		大阪府堺市	前期					森・田中 1953
N-1	坪井	土器棺墓1	奈良県橿原市	前期前	B	Ⅱ4	斜位		斎藤・松本 1995
N-2	〃	土器棺墓2	〃	〃	B	Ⅰ6	斜位		〃
N-3	〃	土器棺墓3	〃	〃	B	Ⅱ4	斜位		〃
N-4	〃	SK-14	〃	前期末	B	Ⅰ2	斜位	縄文晩期系土器を棺に転用	松本 1997
N-5	〃	SK-17	〃	〃	B	Ⅰ6	横位	同一土坑に棺二個を埋設	斎藤・松本 1995
N-6	〃	SK-17	〃	〃	B	Ⅰ6	横位	〃	〃
O	大福	土器棺1	奈良県桜井市	前期後	E1	Ⅰ1			亀田編 1978
P	鴨田	壺棺SX14306	京都府向日市	前期中	E1	Ⅰ1	斜位		山中 1987
Q	鶏冠井	土壙SK21871	〃	〃	E1	Ⅰ6			國下ほか 1997
R	開田	甕棺墓	京都府長岡京市	〃	E1	Ⅱ1	横位		福永 1991
S	雲宮	SX29719	〃	前期	E1				小田桐 1994
T	中臣	甕棺墓	京都府京都市	前期				群を構成しているか？	林屋編 1983

（中川，田畑ほか 1997）と事例は増加した。また詳細は不明であるが、愛知県松河戸遺跡で貼石を有する周溝墓が発見されている（毎日新聞 1996）。

3-2 土器棺墓について（表3・図26，27）

近畿地方で弥生時代前期の遠賀川系土器を使用する土器棺墓は[3]、20遺跡27例が管見にふれ、丹念にみていくと弥生時代前期の土器棺墓は一定量存在していることがわかる。表3には筆者の設定した項目、立地、棺の器種組成、埋葬状態も併記している[4]。これらの項目別にみていく。立地はA1類が3例、A2類が1例、B類が13例、E1類が8例となる。器種組成は、Ⅰ類についてはⅠ1類が3例、Ⅰ2類が1例、Ⅰ4類が1例、Ⅰ6類が7例である。Ⅱ類についてはⅡ1類が1例、Ⅱ2類が2例、Ⅱ4類が2例、Ⅱ6類が1例である。Ⅳ類についてはⅣ6類が1例である。埋葬状態については、直位が1例、横位が6例、斜位が10例、逆位が1例である。

4．初期区画墓と土器棺墓をめぐって

前章では初期区画墓と土器棺墓について個別に様相を概観した。次にこれらの二つの墓制の関係について検討を行ってみる（図23）。

区画墓全体では、北部九州地方で3遺跡、瀬戸内地方で3遺跡、近畿地方で16遺跡、東海地方で4遺跡となる。この結果からも、従来から指摘されていたように近畿地方の遺跡数が最も多い。しかし、他の地域でも事例は増加しており、均等な分布状況を示していることがわかる。遺構の削平のため、詳細な検討は現段階では困難ではあるが、周溝墓では主体部、周溝形態、平面形態などで出現当初からかなりの地域差が認められるようだ。これらの差異の背景は、渡来人集団の差異が反映されたのではないかとの説（本間 1997）が提示されているが、筆者も概ねこの説に賛成でき、周溝墓の出現と成立は多元的であると考えたい。

次に近畿地方の弥生時代前期土器棺墓の分布を周溝墓との関係という観点からみてみたい。土器棺墓全体では日本海側には分布せず、瀬戸内海、大阪湾沿岸やその周辺に集中して分布していることがわかる。土器棺墓のうち他の墓制との関係をみると、近畿地方では周溝墓と関係し、方台部や周溝に設置される場合が4例ある。また土器棺のみ単独で存在する場合が7例ある。また、土坑墓と関係し群を構成するものが13例ある。周溝墓の方台部や周溝に埋設するのは、弥生時代前期では近畿地方のみで見られる現象である。特に畿内の大阪湾沿岸にのみ分布している事実は意義深い。

弥生時代の土器棺墓についても区画墓同様に、その起源→発生→成立→展開というレベルでそれぞれについて検討をする必要がある。弥生時代土器棺墓の起源についても、いくつかの説が唱えられている。土器棺墓については区画墓とは異なり、この墓制の起源を外的要因ではなく内的な問題として考える説が、現状では優勢である。つまり縄文時代後期から多く見られるようになる「埋甕状遺構」や、「土器棺墓」にその源流を求める考えである。中国大陸には戦国時代に「子供」用の瓷棺（土器棺）が多く見られる。しかし、韓半島では青銅器時代の土器棺は数が少ないことから、起源を稲作の伝播と直接結び付けて考え難い状況に起因するのであろう。日本での土器棺墓の発生と成立の地としては、北部九州地方説（橋口 1992，坂本 1994）が最も有力であるが、伊勢湾沿岸との関係とみる説（小林 1951）も看過できない。いずれにせよ、弥生時代前期の土器棺墓は、北部九州地方の成人用甕棺の祖型となるものと、伊勢湾周辺地域の条痕文土器を使用する「合口」状のものの両者の数が圧倒的に多く、近畿地方では数量的にこれらと比しては少ないが、一定量が存在しうることが判明した。また周溝墓と関係した土器棺が畿内の大阪湾沿岸には今回の集成結果では、

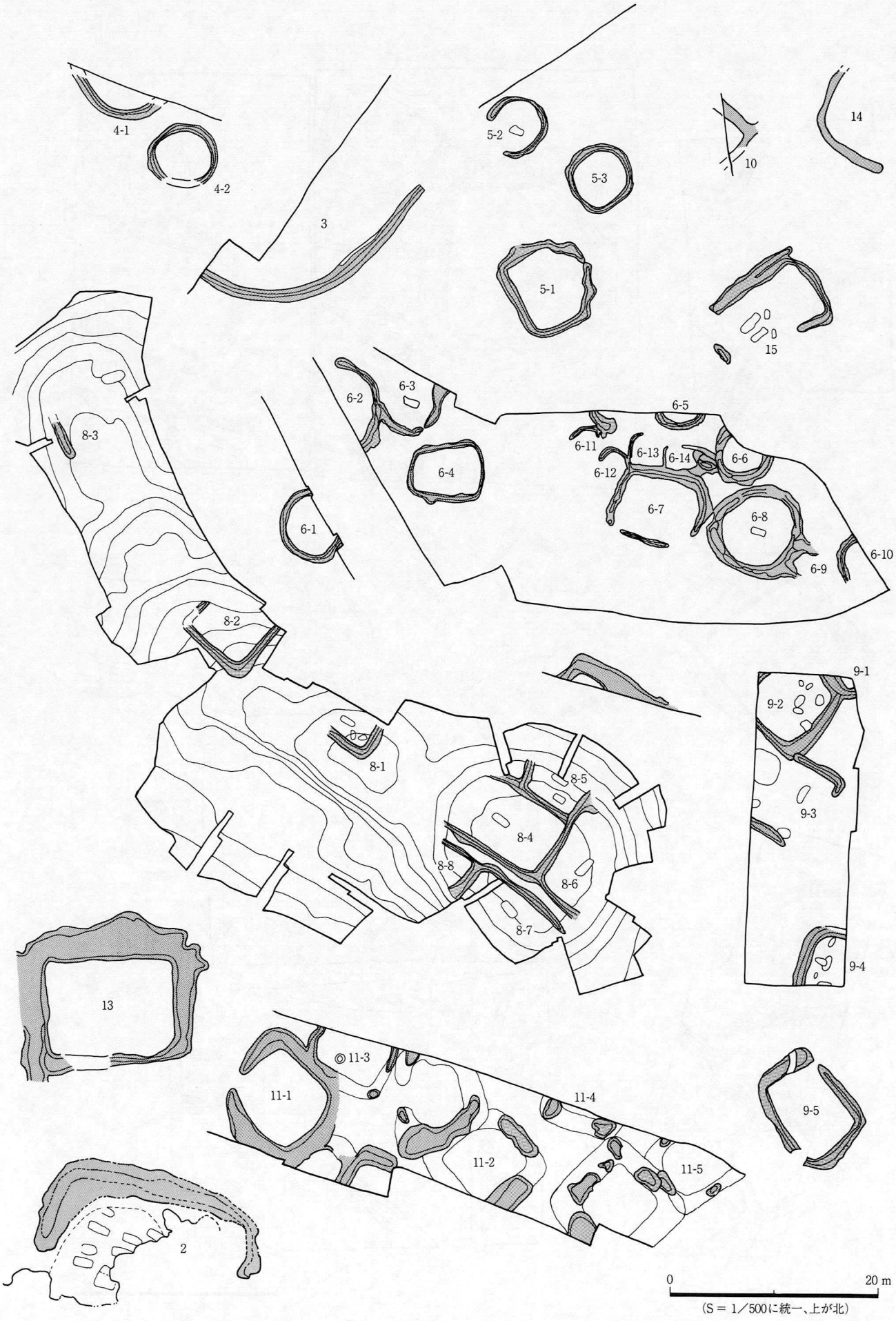


図 24　弥生前期の区画墓集成（1）（本間1997を参考に各文献より作成）

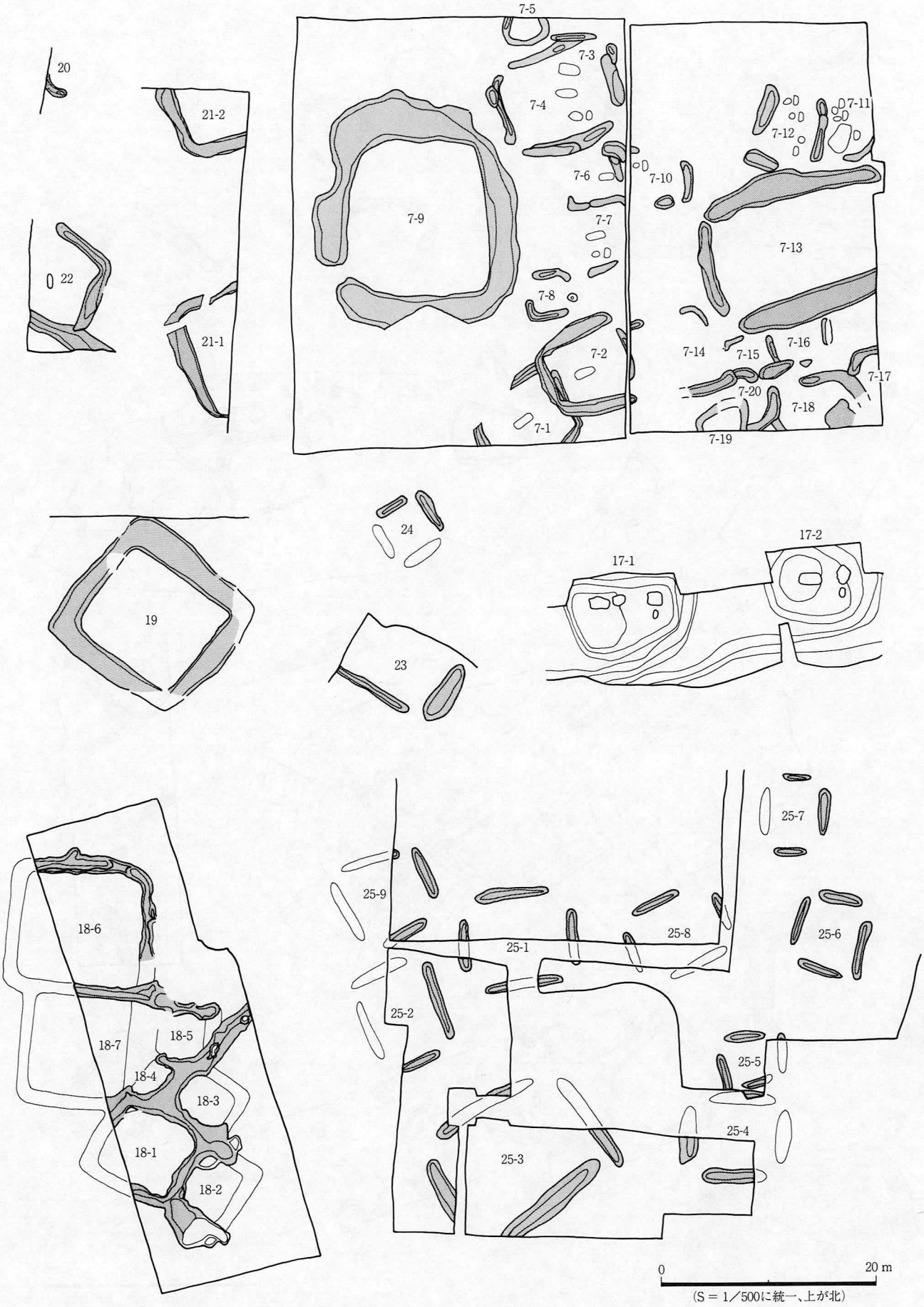


図25　弥生前期の区画墓集成（2）（本間1997を参考に各文献より作成）

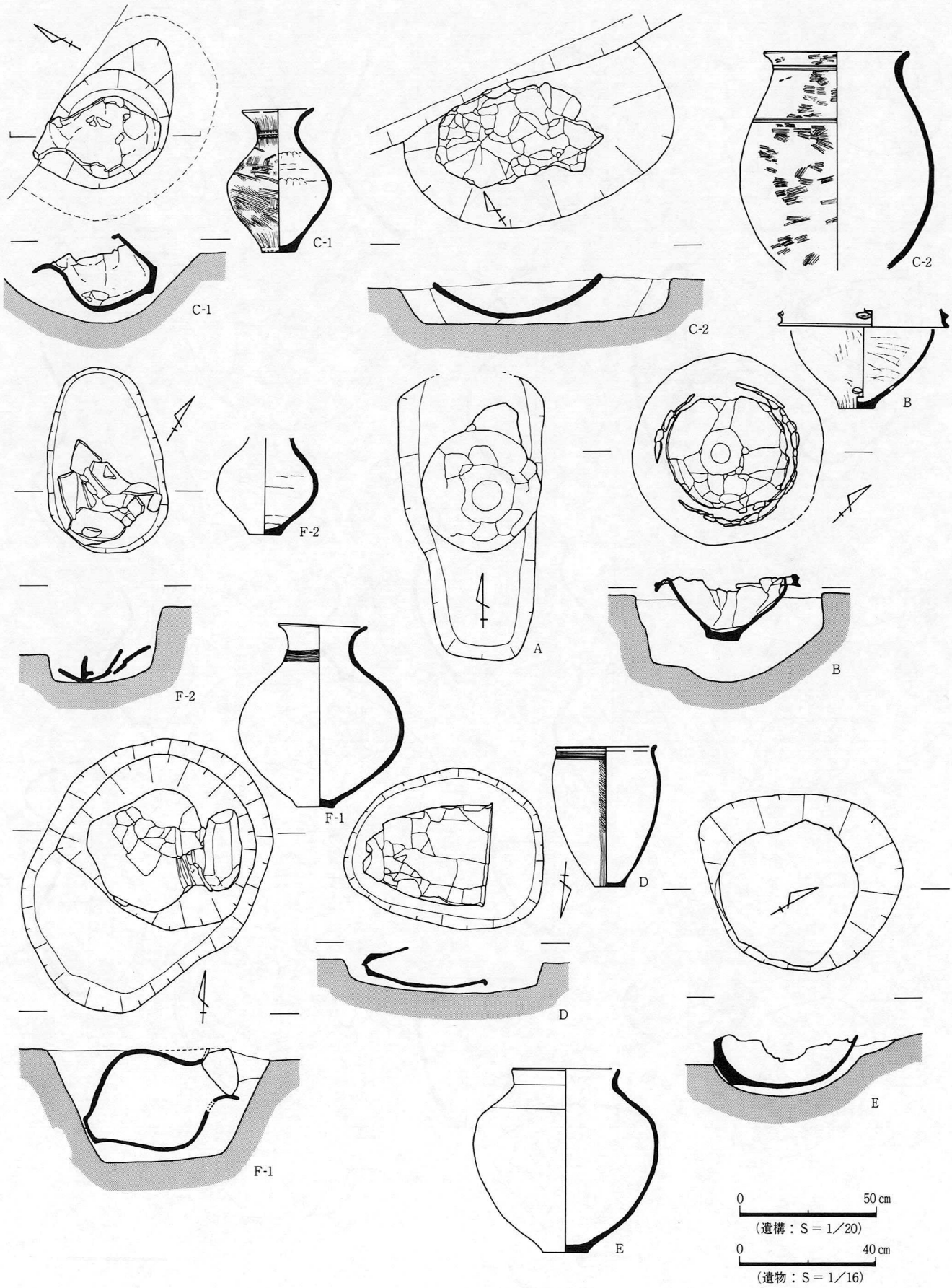


図 26　近畿地方の弥生時代前期土器棺（1）（各文献より作成）

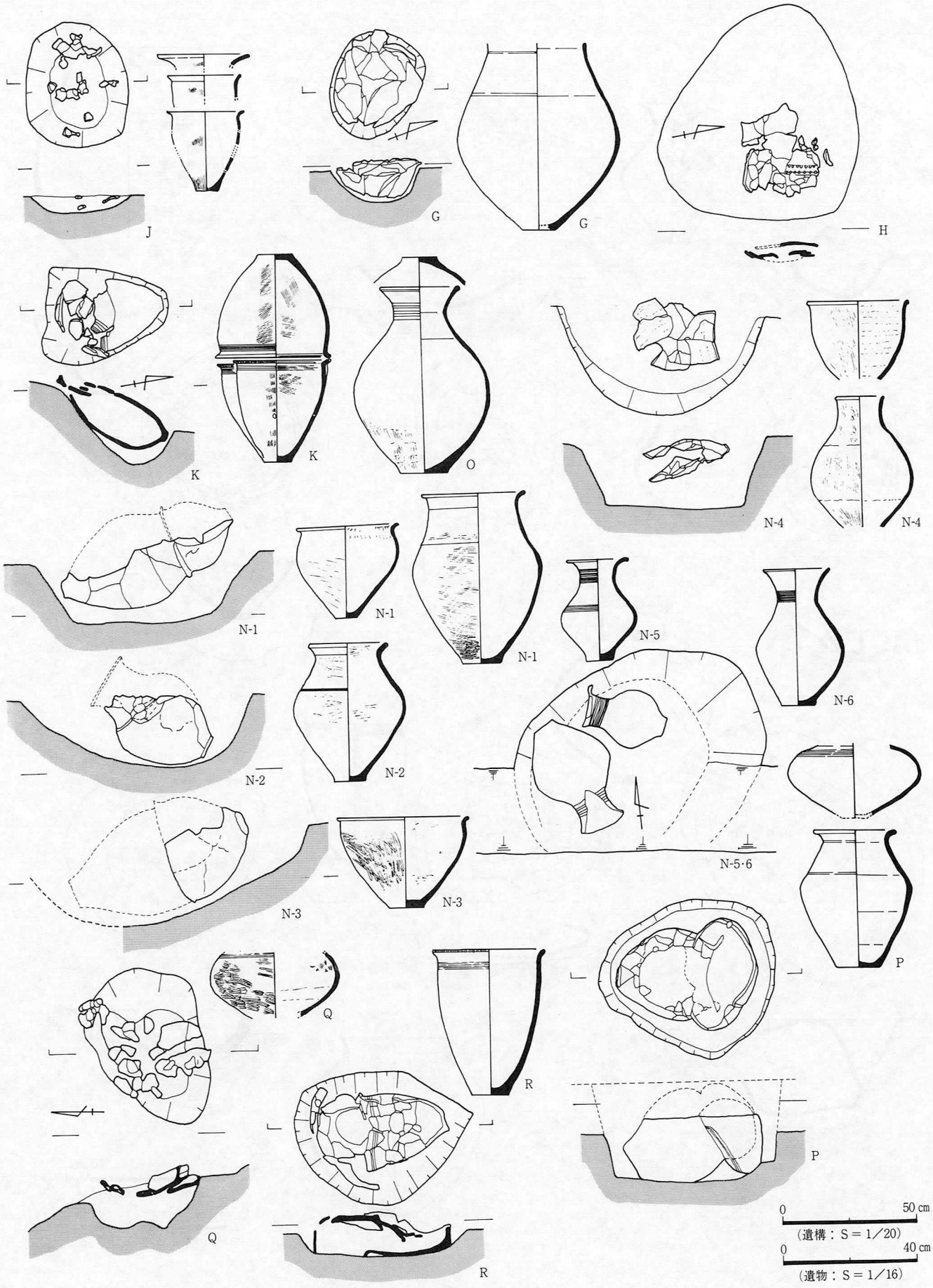


図 27　近畿地方の弥生時代前期土器棺（2）（各文献より作成）

ある一定数は存在していたようである。しかし前述の寛倉里遺跡周溝墓の発見によって、周溝墓の起源が韓半島である説が一気に浮上したように、今後韓国での調査によって、周溝と関係する青銅器時代の土器棺が発見される可能性もある。

周溝墓と関係する土器棺墓の時期は、前期中葉から末のものである。これに対して畿内最古と考えられる土器棺は、弥生時代前期前半とされる兵庫県神戸市新方遺跡例である。この土器棺は溝状遺構に倒立した状態で鉢を埋設しており、溝内には他に成人2体が埋葬されていた（神戸市教育委員会 1997）。近畿地方での土器棺墓と周溝墓出現時の形態差を考える上で、先の周溝墓と関係する土器棺の事例と比較してみると、興味深い。周溝墓や土器棺墓の出現時での混沌とした様子が窺える資料である。

以上のように、周溝墓と土器棺墓の分布という視点から、弥生時代前期の近畿地方の様相を検討してみた。両者の分布は、大阪湾沿岸とその周辺に集中するという点で一致している。しかし、周溝墓の発見例がない播磨で土器棺墓が分布したり、土器棺墓の発見例のない兵庫県豊岡市や滋賀県長浜市で周溝墓が分布していたりという齟齬も来している。これらの地域で、それぞれどのような人々が新たな墓制を採用し、周溝墓や土器棺墓が出現したのかということの背景を考えることが必要である。

5．おわりに

古川遺跡で検出された初期方形周溝墓群と土器棺を手掛かりとして、全国の初期区画墓と近畿地方弥生前期土器棺墓との実態を把握し、具体的に近畿地方ではこの二つの墓制がどのように分布し、関係しているのかを簡単に検討した。この結果、ほぼ両者の分布は一致し、古川遺跡の立地する大阪湾沿岸部に両者の分布は集中することがわかった。この結果からも、今後大阪湾沿岸では初期区画墓や初期土器棺墓の発見が期待できる。また、周溝墓の起源の問題については、韓国寛倉里遺跡周溝墓群の発見から、韓半島に求める説が支持されつつある。日本での出現・成立については、同時多発説が有力である。日本的文化の成立とみなされる弥生時代の墓制を考える上で、環東アジア的視点が必要となってきている。現在の我々の価値観・歴史観による日本の境界から考古資料を考えるのではなく、トランスポジションの視座から文化や歴史を考えていくことにより、これまで見落とされていた事実が認識されるのではないかと考える。（文章中敬称略）

謝辞　本稿をなすにあたって、以下の諸氏・諸先生から御教示と資料の提供を受けた。記して感謝します。
稲田望子、林 志暎、大庭重信、大森 円、金 漢相、岸本一宏、駒井正明、田畑直彦、中川 寧、林 大智、深澤芳樹、本間元樹、三好孝一（順不同・敬称略）

（角南）

【註】

1）本来は墓制としての「土器棺墓」という語というと、周溝墓や古墳の主体部として埋葬用に土器が使用されている場合の、葬法としての「土器棺」という語が存在するが、本文中では混乱を回避するためあえて用語は統一していない。

2）島根県飯石郡頓原町門遺跡では貼石を有する円形周溝墓1基が検出されている。しかし周溝と埋葬主体部から出土したのは、縄文時代晩期の浅鉢土器、深鉢土器、磨製石斧、石鏃、叩石などである。かなりの削平を受けているため、出土遺物の時期にこの遺構を帰属させてよいのかどうか疑問である。貼石を有する点、平面形態が円形を呈する点、縄文時代晩期には他に周溝を配する墓が未発見である点などから、削平された円墳に縄文時代晩期の遺物が混入したとも解釈できる。しかし、縄文時代晩期並行期には韓半島で周溝墓が出現している点と、瀬戸内地方では弥生時代前期末の周溝墓の平面形態に円形を呈するものが多い点などから、縄文時代晩期の遺物がこの円形周溝墓に伴うものとも

解釈できないわけではない。ここでは、どちらの解釈が適切かの判断は保留しておくが、今後西日本地域のどこかで同様の事例が増加するかもしれないため、あえてこの事例を無視せず、この場で取りあげてみた。

3）土器棺・土器棺墓の諸属性については、前稿に基本的に従うが（角南・山内 1998，角南 1999）、対象地域を拡大するにあたって要所で改訂をおこなっている。本稿で問題とする、立地・棺の器種組成・埋葬状態についてあげておく。

《立地》

A類－方形周溝墓・円形周溝墓と立地上関係するもの

A１－方（円）形周溝墓の主体部として埋置されたもの

A２－方（円）形周溝墓の溝内・溝底に埋置されたもの

A３－方（円）形周溝墓に隣接して埋置されたもの

B類－土坑墓と立地上関係するもの

C類－墳丘墓と立地上関係するもの

C１－墳丘墓の主体部として埋置されたもの

C２－墳丘墓の盛土・墓坑内に埋置されたもの

D類－古墳と立地上関係するもの

D１－古墳の主体部として埋置されたもの

D２－古墳の墳丘隅に埋置されたもの

D３－古墳の周溝内に埋置されたもの

D４－古墳に隣接して埋置されたもの

E類－単一墓制（他の墓制と立地上関係しないもの）

E１－単独

E２－複数

F類－住居跡の覆土中・床下・周辺に埋置されたもの

G類－支石墓と立地上関係するもの

H類－箱式石棺墓と立地上関係するもの

《器種組成》

Ⅰ類－棺身に壺を使用するもの

Ⅰ１－棺蓋に壺を使用するもの

Ⅰ２－棺蓋に甕を使用するもの

Ⅰ３－棺蓋に高杯を使用するもの

Ⅰ４－棺蓋に鉢を使用するもの（台付鉢も含む）

Ⅰ５－棺蓋に石を使用するもの（板石・河原石等）

Ⅰ６－棺蓋が無いもの（＝単棺）

Ⅰ７－棺蓋が不明であるもの（削平・攪乱などを受けている）

Ⅰ８－その他

Ⅱ類－棺身に甕を使用するもの

Ⅱ１－棺蓋に壺を使用するもの

Ⅱ２－棺蓋に甕を使用するもの

Ⅱ３－棺蓋に高杯を使用するもの

Ⅱ４－棺蓋に鉢を使用するもの（台付鉢も含む）

Ⅱ５－棺蓋に石を使用するもの（板石・河原石等）

Ⅱ６－棺蓋が無いもの（＝単棺）

Ⅱ７－棺蓋が不明であるもの（削平・攪乱などを受けている）

Ⅱ８－その他

Ⅲ類－土器蓋土坑墓

《埋葬状態》

ほぼ直立なものを正位、墓坑に対して横に置かれているものを横位、棺が天地逆に置かれるものを逆位、それ以外を斜位とする。

４）兵庫県神戸市雲井遺跡では突帯文土器壺を使用した弥生時代前期初頭まで下る可能性のある土器棺が検出されているが（丹治編 1991）、今回は遠賀川系土器のみを棺身に使用した土器棺墓を扱ったため含めていない。ただし、奈良県坪井遺跡ＳＫ－14では、弥生時代前期末と考えられる「縄文晩期系土器」を使用した土器棺墓が発見されている。報告によれば、突帯文土器の系譜を引くものが、弥生時代前期末段階まで残存したと解釈している（松本 1997）。こちらは、弥生時代前期末という時期を考慮して集成に含めた。

【引用・参考文献】

李 弘鍾 1997『寛倉里周溝墓』 高麗大学校埋蔵文化財研究所・㈱大宇

兪 偉超 1993「方形周溝墓与秦文化的関係」『中国歴史博物館館刊』21

兪 偉超 1996「方形周溝墓」『季刊考古学』 雄山閣

石黒立人 1987「伊勢湾周辺地方における方形周溝墓出現期の様相」『マージナル』7 愛知考古学談話会

石田英一郎 1969『日本文化論』 筑摩書房

太田好信 1998『トランスポジションの思想』 世界思想社

小熊英二 1995『単一民族神話の起源』 新曜社

小熊英二 1998『日本人の境界』 新曜社

姜 仁求（金井塚良一訳） 1995「周溝土壙墓に関するいくつかの問題」『土曜考古』19 土曜考古学会

岸本一宏 1987「畿内弥生社会構造に関する一考察」『文化史論叢』上 創元社

岸本一宏 1988「近畿地方の弥生時代墳丘墓について」『網干善教先生華甲記念 考古学論集』 網干善教先生華甲記念会

岸本道昭 1998「播磨の周溝墓-円形優位の地域色-」『小神辻の堂遺跡』 龍野市教育委員会

小林行雄 1951『日本考古学概説』 東京創元社

坂本嘉弘 1994「埋甕から甕棺へ」『古文化談叢』32 古文化研究会

澤田大多郎 1980「方形周溝墓の展開」『東アジア世界における日本古代史講座』 学生社

鈴木敏弘 1975「畿内地方における方形周溝墓の展開」『原始古代社会研究』2 校倉書房

角南聡一郎・山内基樹 1998「兵庫県下の土器棺・土器棺墓」『播磨大中遺跡発掘調査報告書』 播磨町教育委員会・奈良大学文学部考古学研究室

角南聡一郎 1999「西日本の土器棺墓と埋葬遺体」『奈良大学大学院研究年報』4 奈良大学大学院

田中清美 1986「近畿弥生社会の墳墓」『早良王墓とその時代』 福岡市立歴史資料館

都出比呂志 1987「方形周溝墓について」『古墳発生前後の古代日本』 大和書房

中村 弘 1998「近畿地方における方形周溝墓の出現」『網干善教先生古稀記念 考古学論集』上 網干善教先生古稀記念会

橋口達也 1992「大形棺成立以前の甕棺の編年」『九州歴史資料館研究論集』17 九州歴史資料館

服部信博 1992「墓制」『山中遺跡』 (財)愛知県埋蔵文化財センター

藤沢真依 1987「近畿地方の方形周溝墓」『文化史論叢』上 創元社

本間元樹 1997「弥生時代前期の区画墓」『田井中遺跡（１～３次）・志紀遺跡（防１次）』 (財)大阪府文化財調査研究センター

松本洋明 1997「大和の方形周溝墓」『みずほ』21 大和弥生文化の会

丸山雄二 1994「塚町遺跡の方形周溝墓に関する一考察」『塚町遺跡Ⅵ・Ⅶ』 長浜市教育委員会

水野正好 1972「古墳発生の理論（1）」『考古学研究』18-4 考古学研究会

森井貞雄 1995「墓制の変化（二）」『弥生文化の成立』 角川書店

山岸良二 1981『方形周溝墓』 ニューサイエンス社

山岸良二 1994「稲作を伝えた人々の墓」『古代日本の稲作』 雄山閣

山田清朝 1995「第1節 周溝墓」『東武庫遺跡』 兵庫県教育委員会

【区画墓関係文献】

内田律雄 1996『門遺跡』 島根県教育委員会・島根県埋蔵文化財調査センター

佐藤正義 1991「原始時代の夜須地方」『夜須町史』 夜須町

佐藤竜馬ほか 1998「3 佐古川・窪田遺跡」『国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成9年度』 (財)香川県埋蔵文化財調査センター

瀬戸谷 皓編 1989『駄坂・舟隠遺跡群』 豊岡市教育委員会

副島邦弘 1993『一般国道10号線 椎田道路関係埋蔵文化財調査報告 第1集 辻垣ヲサマル遺跡』 福岡県教育委員会

第2阪和国道内遺跡調査会 1971『昭和46年度 第2阪和国道遺跡発掘調査報告書』4 第2阪和国道内遺跡調査会

田中光浩・林 和広 1982『七尾遺跡発掘調査報告書』 峰山町教育委員会

津島彰夫 1974『現地説明会要旨 第一回』 四ツ池遺跡調査会

寺沢 薫編 1986「多遺跡 第11次発掘調査報告書」『奈良県遺跡調査概報 1985年度（第2冊分）』 奈良県立橿原考古学研究所

萩原儀征 1988『大福遺跡サンサイベ地区発掘調査概報』 桜井市教育委員会

服部信博ほか 1992『山中遺跡』 (財)愛知県埋蔵文化財センター

坂 靖・名倉 聡 1996「磯城郡三宅町伴堂東遺跡」『奈良県遺跡調査概報 1995年度（第1冊分）』 奈良県立橿原考古学研究所

東奈良遺跡調査会 1977『東奈良遺跡第7回現地説明会資料（G-四-G・K地区）』

平井 勝編 1993『百間川沢田遺跡3』 建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会

広瀬雅信・亀島重則 1990『東奈良遺跡発掘調査概要・Ⅱ』 大阪府教育委員会

深澤芳樹ほか 1995「Ⅰ-1 右馬寮の調査」『1994年度 平城宮跡発掘調査部調査概報』 奈良国立文化財研究所

本間元樹・駒井正明ほか 1997『田井中遺跡（1～3次）・志紀遺跡（防1次）』 (財)大阪府文化財調査研究センター

丸山雄二 1994『塚町遺跡Ⅵ・Ⅶ』 長浜市教育委員会

森田克行・橋本久和 1977『安満遺跡発掘調査報告書』 高槻市教育委員会

中川和哉・田畑直彦ほか 1997『京都府遺跡調査報告書』 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

毎日新聞 1996.8.14「「張り石」の方形周溝墓を確認」

竹内英昭 1993「Ⅲ 松ノ木遺跡」『松ノ木遺跡・森山東遺跡・太田遺跡発掘調査報告』 三重県埋蔵文化財センター

宮崎哲治 1996『龍川五条遺跡』 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団

山田清朝編 1995『東武庫遺跡』 兵庫県教育委員会

【土器棺墓関係文献】

石神 怡 1972『国府遺跡発掘調査概要』Ⅱ 大阪府教育委員会

奥井哲秀 1982『耳原遺跡発掘調査概報』 茨木市教育委員会

小田桐 淳 1994「左京第297次調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報平成4年度』 (財)長岡京市埋蔵文化財センター

亀田 博編 1978『大福遺跡』 奈良県立橿原考古学研究所

國下多美樹ほか 1997『鶏冠井遺跡』 (財)向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会

神戸市教育委員会 1997『新方 現地説明会資料』

斎藤明彦・松本洋明 1995「坪井遺跡から出土した弥生前期の土器棺」『みずほ』15　大和弥生文化の会

多賀茂治編 1995『玉津田中遺跡』3　兵庫県教育委員会

丹治康明編 1991『雲井遺跡 第1次発掘調査報告書』　神戸市教育委員会

中村 弘編 1991『東武庫遺跡』　兵庫県教育委員会

林屋辰三郎編 1983『史料京都の歴史』2　平凡社

福永伸哉 1991「開田遺跡」『長岡京市史　資料編一』　長岡京市役所

松尾信裕ほか 1983『長原遺跡発掘調査報告』Ⅲ　(財)大阪市文化財協会

松本洋明 1997「奈良県橿原市・坪井遺跡から出土した縄文晩期系土器の類例」『古文化論叢』　伊達先生古稀記念論集刊行会

松本正信・加藤史郎 1978『袋尻浅谷』　揖保川町教育委員会

森 浩一・田中英夫 1953「堺市黄金山遺跡出土の弥生式土器」『古代学研究』33　古代学研究会

森下大輔・今 芳也 1997『河高・上ノ池遺跡』　加東郡教育委員会

山中 章 1987「10 長岡京跡左京第143次（7AN FTB-4地区）発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財発掘調査報告書』21　向日市教育委員会

山本輝雄 1995「縄文晩期の土器棺墓について」『長岡京市埋蔵埋蔵文化財センター年報平成5年度』　(財)長岡京市埋蔵文化財センター

渡辺 昇ほか 1989『半田山』　兵庫県教育委員会

【補記】

成稿後、いくつかの文献の漏れと、新出資料があるのに気付いたので、ここで補っておきたい。まず新出資料についてであるが、岐阜県大垣市荒尾南遺跡で弥生時代前期の方形周溝墓1基が発見された。弥生時代終末の方形周溝墓4基に隣接して立地する5号方形周溝墓(ＳＺ５)は、周溝最下層から条痕文土器壺1点と叩石1点が出土した（千藤 1998)。検出されたのは、方形周溝墓の一辺のみである。

この方形周溝墓がどのようなルートで大垣市まで波及したのかという問題について考えてみると、一つには尾張地方との関係、つまり山中遺跡や朝日遺跡の方形周溝墓を構築した集団との接触が考えられる。もう一つは、近江湖北との関係、つまり塚町遺跡の方形周溝墓を構築した集団との接触によるものが考えられる。山中遺跡・朝日遺跡の周溝墓の平面形態が、四隅の切れる形であるのに対して、塚町遺跡のは全周するタイプである。荒尾南遺跡では、周溝墓の一部しか検出されていないため、平面形態は不明である。しかし、今後美濃地方から、群を構成する初期周溝墓が発見される可能性は高く、注目されよう。

また、韓国寛倉里遺跡について、日本で紹介・解釈されている文献が、いくつか存在することに気付いた。しかしながら、これはいずれも本報告がなされる以前で記されたものであり、日本の周溝墓との関係については、はっきりと明言されていない。

【補記・文献】

大塚初重・石野博信ほか 1998『シンポジウム 弥生時代の考古学』　学生社

千藤克彦 1998『荒尾南遺跡』　岐阜県・(財)岐阜県文化財保護センター

山岸良二 1996「韓半島での本格的な方形周溝墓群の発見」『東邦考古』20　東邦考古学研究会

第２節　方形周溝墓の埋没過程

１．はじめに

本稿では、方形周溝墓が墓・儀礼の場としての機能を終え、周溝が埋没していく過程を、周溝の堆積層と出土遺物を手掛かりに考察を試みたい。

方形周溝墓周溝の埋没過程については、福田 聖の研究がある。福田は関東地方の弥生時代終末～古墳時代初頭の周溝の、底と上層から出土した土器について器種組成と出土状況について検討をおこなった。この結果から方形周溝墓が埋没する過程で、火を用いた儀礼がおこなわれ、その痕跡として溝中土坑が残存する場合があることを想定した（福田 1991）。また大庭重信は、近畿地方の方形周溝墓溝内から出土する大量土器廃棄に注目し分析を試みた。この結果、土器群は総数50個体前後かそれ以上である点、周溝がある程度埋没した後に投棄されている点、口縁部などを意識的に打ち欠いたり胴部を穿孔したりするものが含まれない点を明らかにした。土器群の性格として、福田の説を支持し儀礼行為に伴うもので、墓制に表現された新たな集団的結合関係の強化や安定を目的としたものと考えた（大庭 1995）。

このように、方形周溝墓周溝の埋没過程については、それが「墓」として認識されている時期については儀礼行為がおこなわれたと解釈されている。しかし、「墓」である記憶が時間の経過と共に忘却された時期についてはどのように方形周溝墓は認識されていたのかという疑問が生じる。しかし、この設問への回答は比較的安易に導き出せよう。時間の経過と共に、周溝は埋没し痕跡をほとんど留めない状態になる。これにより人々の記憶の中からは、そこが「墓」という忌みの場であるという認識が段々と薄らぎ、ついには完全に忘却されてしまう、といった想定であり事実もほぼそうであったろう。しかし、例外も稀にあるようだ。大阪府古川遺跡では、周溝がかなりの期間「単なる溝」として機能したと考えられる状態が観察された。このような状態まで残存した周溝については、これまで注目されることはなかった。そこで、古川遺跡を例に、周辺の類例をいくつかあげながら「墓」としての機能を終えた周溝の在り方を検討し、その後、どのように認識されていたかを若干考えてみたい。

２．方形周溝墓周溝の上層と下層

ここでは方形周溝墓周溝が埋没までに長時間を要した実例として、古川遺跡例といくつかの類例をあげ、それぞれの場合どのように報告者には、この現象が捉えられてきたかを概観する（図29）。

《古川遺跡》（本報告）

古川遺跡の方形周溝墓群のうち、方形周溝墓１・２・３からは古墳時代後期や奈良時代の遺物が出土した。このため当初はこれらを古墳と認識していたが、調査が進行するに従って、周溝の埋土は最上・上・下層の３層に分かれることが判明し、下層には須恵器を全く包含せず、弥生土器のみしか出土しないことがわかった。方形周溝墓１周溝の堆積土は３層に大別可である。最上層の土質は粘土で、奈良時代以降の遺物が出土した。上層の土質は粘土で、古墳時代後期の遺物が出土した。下層の土質はシルト～砂で、弥生時代前期末の遺物が出土した。方形周溝墓２・３周溝は堆積土は３層に大別可である。最上層の土質は粘土で、奈良時代以降の遺物が出土した。上層の土質は粘土で、古墳時代後期の遺物が出土した。下層の土質は砂混じり粘土～砂で、弥生時代中期初頭の遺物が出土した。出土遺物からすれば、いずれも上層と下層の時間差は約500年あることになる。

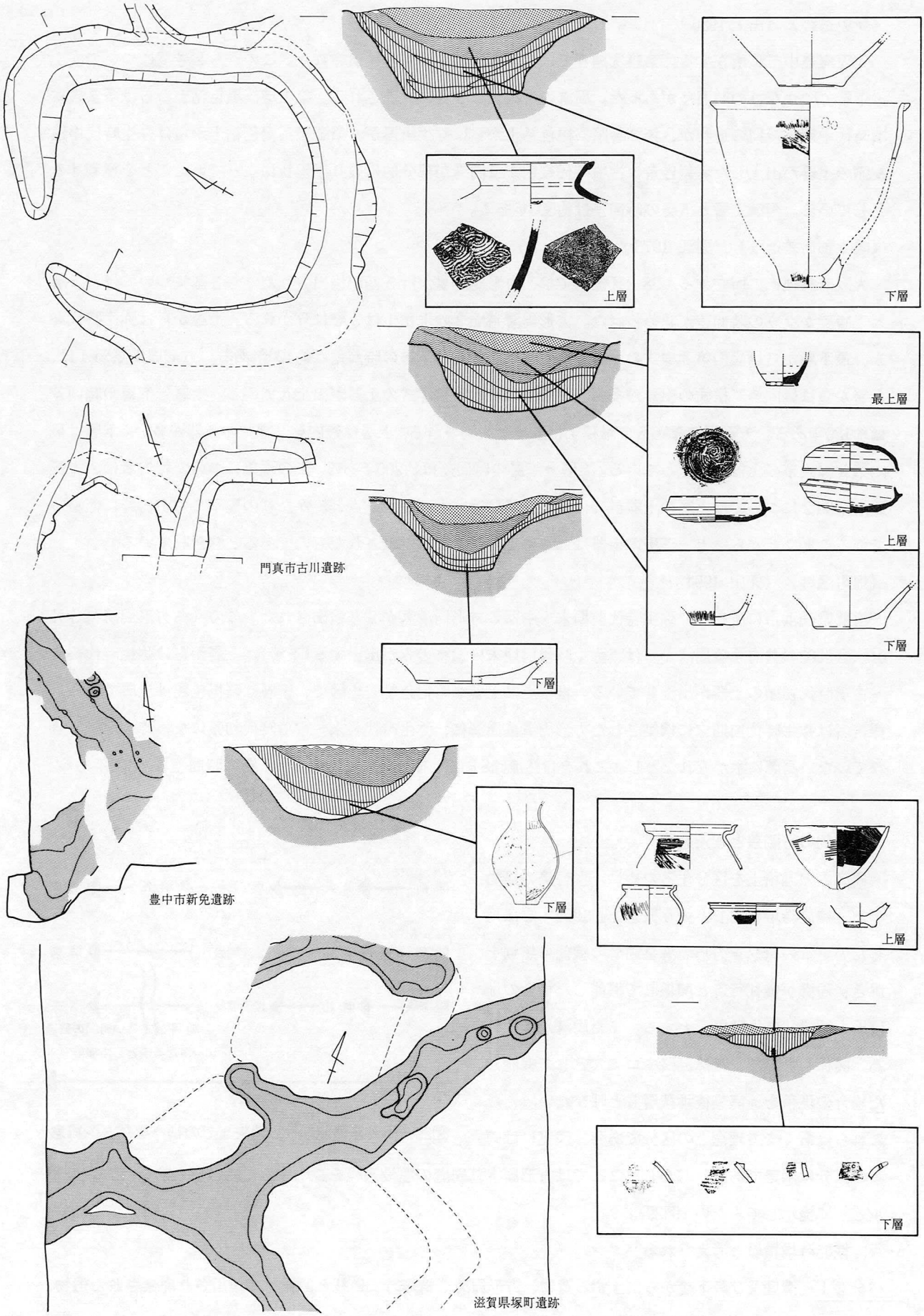


図 28　周溝埋没までに長期間機能した方形周溝墓の諸例　（各文献より作成）

《新免遺跡》（田上 1986）

大阪府豊中市に所在する。第14次調査では方形周溝墓が計４基検出された。このうち２号墓について、上・下層でのかなりの時間差があった。周溝の堆積土は３層に大別される。第１層淡黒色粘土からは多量の古墳時代中期～後期の遺物が、第２層暗茶褐色粘土からは弥生土器が、第３層茶褐色粘土からは弥生時代中期初頭の土器が出土した。報告者は古墳時代後期まで周溝が部分的に残り窪地状になっていたことを窺わせるとしている。周溝上層と下層の時間差は約500年ある。

《嶋上郡衙跡遺跡》（堀江 1973）

大阪府高槻市に所在する。38－Ｋ地区では、方形周溝墓が計５基が検出されたうち３基については、上層と下層でかなりの時間差が認められた。方形周溝墓№２の堆積土は３層に分かれる。上層からは弥生時代終末、最下層からは畿内第Ⅱ様式の土器が出土した。上層と下層の時間差は約400年ある。方形周溝墓№４は、上層からは畿内第Ⅴ様式の土器が多い。下層では畿内第Ⅲ様式の土器が出土している。上層と下層の時間差は約130年ある。方形周溝墓№５の堆積土は３層に大別される。上層は畿内第Ⅴ様式の土器が多い。下層は畿内第Ⅱ様式末の土器が出土している。上層と下層の時間差は約200年ある。この現象について報告者は、方形周溝墓№２については上層の土器群にほぼ完形品に近いものが多い点と、かなりの礫がこの土器群に伴なっていることなどから、上、下層の土器はともに方形周溝墓に供献されたものであると解釈している。

《塚町遺跡》（丸山 1994）

滋賀県長浜市に所在し、弥生時代前期末～中期の方形周溝墓が９基検出された。このうち方形周溝墓ＳＸ01～ＳＸ05の共有する周溝からは、弥生時代前期末の遺物のみが出土する（下層）。上層からは弥生時代終末～古墳時代初頭の土器が出土している。堆積土は上層が暗褐色粘質土層で、下層は暗褐色粗砂土層である。報告者は弥生時代前期末に構築された方形周溝墓周溝に、弥生時代終末～古墳時代初頭になって、埋没しきれていない周溝に水が流れたとし、これを自然流路ＳＲ02と捉えている。上層と下層の時間差は約400年ある。

３．遺物の時間差と埋没過程

周溝内の堆積土を区分するために、趙哲済の提唱する「機能時堆積層」という概念（趙 1995）を採用したい。この概念を方形周溝墓周溝の機能に焦点を置き、周溝が儀礼行為と関係して機能した場合の堆積層を「機能時堆積層」とする。また周溝が儀礼行為と関係しないで、自然流路やゴミ穴として機能した場合の堆積を「廃棄後堆積層」と呼びたい。ただこれらはあくまで理念上の区分であり、現実には両者の区分は困難である。しかし、ここでは方形周溝墓周溝の埋没過程を説明するための便宜的なパタンモデルとして提示してみたい（図29）。

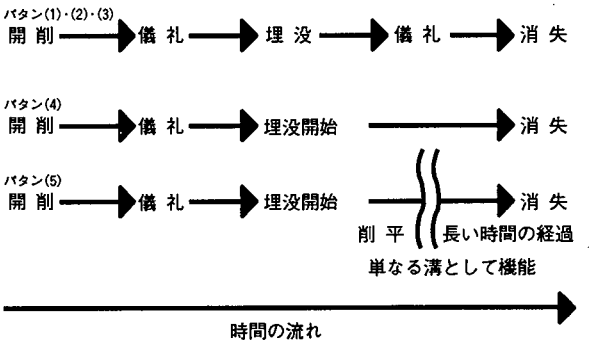


図29　周溝墓の開削から消失までの様々なパタン概念

Ａ．機能時堆積層と考えられるパタン

パタン１　溝底及び最下層から出土する遺物、方形周溝墓構築時に儀礼と関係して使用され廃棄された遺物、構築から堆積までの経過時間は非常に短い。

パタン２　溝上層から出土する遺物で儀礼行為と関係したと考えられる遺物、方形周溝墓埋没過程で儀礼行

為と関係し廃棄された遺物、方形周溝墓の構築から堆積までの経過時間は比較的短い。この場合、下層にはすでにパタン１で堆積した遺物があることになる。

パタン３　溝上層から出土する遺物で儀礼行為と関係したと考えられる遺物、方形周溝墓埋没過程で儀礼行為と関係し廃棄された遺物、方形周溝墓の構築から堆積まで時間をかけて埋没していき、継続した儀礼行為が行われる。もしくは何らかの形で墓としての場という意識が継続・再認識され再び儀礼行為が行われる。この場合、下層にはすでにパタン１で堆積した遺物があることになる。

Ｂ．廃棄後堆積層と考えられるパタン

パタン４　溝上層から出土する遺物で儀礼行為と関係しないと考えられる遺物、方形周溝墓は構築時の儀礼行為が行われた後、埋没過程では儀礼行為は行われず埋没が完了し消滅した場合での堆積。方形周溝墓の構築から堆積までの経過時間は比較的短い。この場合も、下層にはすでにパタン１で堆積した遺物があることになる。

パタン５　溝上層から出土する遺物で儀礼行為と関係しないと考えられる遺物、方形周溝墓は構築時の儀礼行為が行われた後、埋没過程では儀礼行為は行われず埋没が完了し消滅した場合での堆積。方形周溝墓の構築から堆積までの経過時間は非常に長い。この場合も、下層にはすでにパタン１で堆積した遺物があることになる。

方形周溝墓周溝の埋没過程に限定すれば、上記で設定したパタン１単独では埋没は完了せず、他のパタンと複合することによって埋没が完了する。

先にあげた諸例はこれらのモデルのうち、何れに相当するのであろうか。パタン２に相当するのは、ここでは例示していないが、先の大庭が分析をおこなった大阪府豊中市蛍池北遺跡がある。参考のためここであげておくと、方形周溝墓３と方形周溝墓６の周溝上層から、弥生時代中期中葉の土器群が出土した。これらは周溝内に墳丘側からの崩落土がある程度たまった後に堆積したものであると考えられる（服部・大庭編 1995）。方形周溝墓３は削平により主体部が失われており、方形周溝墓の構築から周溝への土器大量廃棄までの経過時間を遺物によって計ることができない。方形周溝墓６は方形周溝墓３と同様に後世の削平を受け墳丘は完全に失われている。このため方形周溝墓３同様、方形周溝墓の構築から周溝への土器大量廃棄までの経過時間を遺物によって計ることができない。しかし、出土土器はいずれも弥生時代中期中葉に収まるものと考えられる。このことからやや強引に類推すれば、方形周溝墓の構築から大量の土器群が廃棄されるまでの間隔は、二世代の範囲に収まるともいえる。この類推から大庭の考える方形周溝墓埋没過程での儀礼行為に伴う大量土器廃棄は、二世代の範囲の中で行われたことになろう。このケースを普遍化はできないものの、人々の記憶の中に明確にこの場所が墓であるという事実が刻まれている期間は、二世代前後であるという一定の目安を示していると捉えておきたい。

パタン４に相当する事例をあげると、畿内では現状で類例を知らないが、神奈川県秦野市砂田台遺跡４号方形周溝墓がある。この方形周溝墓周溝内からは、弥生時代中期後葉の大量の土器・石器が出土した。報告者はこれらの遺物について、周溝内に周溝墓構築後、間もない時期に廃棄されたと解釈し、埋没していく周溝がさながらゴミ捨て場のような状態であったことを想定している（宍戸ほか 1989）。砂田台遺跡の場合は、周溝墓構築から非常に短い期間でそこが墓であることが忘却され、周溝が単なる溝、ゴミ穴としてしか認識されていないことが窺える。これ程短期間での忘却はむしろ特異な例と考えた方がよいのだろうが、パタン２での一応の目安を参考にすれば、二世代を経過した以後は、序々に墓としての認識が薄らぎ忘却されてい

くのではないかと考えておきたい。とすれば、嶋上郡衙跡遺跡の諸例が問題となってくる。方形周溝墓№4では上層と下層での時間差は130年前後である。上層出土土器の出土状況の詳細が不明であるため、判断不可能であるが、もし上層出土遺物が儀礼行為と無関係であれば、墓であることの忘却時間を勘案する好例となろう。しかし、隣接する方形周溝墓№2の周溝上層と下層の時間差が約400年もあるにもかかわらず、上層出土土器群は完形品のものが多いことなどから、儀礼行為に伴う廃棄である可能性が高い。そうすると、この空間が墓として長時間認識されていた可能性が高くなる。これはパタン3に相当する。この場合、当初の認識である「ここは墓である」という記憶が変容し、別の意味として機能している可能性も考慮しなければならないであろう。今後類例を検索し再検討を要する問題である。

パタン5と考えられる例が、今回特に注目した現象である。古川遺跡例、新免遺跡例、塚町遺跡例がこれに相当すると考えられる。出土遺物からすれば、いずれも周溝の完全な埋没まで約400～500年の時間を要したことになる。この場合、そこがかつて墓であったことが、完全に忘却され周溝は単なる溝として認識されていたということになろう。

これらの方形周溝墓の立地は、大阪府下では淀川流域の低地遺跡に多いことが看取される。これに対して低地でも中河内地域では事例があまりみられない。これは堆積の速度と関係していると思われる。堆積土の量が多く、堆積速度も速い中河内地域では、方形周溝墓の埋没は急速であったことが考えられる。このため、周溝が後世まで長時間、存続することはほとんどなかったと思われる。これに対して、摂津地域や北河内地域では堆積速度はそれほど急速ではなかったために、方形周溝墓の周溝が埋没しきらない状態がよくみられた可能性が高いといえよう。

4．小結

古川遺跡調査時の疑問を解決するため、方形周溝墓周溝が長時間を要して埋没したと考えられる類例をあげ、墓としての機能を終えた方形周溝墓の周溝が埋没していく過程で、後世の人々にどのように認識されていたのか、墓であるという記憶はどれくらいの時間の経過で完全に忘却されるのかをいくつかのモデルを提示し考えてみた。この結果、古川遺跡の場合は、遺物の出土状況や経過時間を勘案すれば、墓という場であるという事実は完全に忘却された段階でも、周溝は単なる溝として長時間存在していたと考えられる。逆に、嶋上衙跡遺跡例のように、墓としての認識が相当後世まで継続している例も認められた。これらの問題についてはいずれ再検討を試みたい。（文章中敬称略）

（角南）

【引用・参考文献】

大庭重信 1995「弥生時代中期の方形周溝墓にみられる大量土器廃棄について」『蛍池北遺跡(宮の前遺跡)』蛍池北遺跡調査団・豊中市教育委員会

宍戸信悟ほか 1989『砂田台遺跡』Ⅰ　神奈川県立埋蔵文化財センター

田上雅則 1986「新免遺跡第13・14次発掘調査概要報告」『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要1985年度』　豊中市教育委員会

趙 哲済 1995「第5節 本書で用いる層位学的・堆積学的視点からの用語」『長原・瓜破遺跡発掘調査報告書』Ⅷ　(財)大阪市文化財協会

服部聡志・大庭重信編 1995『蛍池北遺跡（宮の前遺跡）』　蛍池北遺跡調査団・豊中市教育委員会

福田 聖 1991「方形周溝墓と儀礼」『埼玉考古学論集』　埼玉考古学会

堀江門也 1973『嶋上郡衙跡発掘調査概要・Ⅲ』　大阪府教育委員会

丸山雄二 1994『塚町遺跡Ⅵ・Ⅶ』　長浜市教育委員会

第３節　古川遺跡採集資料の紹介

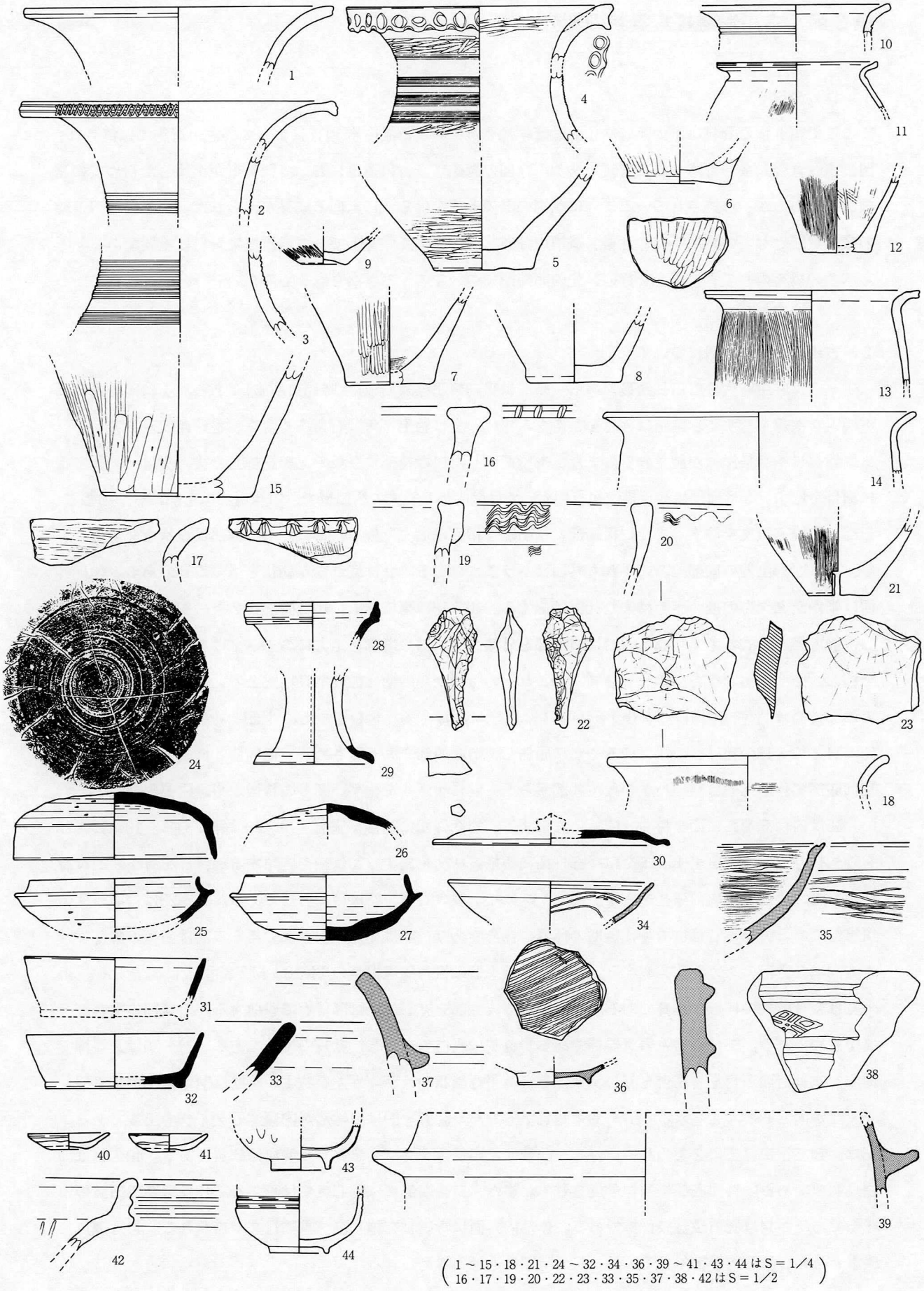
１．はじめに

ここで紹介する資料は、大阪府文化財愛護推進委員であった故白岩 勉氏によって、古川遺跡で採集され、門真市教育委員会へ寄贈された資料である。今回の調査は、古川遺跡において門真市が実施した初めての発掘調査であるが、前述されているように試掘の際の予想をはるかに上回る成果が得られた。今後、古川遺跡の複合遺跡としての時期幅や、性格、遺構の分布状況を考えていく上で、白岩氏採集資料は重要であると考え、この場を借りて資料紹介を行い、先の諸問題について若干の考察を試みてみたい。

２．古川遺跡採集資料について

１～３は弥生時代の広口長頸壺である。時期は畿内第Ⅰ様式期(弥生時代前期末)である。１は口縁端部に不明瞭な沈線を有する。胎土は砂粒を多く含み粗い。２は胎土に角閃石を多く含み、生駒西麓産と考えられる。頸部にヘラ描沈線が施される。また、やや肥厚した口縁端部に２条の沈線を施した後、更に「×」字状に刻目を施す。３は頸部にヘラ描沈線を施す。４は畿内第Ⅱ様式の広口壺で、口縁端部は下部にやや拡張し、頸部に櫛描直線文を施す。また口縁端部には明瞭な指頭圧痕文を施し、このため口縁部は波状を呈する。５・６は壺形土器の底部で、いずれも外面はヘラミガキする。９は底部窪み底状を呈する鉢である。体部外面は細かなタタキの後、ナデにより仕上げをする。10～18は甕である。10は頸部に２条のヘラ描沈線文を有し、畿内第Ⅰ様式と考えられる。11は口縁部を外傾させ、口縁端部を上方につまみ上げる。体部外面はハケを施し、頸部は強い横方向のナデを施す。これらの特徴から時期は畿内第Ⅳ様式と考えられる。12は甕底部で体部外面はハケ、内面はハケ後ナデを施す。胎土に雲母を多く含む。また、外面に煤の付着痕が見られる。13・14・17・18の甕は、口縁はゆるやかに屈曲し、口縁端部を丸くおさめる。畿内第Ⅱ様式と考えられる。15は底部で体部外面は粗いハケの後、底部から上方向にケズリを施す。調整の特徴から畿内第Ⅳ様式としたい。16は口縁部端面に面を持ち、内外に拡張する。端部外面に刻目を施す。19・20は鉢である。19は口縁部を外へ折り返し段状を呈す。また口縁部外面に櫛描波状文を施す。20はやや内傾する口縁部を有す。21は有孔土器で、底部に焼成前穿孔を有す。22はサヌカイト製の石錐、23は剥片石器である。24～29は古墳時代の須恵器である。24～27は古墳時代後期の杯蓋、杯身であり、28は提瓶の口縁部である。29は高杯の脚部で、４方向に長方形のスカシ孔を有する。これらの須恵器は概ね陶邑編年のTK10～MT85型式に相当する。30～32は奈良時代の杯蓋、杯身である。30は平坦な天井部を有し、口縁部付近で屈曲する。口縁部に重ね焼き痕が認められる。33は東播系須恵器椀である。色調は灰白色を呈し，軟質の焼成である。34～36は瓦器椀である。36は断面三角形の高台を有し、見込みには平行線状のヘラミガキを施す。時期は34が橋本編年Ⅲ期、35・36が同Ⅱ期と考えられる。37～39は瓦質土器である。37・39は口縁部が内傾するタイプの土釜である。38は深鉢で、口縁部に２条の凸帯を付し、凸帯間に四菱スタンプ文を施す。焼成は軟質である。40・41は柿釉灯明皿である。外面底部に糸切り痕を残す。また、口縁端部には灯芯痕が付着する。42は信楽焼摺鉢の口縁部である。44は肥前磁器染付椀である。体部内外面に青磁釉を施し、一重網目文が描かれる。44は瀬戸・美濃と考えられる陶器椀である。40～44の時期は近世と考えられる。

採集資料の時期は、弥生時代前期末～近世まで存在している。これらを時代別に詳しくみると、遺物は弥生時代においては弥生前期末～中期後半にかけて存在し、弥生時代中期中葉の遺物と特定できるものはない



（1～15・18・21・24～32・34・36・39～41・43・44はS＝1／4
16・17・19・20・22・23・33・35・37・38・42はS＝1／2）

図30　古川遺跡出土遺物（1～44）

が、弥生時代中期後葉・後期の遺物は少量だが採集されている。古墳時代の遺物は、陶邑編年のＴＫ10～ＭＴ85型式のもののみがみられる。奈良時代の遺物には、須恵器杯がある。中世の遺物は、概ね12～13世紀のものと考えられる。中世以降は近世末まで連綿と遺物がみられる。

3．若干の考察

次に上記で紹介した資料から、今回調査された古川遺跡と関連させ、若干の問題点を指摘したい。今回の調査では、方形周溝墓の周溝内から、弥生時代前期末と古墳時代後期の遺物が、上下２層から連続して堆積している状態が確認された。これは堆積した遺物間に約600年近くの長い空白期間がみられるということになる。そこでこの空白期間の年代に相当する、弥生時代中・後期～古墳時代前・中期の遺物が全く存在しない原因について、採集資料の時期を参考にしながら推測してみたい。紹介した資料の上限は、今回の調査と同様に、弥生時代前期末である。そして、遺物は弥生時代中期頃まで継続して認められるが、後期になると量的に減少し古墳時代前・中期の資料は皆無である。そして再び資料がみられるのは古墳時代後期の段階である。このように採集資料も今回の調査結果と同様に、古墳時代前・中期において時間的な空白が認められることがわかる。つまり、古川遺跡では古墳時代前・中期には人間が居住しておらず、また周辺にも居住域は存在していなかったことが推定できよう。また、方形周溝墓の周溝が古墳時代後期まで完全に埋没しないことは、周溝墓構築以降、再掘削されていない事実を意味していると考えてよいだろう。このことは前述の仮説、つまり古墳時代前・中期に古川遺跡一帯は無人空間であった可能性を補強することになろう。

4．まとめ

以上、白岩氏採集資料を出発点として、弥生時代～古墳時代の古川遺跡一帯の様相について若干の検討を試みた。この結果、古墳時代前・中期に古川遺跡一帯が、無人空間であった可能性を提示した。ところで、白岩氏採集資料中には、古墳時代以降も現代に至るまで連綿として各時代の遺物が確認されており、古川遺跡が大規模な複合遺跡であることを表示している。今後、資料の増加によって当地の様相を、より具体的かつ明確にしていく必要性を感じる。

（松田）

【引用・参考文献】

川口宏海・前川 要ほか 1995『有岡城跡・伊丹郷町』Ⅳ　伊丹市教育委員会・大手前女子大学史学研究所

佐藤亜聖 1996「大和における瓦質土器の展開と画期」『中近世土器の基礎研究』Ⅺ　日本中世土器研究会

田辺昭三 1981『須恵器大成』　角川書店

寺澤 薫・森岡秀人編 1989『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅰ』　木耳社

中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』　真陽社

八木久栄ほか 1992『難波宮址の研究』9　(財)大阪市文化財協会

第5章　結語

今回の調査では、はからずも10基もの方形周溝墓と墓域を区画する溝等を検出するに至った。方形周溝墓は、弥生時代前期末のものが3基、中期初頭のものが4基、時期を決定づける遺物は出土していないが、遺構の状況から前期末と判断できるものが2基、中期後葉のものが1基で、墓域を区画する溝も前期末～中期初頭までには掘られていたと考えられる。

次にこれらの特徴として、周溝を共有する群集した分布を示すことがあげられる。そして、墓域はさらに東・南・北に拡がり、広い範囲に群集しているものと予測せしめた。また築造には、1・4号方形周溝墓が同一方向に陸橋があるなど、方位をある程度揃えることが意識されていたようにうかがえる。

調査地の東と西で検出された墓域を区画する南北方向の溝は、前期末～中期初頭に築造された方形周溝墓群を囲むような形になっている可能性がある。

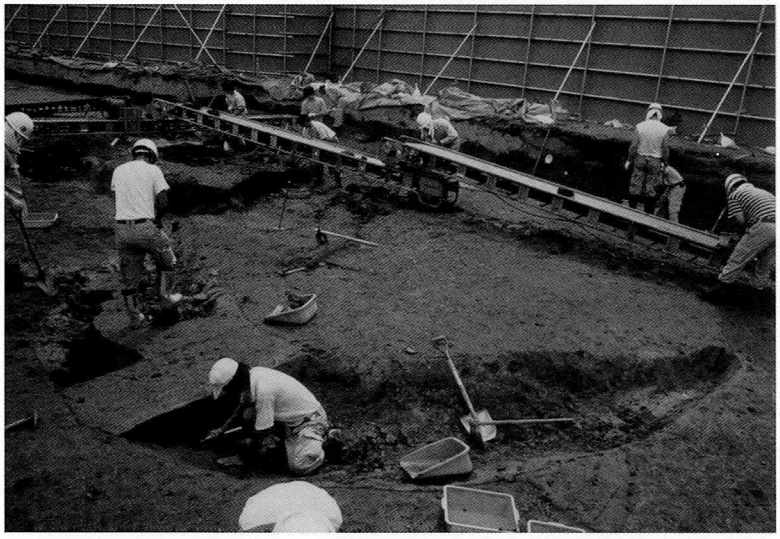
これまで古川遺跡では、弥生時代前期～後期の遺物が採集され集落跡とされてきたが、集落に関連する確実な遺構は確認されていなかった。今回、方形周溝墓群が確認されたことにより、集落の位置がほぼ確定され、住居域は南東に隣接する高い場所に営まれていたと推定されるに至った。

今回の調査で、当該地周辺に墓域が形成され、畿内第Ⅰ様式新段階～第Ⅱ様式にかけてと、第Ⅳ様式に墓域が継続したことがわかったが、第Ⅲ様式のものはなかった。この時期は墓域を移したのか、また第Ⅳ様式以降はどうなったのか、住居域の確認も含めて今後の課題となろう。

また今回の調査をおこなったところは、大庭・大窪湿地にかかるところで、水走沿岸州の水際とみられ、遺跡があると認識していない場所であった。水走沿岸州は数km繋がっていたが、幅はこのあたりでは2～300mと推定され、常に水害の危険性をはらんだ不安定な陸地で、生産性の高い土地とは考えにくい。しかしながら、このようなところに弥生時代のかなり早い時期に集落が形成されたばかりでなく、銅鐸を3個も有する集落の経済力は、単に農耕に頼らず、河内潟及び淀川を舞台に活動を展開していたからだろうか。

（宇治原）

図　版



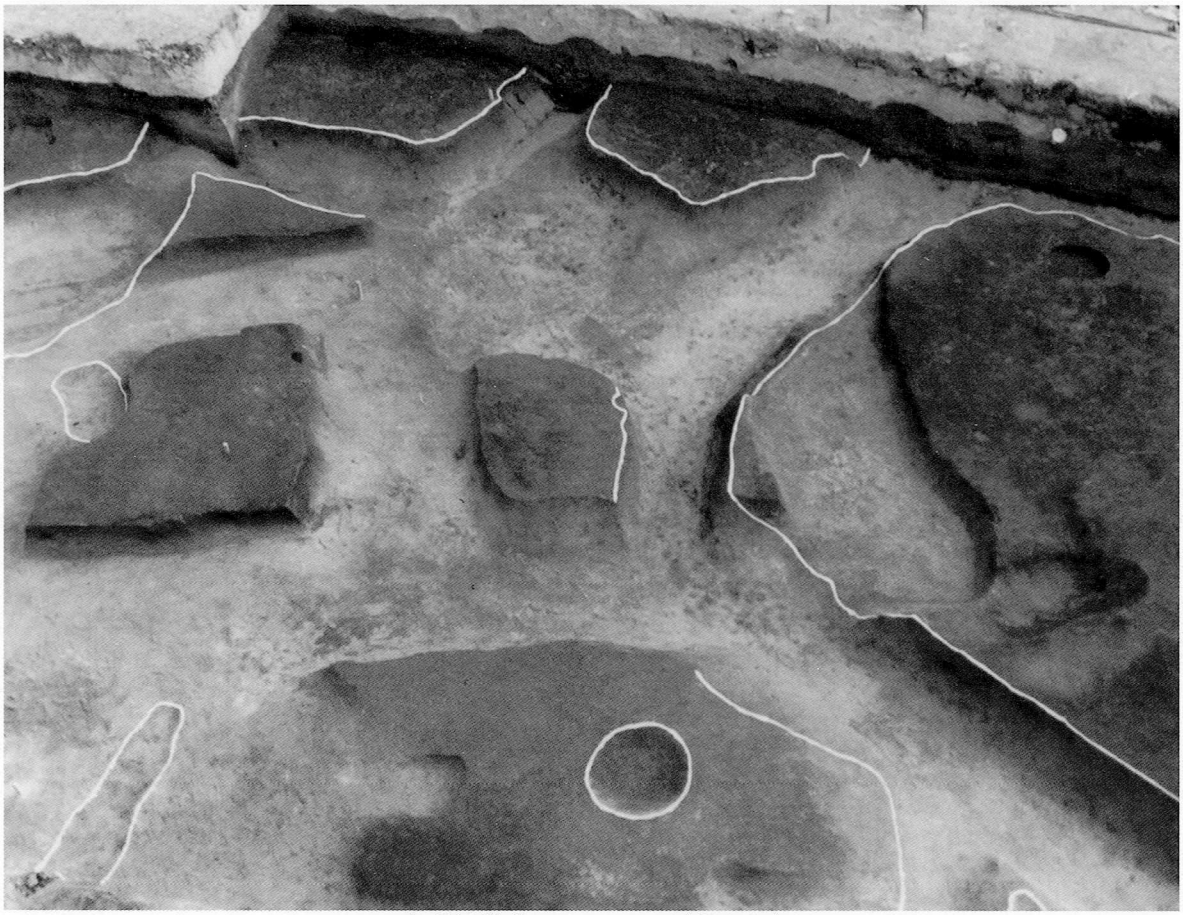
図版1　方形周溝墓検出状況（1）

方形周溝墓1　溝1（北から）

調査地全景（西から）

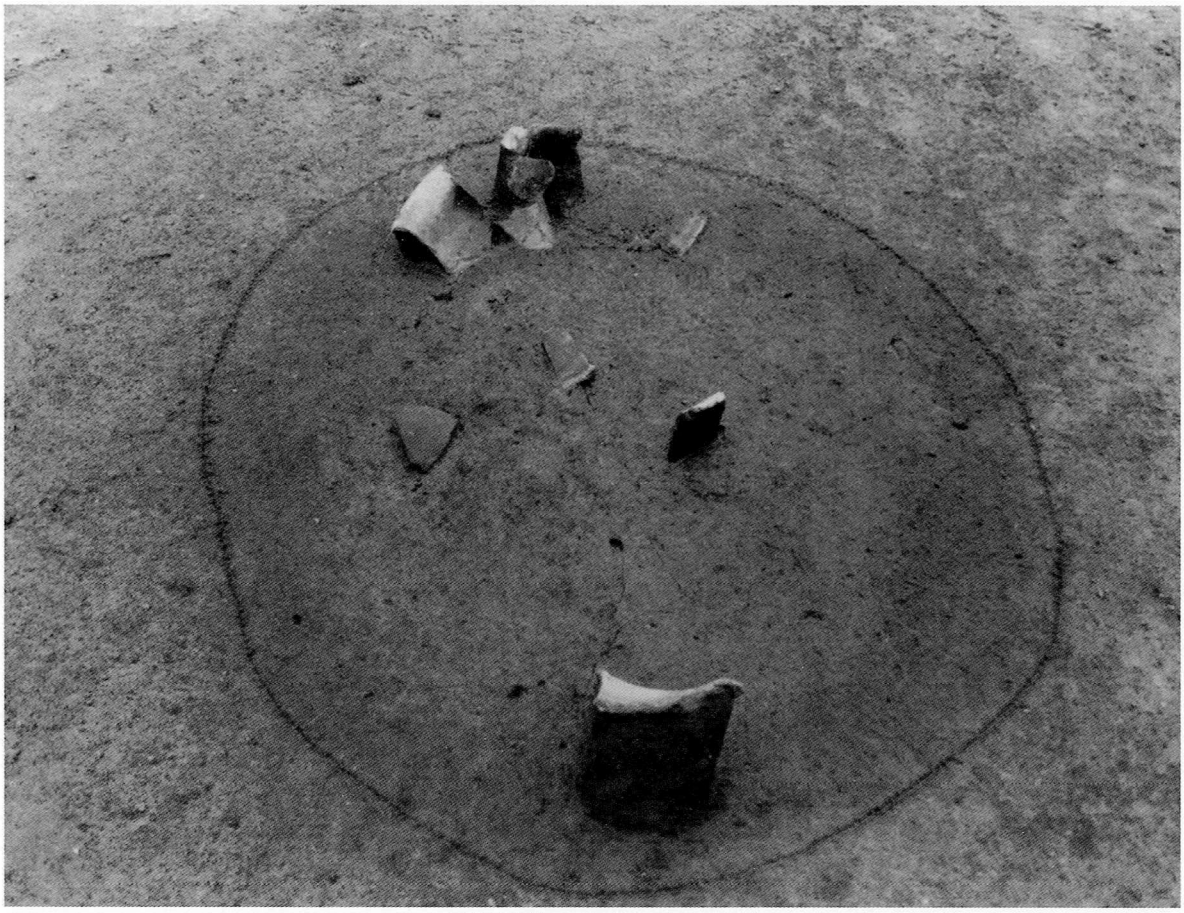
方形周溝墓１（北から）

方形周溝墓１・６（北東から）

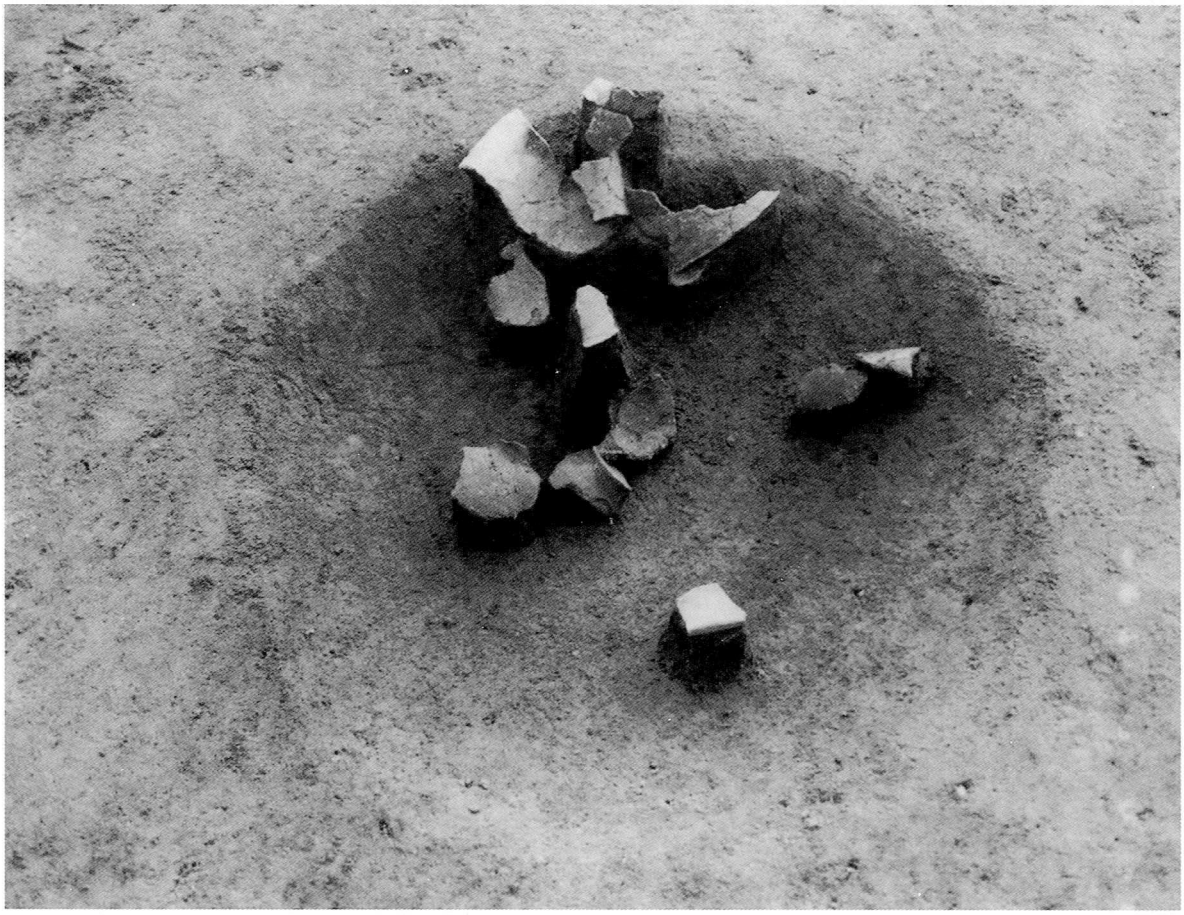


方形周溝墓1・2・3・6（北から）

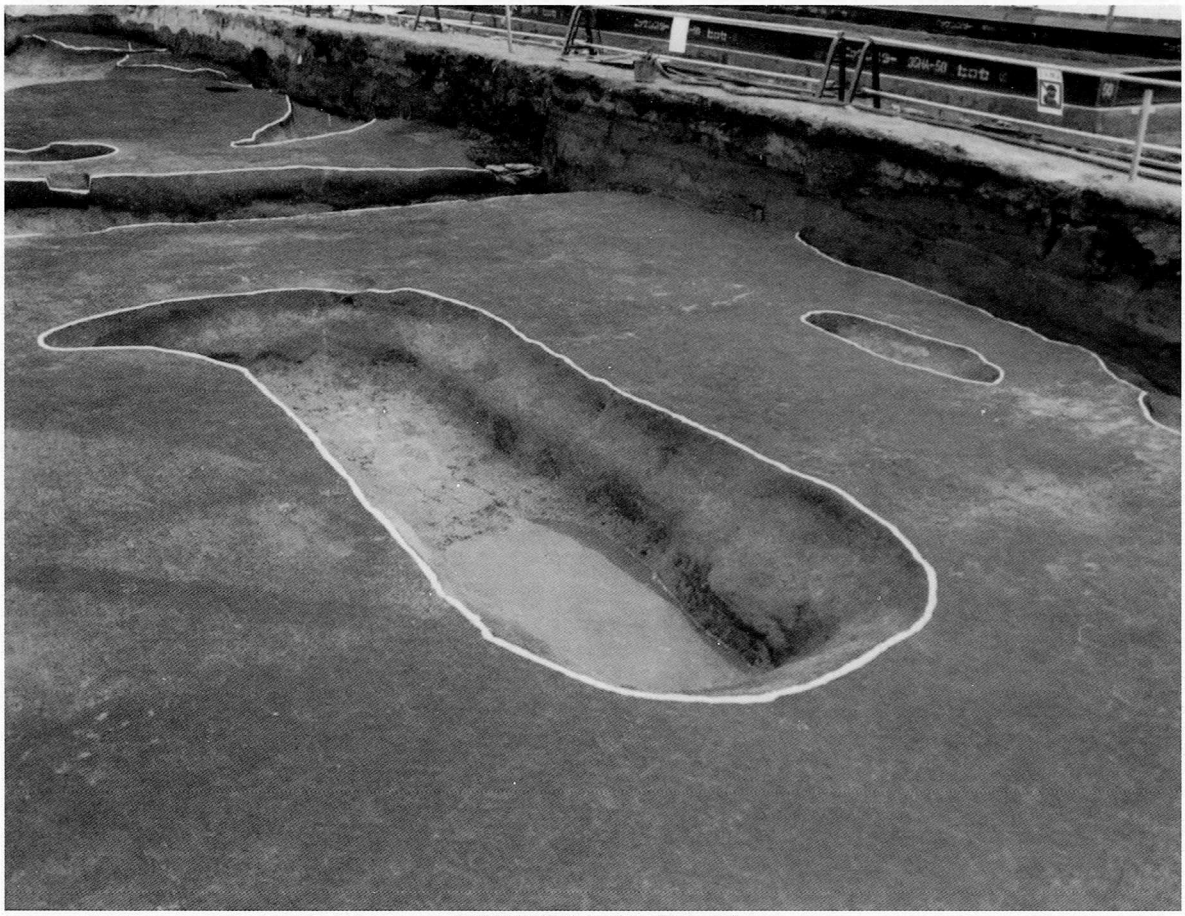
方形周溝墓4・5・7（北西から）



土器棺遺物出土状況（北から）



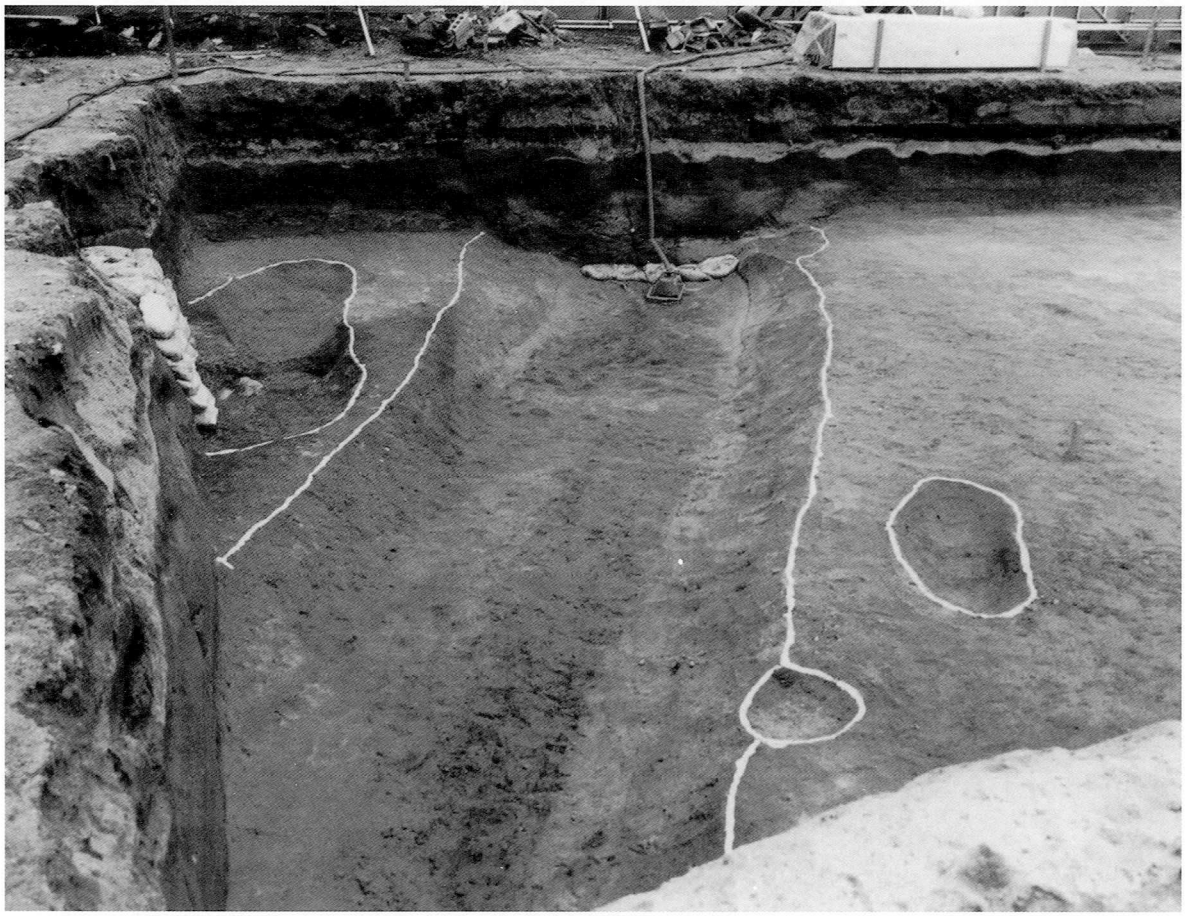
土器棺遺物出土状況　掘り下げ後（北から）



方形周溝墓 10（北西から）

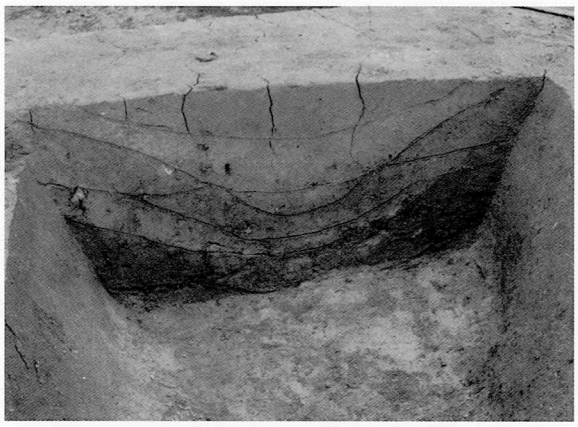
方形周溝墓 10 、溝 1（北東から）

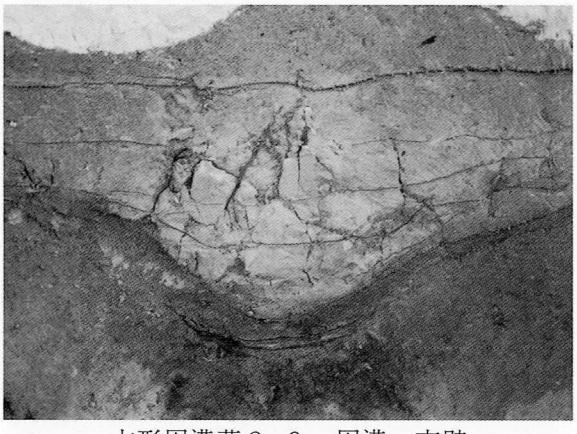
溝1（北から）



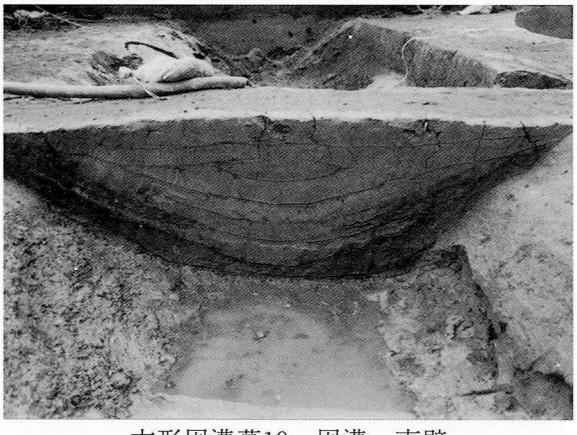
溝2（北から）

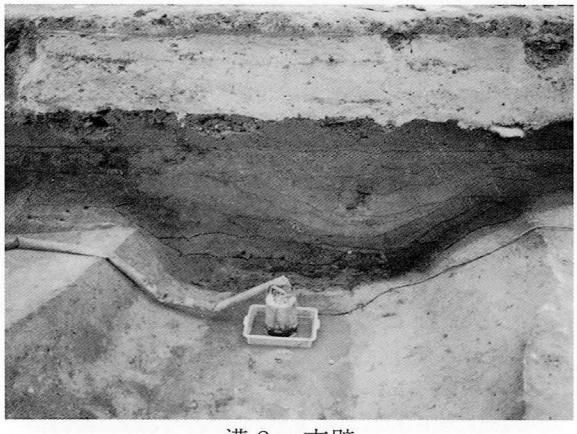
方形周溝墓1　周溝　東壁


方形周溝墓1　周溝　西壁

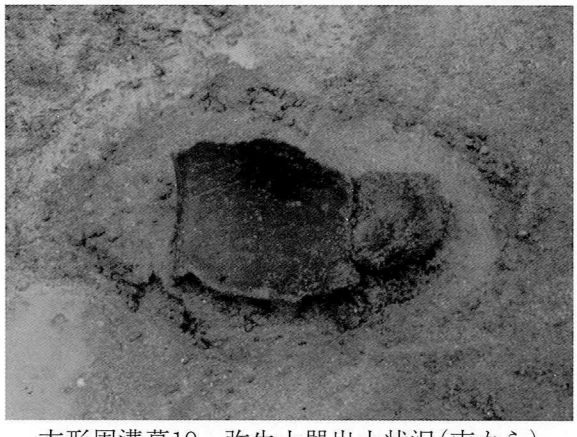

方形周溝墓2・3　周溝　南壁

溝1　北壁

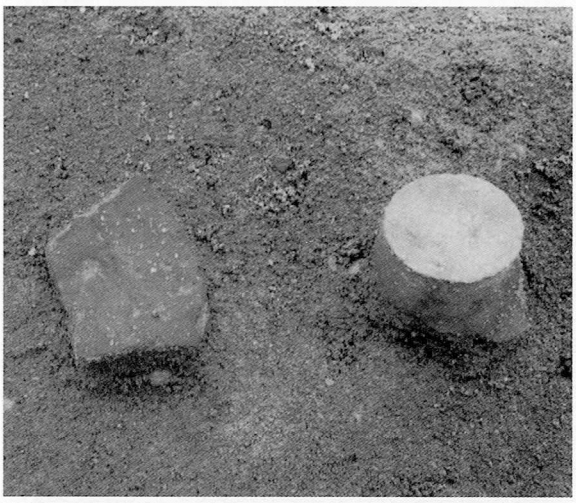

方形周溝墓10　周溝　東壁


溝2　南壁

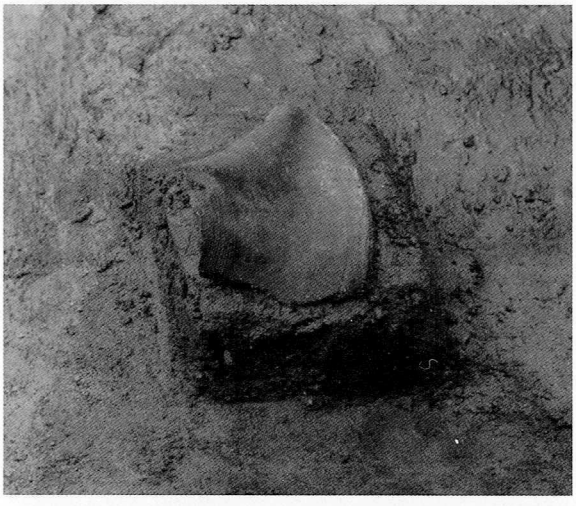
方形周溝墓1　弥生土器出土状況(南から)


方形周溝墓10　弥生土器出土状況(南から)

方形周溝墓８　北周溝　遺物出土状況(北から)



方形周溝墓８　南周溝　遺物出土状況(南から)

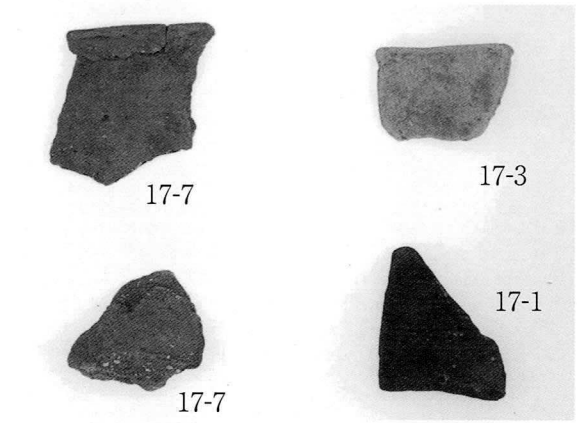


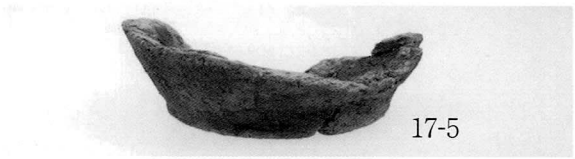
溝１　弥生土器出土状況(南から)

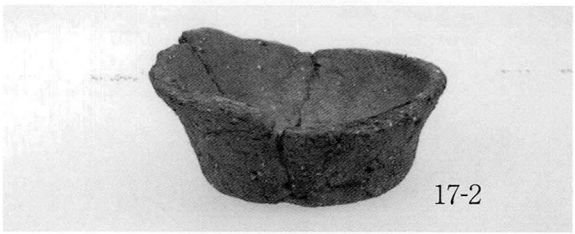
溝２　弥生土器出土状況(南から)

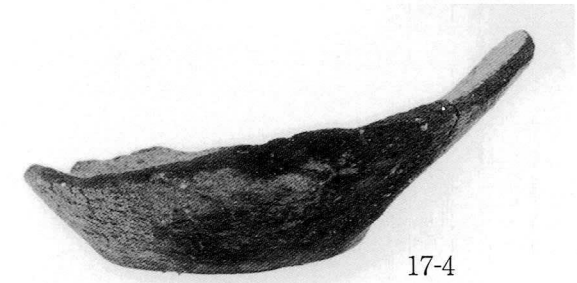
溝１　鋤出土状況(東から)

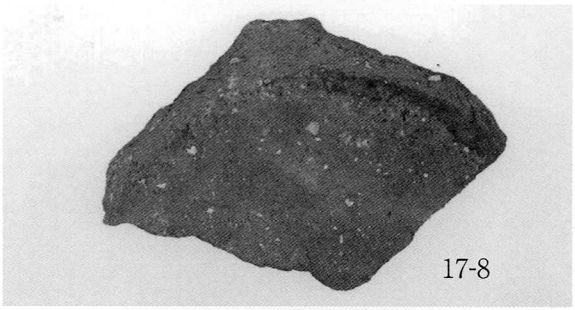
図版10　方形周溝墓出土遺物（1）

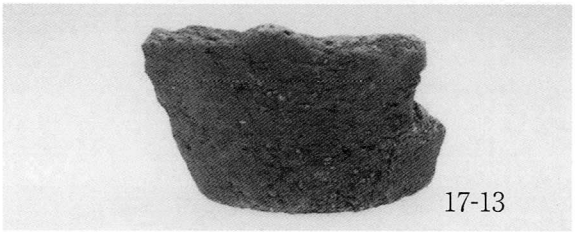


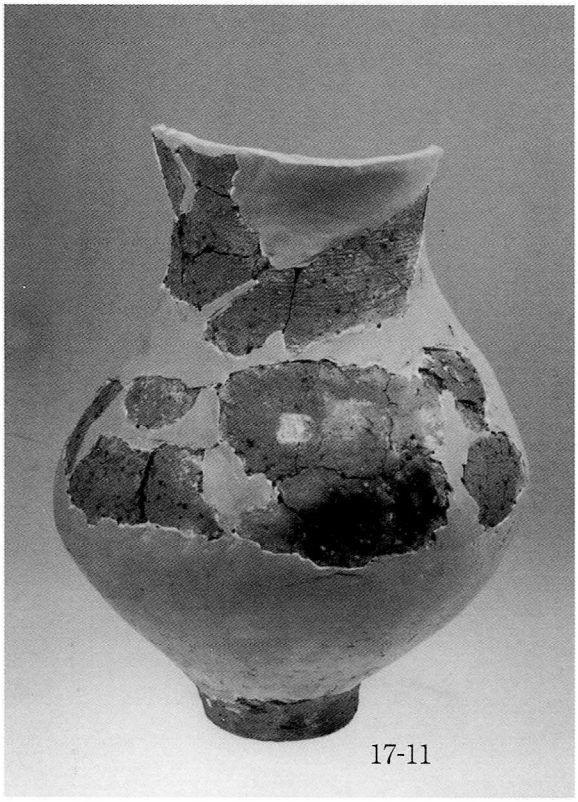


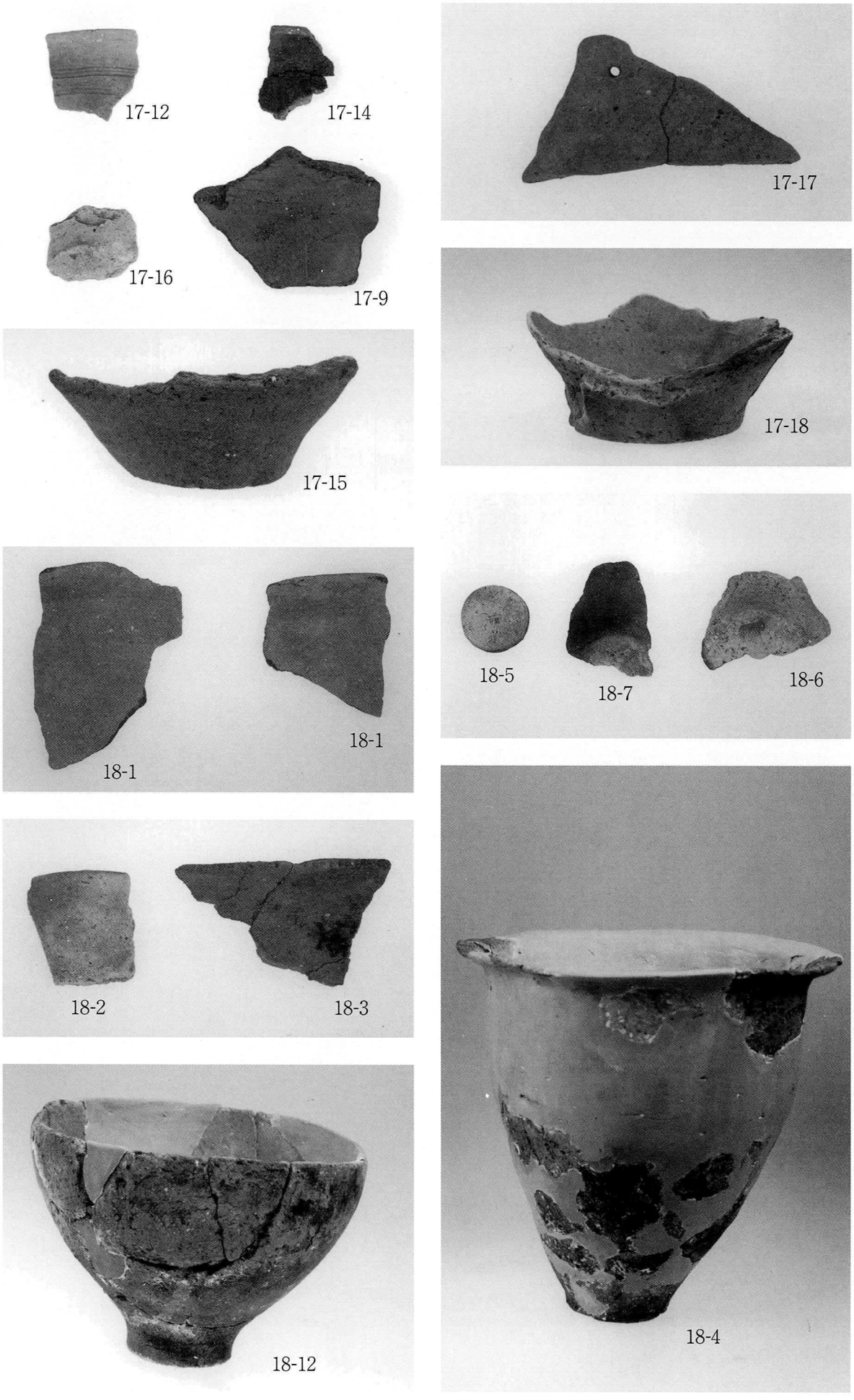


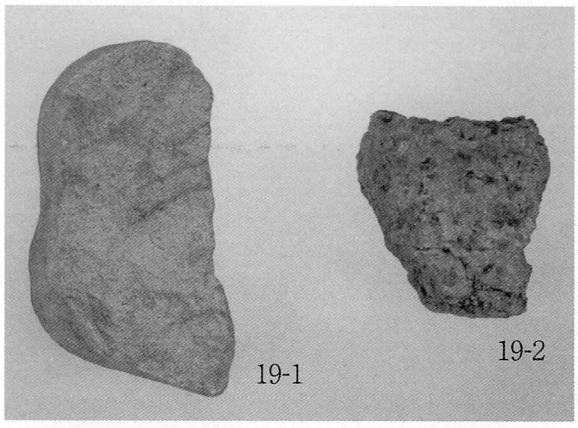


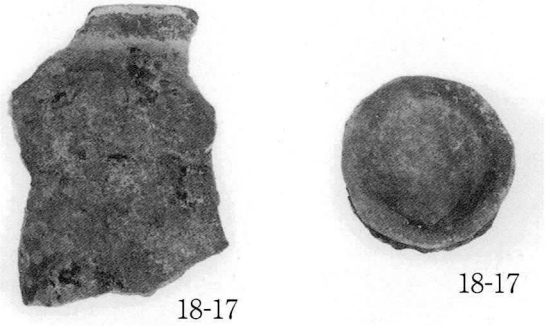


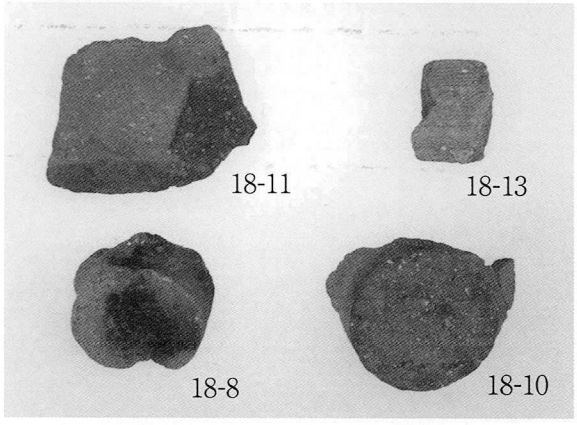


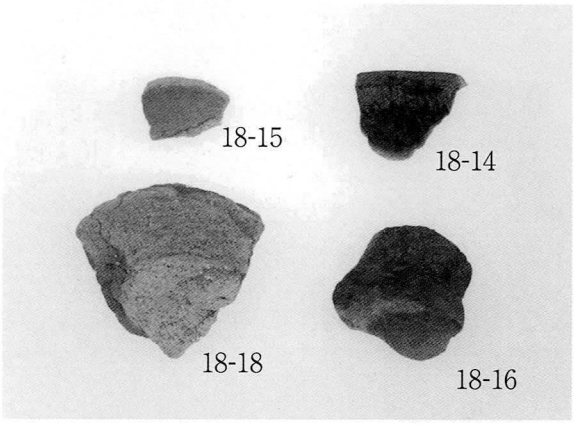


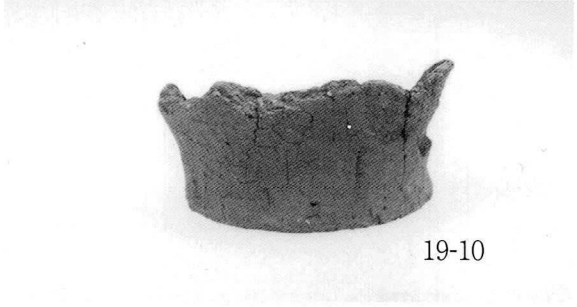

17-12
17-14
17-17
17-16
17-9
17-18
17-15
18-1
18-1
18-5
18-7
18-6
18-2
18-3
18-4
18-12

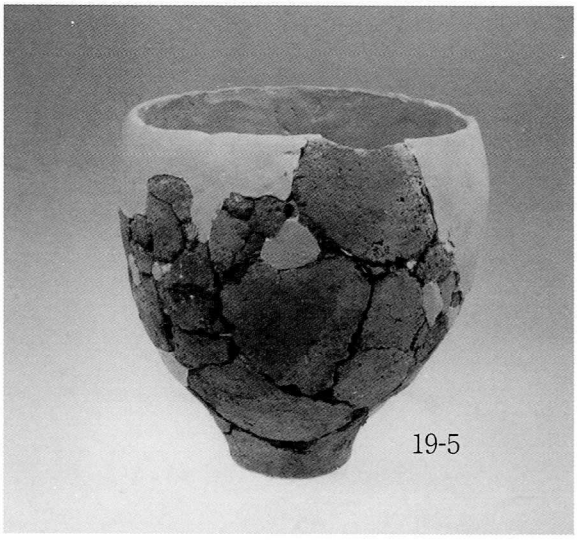

19-1
19-2


18-17
18-17

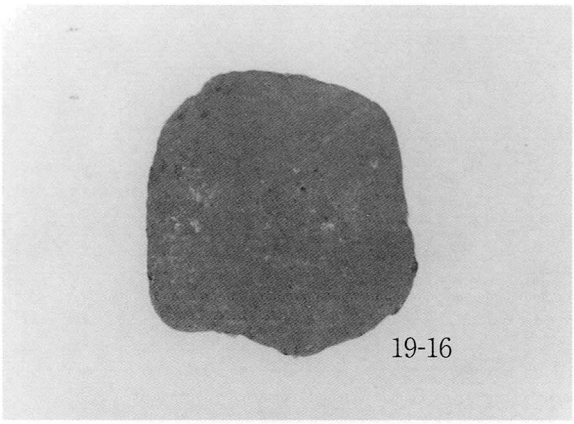

18-11
18-13
18-8
18-10

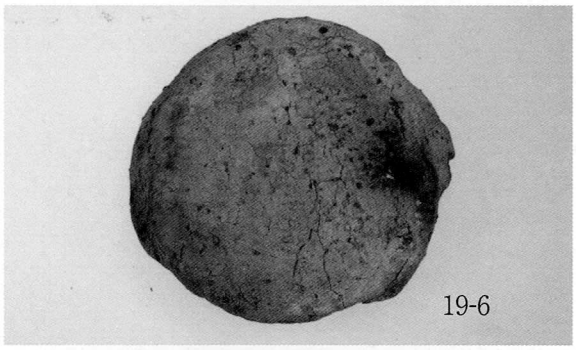

18-15
18-14
18-18
18-16

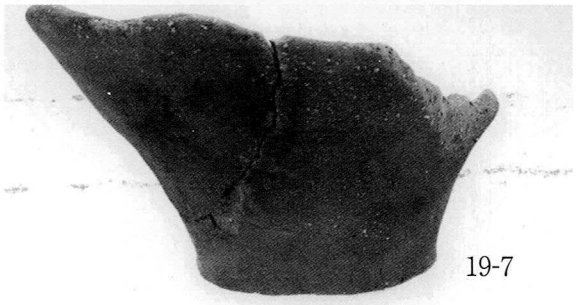

19-10

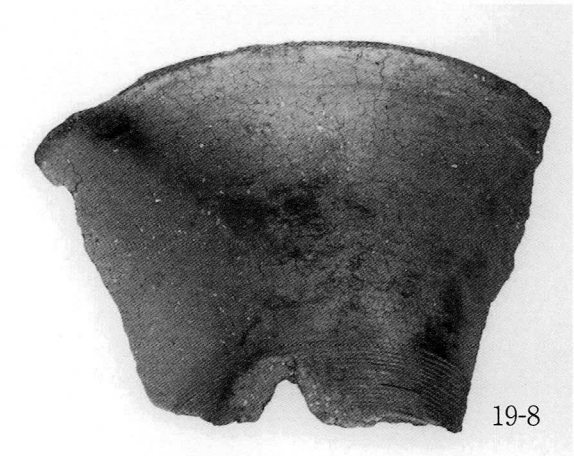

19-5

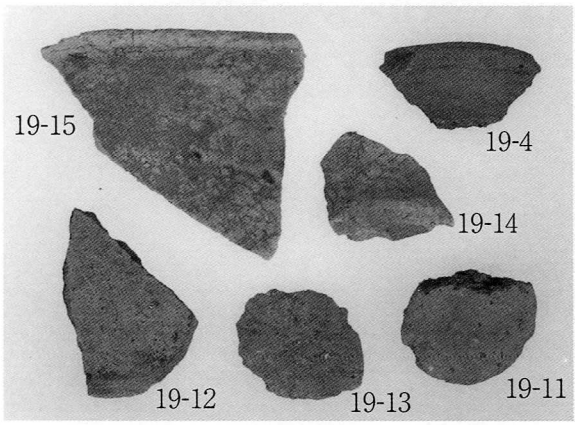
19-3

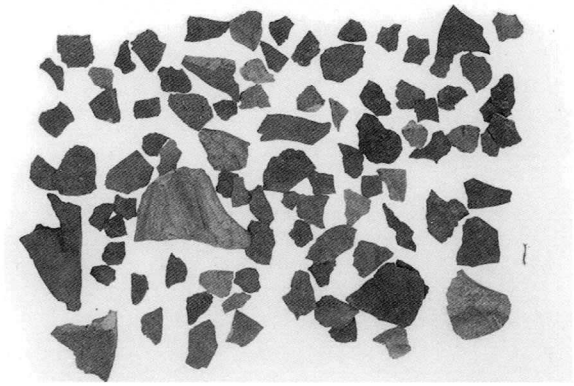




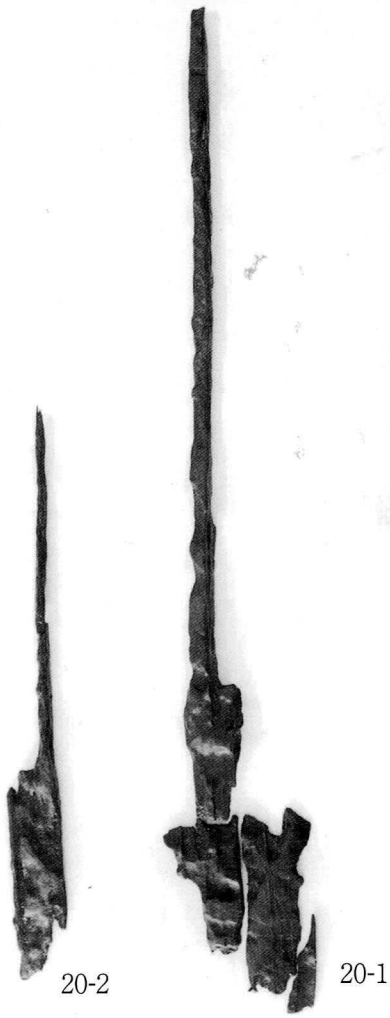


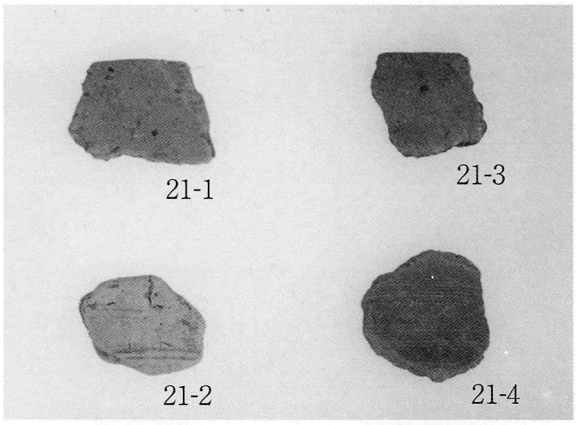


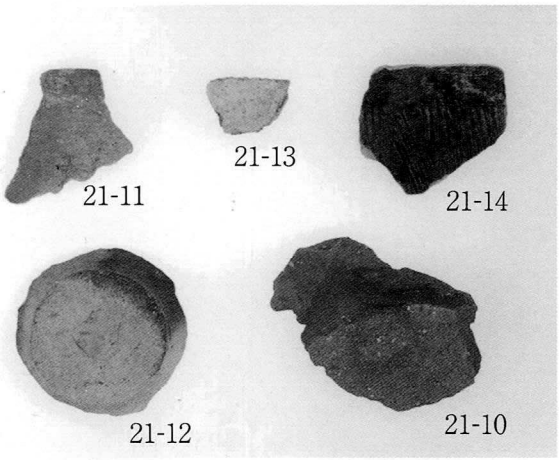


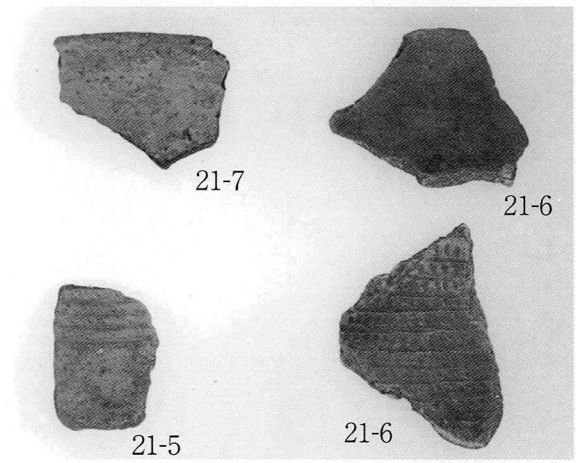


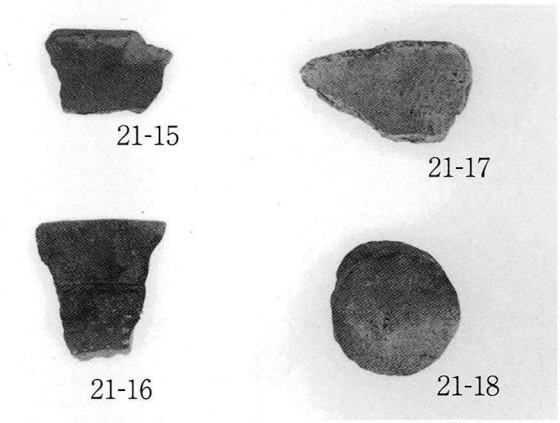
19-17・18・19・20

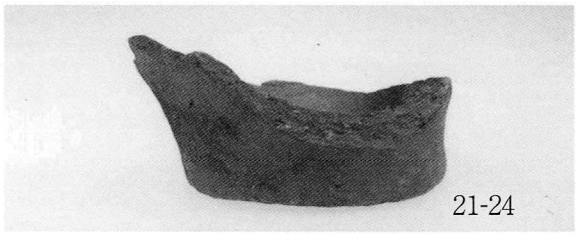


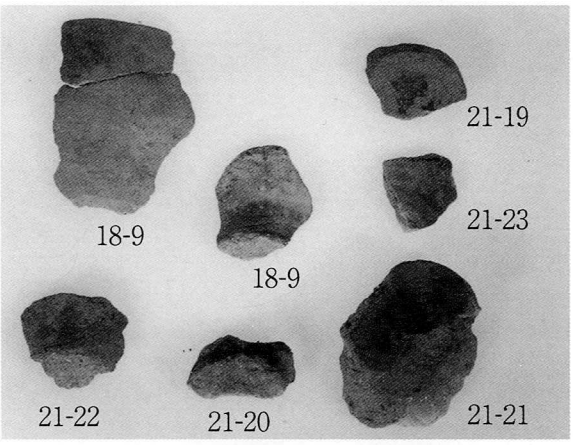

21-1
21-3
21-2
21-4

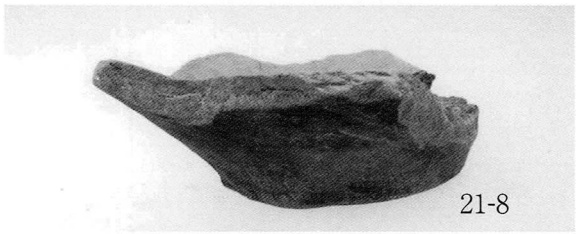

21-11
21-13
21-14
21-12
21-10

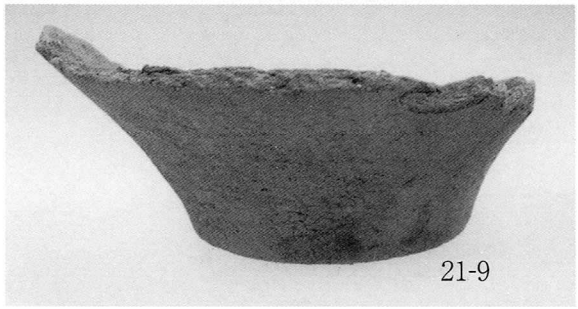

21-7
21-6
21-5
21-6

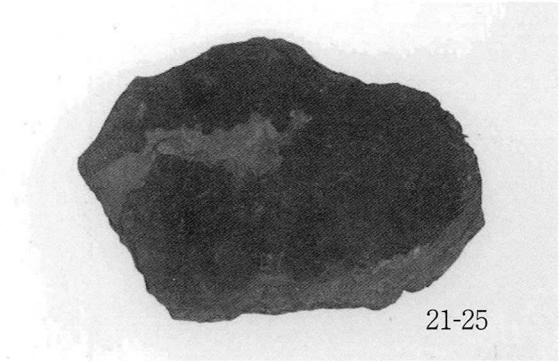

21-15
21-17
21-16
21-18


21-24

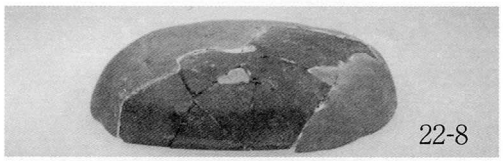

21-19
18-9
21-23
18-9
21-22
21-20
21-21


21-8

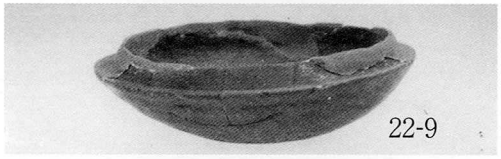

21-9

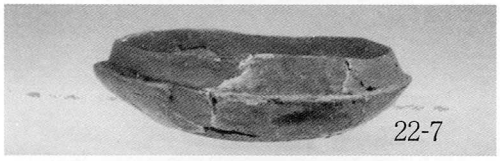

21-25

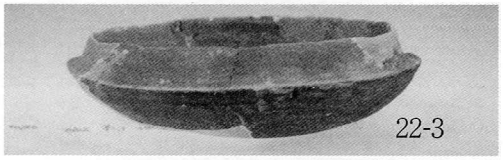
図版15　上層出土遺物

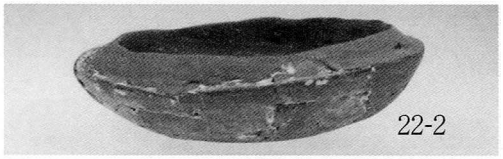

22-8

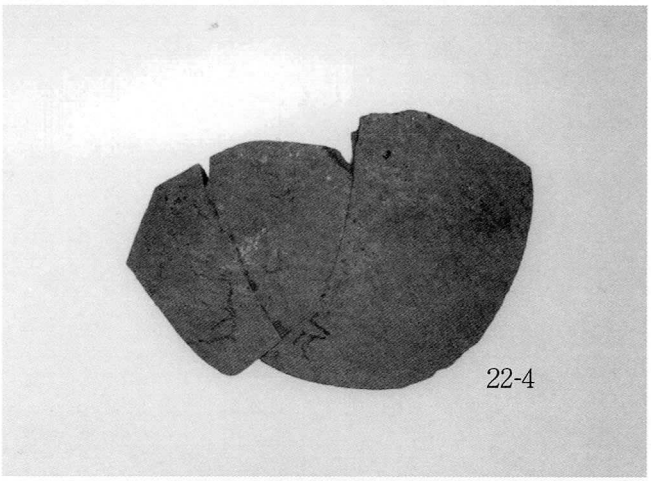
22-1

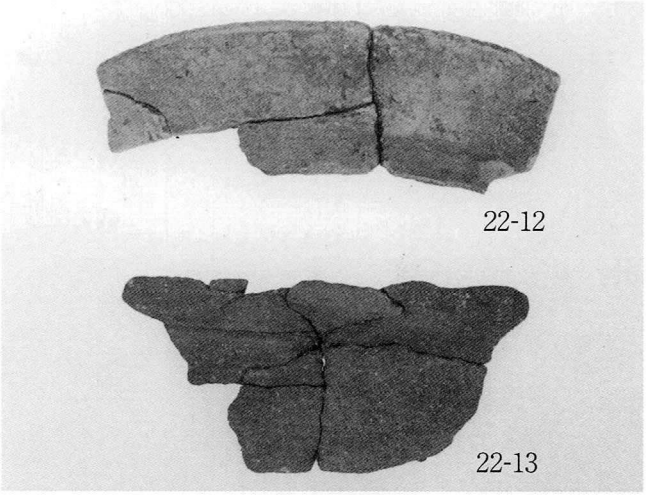

22-9


22-7

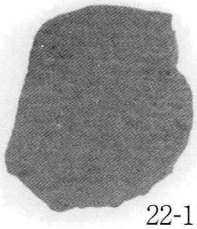

22-3

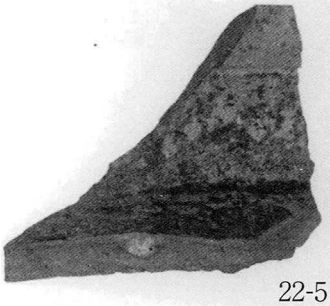

22-2

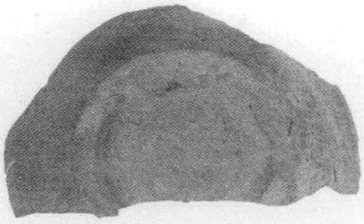

22-4

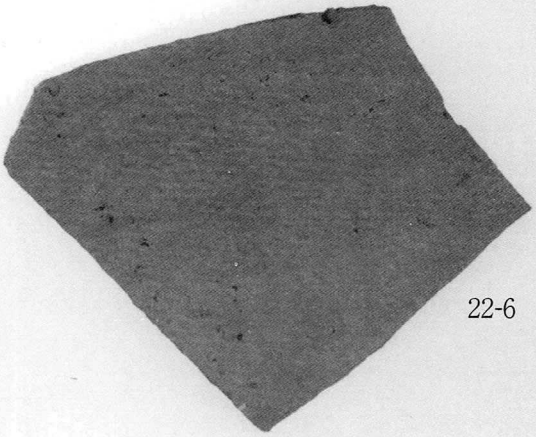

22-12

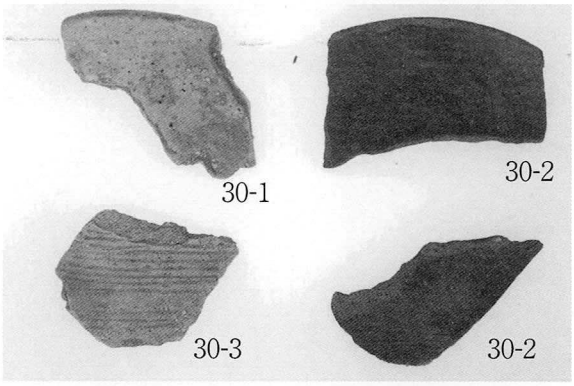
22-13

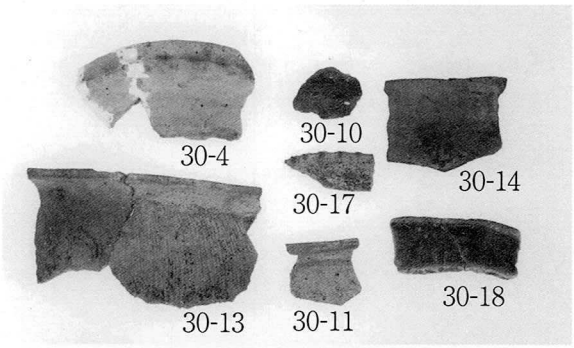

22-11

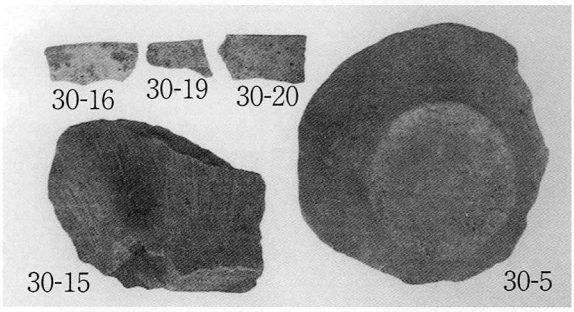

22-5

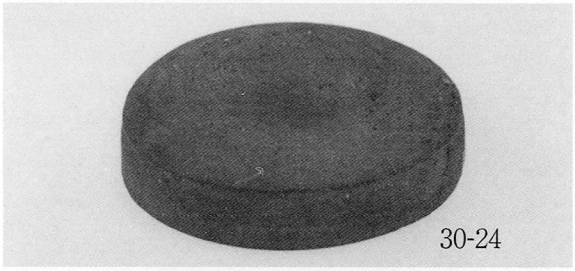

22-10

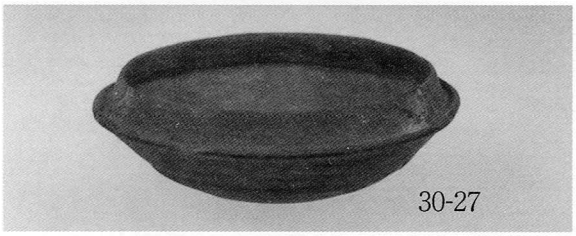

22-6

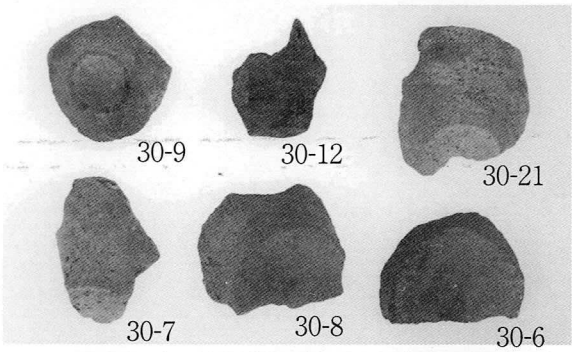

30-1
30-2
30-3
30-2

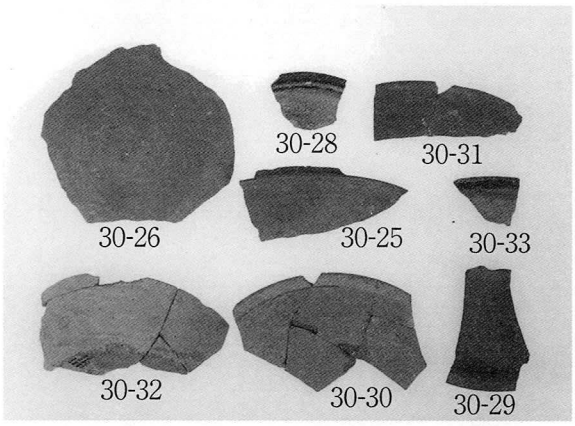

30-4
30-10
30-14
30-17
30-13
30-11
30-18

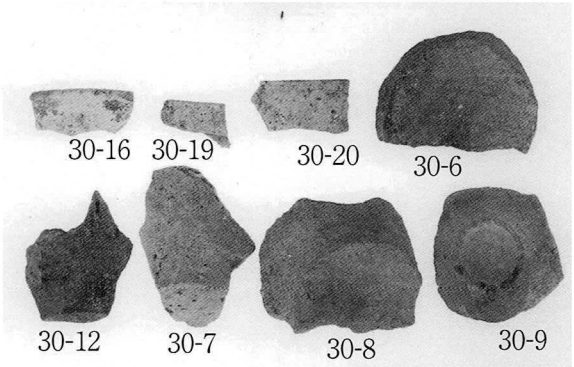

30-16
30-19
30-20
30-15
30-5

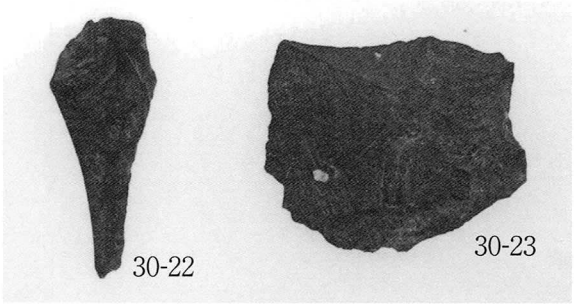

30-24

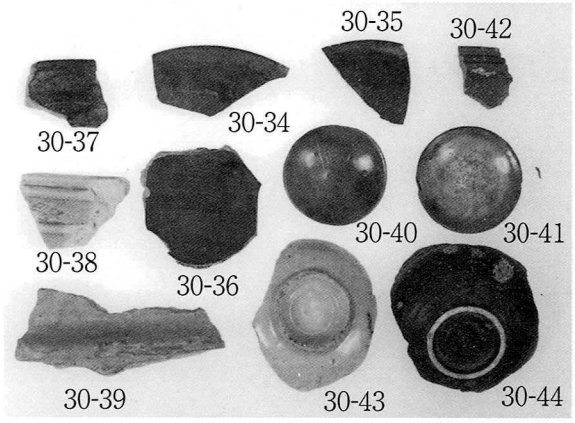

30-27


30-9
30-12
30-21
30-7
30-8
30-6


30-28
30-31
30-26
30-25
30-33
30-32
30-30
30-29


30-16
30-19
30-20
30-6
30-12
30-7
30-8
30-9


30-22
30-23


30-35
30-42
30-37
30-34
30-40
30-41
30-38
30-36
30-39
30-43
30-44

報告書抄録

ふりがな	ふるかわいせき
書名	古川遺跡
副書名	(仮称)門真市保健福祉センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	門真市埋蔵文化財発掘調査報告書　第6集
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	宇治原靖泰・角南聡一郎・松田朝由
編集機関	大阪府門真市教育委員会
所在地	〒571-0048　大阪府門真市新橋町34-21　TEL 06-6900-1818
発行年月日	1999年1月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふるかわいせき 古川遺跡	おおさかふかどまし 大阪府門真市 みどうちょう　ばんち 御堂町20番地	27223		34°44′27″	135°35′55″	1998.10.5 ～ 1998.11.1	695	保健福祉センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
古川遺跡	墓	弥生時代 古墳時代	方形周溝墓 10基以上 溝 2条	弥生土器、石包丁 サヌカイト剥片 鋤、土製品 土師器、須恵器	北河内 最古の方形周溝墓群

古川遺跡　(仮称)門真市保健福祉センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1999年1月31日　発行

編集発行／門真市教育委員会
〒571-0048 大阪府門真市新橋町34-21
(☎06-6900-1818)

印刷／幸和印刷株式会社
〒570-0062 大阪府守口市馬場町3丁目11-13